
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s ~三人のストライカー~

クルセイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のストライカー～

【Nコード】

N5976N

【作者名】

クルセイド

【あらすじ】

やる気のないライト。

のんびり屋のロープ。

しっかり者な隼人。

全く違う三人は、仲の良い親友であった。

ミッド臨海での空港火災。

あれから四年の時が経った。

そして、機動六課という名の歯車が、ついに廻りだした。

主人公は三人にしてみました。三人の関係は、なのは達三人と似たような関係。魔法少女リリカルなのはストライカーズの第一話から始まります。三人は、どう物語に関わってくるのか………

プロローグ（前書き）

約束をした。

とても小さな頃の約束。

その約束は守られることはなく、守れなかったことを後悔しては、立ち止まった。

過去の絶望は少年達を立ち止まらせていた。

それでも時は流れー！……

少しずつだがー！……

確実に――…

少年達を――…

前へと進ませる。

今、運命の歯車が、廻りだす。

それは少年達にとって、幸か、不幸か……

魔法少女リリカルなのはStrijers 三人のストライカー
、始まります。

プロローグ

――四年前。

ミッドの臨海地区。

ある密輸物が原因で起こった空港での火災は、あっという間に全体に広がって、近隣の陸上部隊も航空隊も緊急召集される、大事件になった。

その時、陸士部隊で指揮官研修をしていた、八神はやて一等陸尉が、前線指揮で救助活動に参加。

休暇を利用し、八神はやてのもとに来ていた高町なのは一等空尉、フェイト・T・ハラウン執務官も救助に参加。

結果、奇跡的に死者は零という形に終わることに成功した。

しかし、その事件の裏では、密かにこの救助活動に参加し、人知れずたくさんの人々を救った三人の魔導士がいた。

その三人の活躍は、八神はやて、高町なのは、フェイト・T・ハラウン以上と言っても過言ではない程だった。

だが、ある理由でその三人の名が、表舞台にあがることはなかった。

それでも三人はそのことについて、それを命じた上司に文句を一切言わなかった。

デスクにある、藍色の真珠がそう言った。

「クルセイド？こついつ時はね、事実を言うんじゃないで、ただ慰めてくれればいいんだよ？」

『そついうものですか？』

「そついうものさ」

『……………考えておきます』

「そいつは……………ありがと……………よつと！やったっ！ついにできたあつ！！！」

椅子から立ち上がり、両手をあげて歓喜する男。

「後はこれをジジイの所に持ってけばゆっくり眠れる……………てか、あれだけの仕事、徹夜したとはいえ、たった十日でよく終わったな。自分でもびっくりだ」

男が処理した仕事の量は、普通にやれば一ヶ月分はあっただろう。

つまり、この男はそれだけ優秀なのだ。

「たった十日でやれって言うジジイもジジイだ。これ俺じゃなかったら終わらなかつたぞ……………まあいい。これを出せば、二日休みがもらえる……………その全てを睡眠に————…」

「何寝ぼけたこと言っただよ」

別の男の声が男に話しかけた。

「んあ？何でお前が？」

「忘れたのか？今日は三人で街に出かける約束だっただろうが」

「……………俺十日徹夜なんだけど？」

「知らん」

「……………今、何時？」

「十一時」

「出かける約束の時間は？」

「十一時」

「……………一時間」

「駄目」

「一時間」

「無理」

「せめて30分……………」

「お前が寝たら次の次の朝まで起きないだろうが」

「……………最悪だ」

男はそう呟いた後、さっきまでやっていた仕事のデータを、彼曰くジジイに送り、部屋を出た。

*

「あゝだるい」

整備室の前に、さっきの男が寝転んでいた。

「つーか、何でこうなる……………今頃ベッドにダイブのはずが……………」

整備室の中を見ながら、そうぼやく。

「うるさいぞ。てか、そんな所で寝転がるな。行儀の悪い」

「お前は俺の母親かよ……………てか怒られるって、あのジジイにか？」

「ああ。そつだ」

「……………そのジジイのせいで、僕はこうなったんだが？」

「お前のその性格は先天的なものだ。治しようがない」

「そつちじゃねえっ！」

起き上がって突っ込む男。

「何だ、まだ元気じゃないか」

「残念ながら、今ので全体力を使った。よってこれから睡眠をとる。おやすみ……………？」

「寝るの早いな……………まあいい。起きないなら、ジャーマンスープレックスをくらわせて起こせばいいし」

「ンな起こされかたしたら死ぬわっ！」

「何だ起きてるじゃないか」

「しまったあっ！」

……………この二人はいつまで漫才をやるのだろうか？

しかも、さつきは街に行くと言っていたはずなのに、何故整備室にいるのだろう……………

「だあぁっ！埒があかねえっ！おいローツ！さっさとしろっ！お前待ちだぞっ！」

「確かに遅すぎるぞ。何時までメンテナンスしてるつもりだ？」

二人がそう言うと、整備室にある機械類の一つの下から、全身を油で汚した、ツナギを着た男が現れた。

「ちょっと待つてよお。もう、ライトも隼人もせつかちなんだから……」

「お前が時間にルーズすぎんだよっ！！」

ライトと隼人と呼ばれた男たちが、同時に突っ込む。

「え？そうかな？」

「自分で気付いてないのかよ……まあいいや。とっとと行こうぜ」

「そうだな。三人揃うのも久しぶりだから……」

「そうだったけ？」

「そうだよっ！最後に三人で集まったのは、三ヶ月前が最後だな」

「もうそんな経ってたんだなあ」

「お前も気付いてなかったのかよ……」

「あいにく同僚との追いかけてここに忙しくて、それどころじゃなかったよ」

「……仕事さぼるなよ」

「怖いもんだよ？リボルバーナックル片手に追いかけてまわされるのは」

「そ、それは……」

「リボルバーナックルかぁ……一度作ってみようかな」

「出たよ機械オタク。どんだけ好きなんだよ」

「そんな言い方はないだろ。それにこの技術を教えてくれたのライトじゃん」

「忘れた」

「ええ……」

「もういいだろ。さっさと行くぞ。んで、さっさと帰るぞ」

「ああ。そりゃ無理だ」

「……は？」

「だから無理なんだよ。実は隊長の娘の……」

「あいつのリボルバーがとつとつ壊れたのか？だとしたらさしばらくは仕事がさぼれるな」

「違う。もう一人の方だよ」

「?あいつがどうかしたのか?」

「今日、陸戦Bランクの昇格試験をやるらしいんだ」

「……………それで?」

「土産持って様子見てこいってさ」

「あんの親馬鹿があつ!何が二日休みをやるだつ!全然休ませる気ないじゃねえかつ!」

「まあそう言うな。お前だつて気になるだろ?」

「そんなことより昼寝を優先したい」

「お前な……………一応お前の弟子の昇格試験だぞ?」

「一応、な。ただちよつとだけコツとかアドバイスしただけだよ」

「でもそのおかげで結構のびてたよね」

「ああ。あいつもとから才能あつたんだろうけど、その使い方知らなかったみたいだからな。それを引き出した時点で、師匠みたいなもんだろ」

「ん〜。そう言われると、なんだか行くしかないような気がしてきた……………」

「だろ?」

「俺って単純だなあ」

「ライトはひねくれてるだけだよ。ホントは気になってたくせに」

「……………バレバレか」

「じゃあさっさと行くうぜ。急がないと土産買う時間がなくなってしまっ」

「そうだな」

「うん」

「あ、ロー。お前は着替えてシャワー浴びてこい。その間に土産買っとくから」

「わかった」

「あいつのことだから、どうせ食い物でいいだろ？」

「うん……………それもそうだな」

そう言って、ローはシャワー室に、ライトと隼人は街に出た。

この日をきっかけに、自分達が大きな、とても大きな事件に巻き込まれるとも知らず。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

よければ感想などを書いてくれれば嬉しいです。

第一話 はじまりの時（前書き）

やっとの思いで手に入れた休暇は、親馬鹿な上司のせいで、あっという間になくなった。

いくら何でも、今回はひどすぎねえ？

そんな疑問すら、隼人とローは無視するし……

はあ。

もしこれで、あいつが合格しなかったら、最悪だな。

まあ祈るとしよう。

我が愛弟子の成長と、試験の合格を……

第一章 はじまりの時

T A K E
O F F

第一話 はじまりの時

——試験会場。

そこを空から見下ろすヘリコプターが一機。

フェイト・T・ハラウンと、八神はやてが乗っているヘリだ。

そこから二人は、今回の受験者を観察していた。

地上には高町なのはもいる。これだけの面子のなか行われる試験は、まずないだろう。

そんな中で、肩で息を切らしながら、受験者達を見ている男たちがいた。

「はあ……はあ……」

「な、何とか間に合ったね」

「あ、あり得ないほどとばしたから……い、息が」

ライトたちだ。

ライトたちは、試験の邪魔にならない程度離れた、ビルの一角にいた。

もちろん許可はとってある。職権乱用なんて知るかつ！

「にしても、スバルがBランクにねえ……前までこんなにちっちゃかったのにな」

「子供はすぐに成長するもんだ」

「何だか隼人、年寄りみたいだよ？」

「う、うるさいっ！」

「おっ、始まるぞ」

ローの言葉に怒る隼人を無視して、表示されている画面を見て、ライトが呟く。

「さて、お手並み拝見といきますか……」

*

「おお。早速始まってるなあ。リンもちゃんと試験官してる」

へりのドアを全開にして、下を見ているはやてが呟く。

「はやて、ドア閉めないと危ないよ。モニターでも見られるんだから」

へりの後部座席に座るフェイトが、はやてにそう言う。

「はい」

返事をした後、はやてはドアの横についているボタンを押し、ドアを閉めた。

はやてが椅子に座った途端、いくつものモニターが映し出された。

その画面には、今回の受験者二人も映っている。

「この二人が、はやてが見つけた子達だね」

「うん。二人共、なかなかのびしろのあるええ素材や」

「今日の試験を見て、いけそうなら、正式に引き抜き？」

「うん。直接の判断は、なのはちゃんにお任せしてるけどな」

「そっか」

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下で、教え子になるわけやからなあ」

「そうだね。それより、よく見学を許可したね？」

フェイトが不思議そうに聞く。

「ああ。あの三人か？」

「そう」

「私も無理って言おうと思ってるけど、ナカジマ三佐に頼まれてん。あの三人を見学させてやってってくれって」

「ナカジマ三佐が？」

少し驚いた顔をするフェイト。

「うん。何でも、飛びつきり優秀な三人らしくて、今回の受験者の、スバルの兄貴分でもあるらしいねん」

「108部隊の優秀な三人……それってもしかして」

「多分、そうやるなあ」

「じゃあ、あのローブ・ランゼル執務官も？」

「おるやるなあ。確か、フェイトちゃん、一度会って見たかったんやっただけ？」

「うん。ローブ執務官の働きはすごいからね……会って一度お話ししてみたかったの」

「まあ私も、九弦院隼人くげんいんはやと捜査官には、一度会って見たかったからなあ。その気持ちわかるわ」

「誰でも一度は会ってみたいって程有名だもんね。“スリーストライカーズ”は」

「108部隊出身の、数年前に突然現れた天才三人……過去の詳しいデータはどこにもないし、ナカジマ三佐も教えてくれへんかった」

「三人とも、それぞれ違う役職だけど、108部隊一のストライカーと呼ばれるくらい有名なのね。詳細を知ってるのは、ナカジマ三佐だけ……」

「そういえば最後の一人については、どんなことをやっていたのかも、データには乗ってなかったな」

「一応、戦技教官だよな？名前は……」

「ライト・エリシオン一等空尉。それ以外一切わからん謎の男や」

「でも、いくつもの事件を解決してるんだよね？」

「せや。噂では執務官に捜査官、陸士部隊のと航空隊の救助隊に入ってたとか。さらには内戦地区での戦争を終わらせた男とか」

「救助活動のどの部隊からも、敬意と尊敬の眼差しをつけるくらい有名……なのに肩書きは戦技教官。二つ名は……」

「姿なき英雄」クリアストライカー。108部隊の最強のエースストライカーにして、“スリーストライカー”の三人の、リーダー……」

「幼なじみなんだっけ？その三人」

「せや。私達と、結構似てるよな。境遇とか立場とか」

「うん。私はローブ執務官に、はやては隼人捜査官に、そしてなのはライト一等空尉に、それぞれ憧れてるくらいだもんね。今まで会えなかったのも、まるで運命みたいに感じるね」

「せやなあ。でも今日やつと会える。楽しみやなあ」

「ふふつ。私もだよ」

「ライト一等空尉の姿も、やっと拝めるなあ……」

「本当に……どんな人達だろうね」

「この試験が終わったらわかるやる……」

「そうだね。それより、この話はここまでにして、今は試験に集中しよう」

「せやな。この二人は合格するかどうか……」

二人は話を止めて、モニターに集中した。

試験開始まで、後少し……

ビルの一角に、モニターを操作している、茶髪をサイドテールにして結んでいる女性、高町なのはがいた。

次々に建物などの映像が現れる。

『範囲内に生命反応、危険物の反応はありません』

なのはの首にぶら下げている赤くて丸いデバイス、レイジングハートがそう言った。

『コースチェック、終了です』

「うん。ありがとう、レイジングハート」

コースチェックをしたレイジングハートにお礼を言うのは。

「観察用のサーチャーも、障害用のオートスフィアも設置完了。私達は、全体を見てようか」

『イエス、マイマスター』

なのはの顔は、嬉しそうに緩んでいた。一つは、昔自分が助けた、スバル・ナカジマの試験に立ち合えたこと。もう一つは……

*

「へえ。スバル結構できるようになったね」

モニターを見ながら、ローが呟く。

「まあまだ序盤だからな」

「油断はできないだろうな。スバルもティアも」

「あれ？お前スバルの相方知ってんの？」

「ん？ああ。前に陸士部隊の救助隊にいた時、スバルと一緒にやったことがあってな。その時に少しな……士官学校からの付き合いらしいぞ」

「へえ。どつりであんなにコンビネーションがいいわけだ」

「けど、まだわかんないよね」

「ああ。最後に出てくる大型のオートスフィアがあるからな……」

「今のスバルじゃきつくない？」

「俺も同意見だ。ライトは？」

「……………普通に考えたら、今のスバルには無理」

「やっぱりかあ……」

少しローが肩をおとす。

「あくまで、普通に考えたらだけど」

「え？」

「あいつは土壇場で実力を発揮するタイプだからな。それに今は頼もしい相手もいる……俺の予想では、いけるよ」

「師弟の信頼、か？」

「違う。あくまでそうなるって予想だ。それにスバルならきつとやるさ。一つ不安はあるけど……」

「？」

「ま、杞憂であることを願うがな」

そう言つて、ライトはモニターに目を戻した。

モニターでは、スフィアの集まっている場所に、ティアナの銃の口が、天井にささり、どんどんロープが縮まっている所だった。

「あれじゃ集中砲火だよ」

「いや、あれは……」

隼人の眩きと同時に、ロープが縮みきった。

そこに集中砲火するスフィアたち。

そこにあつたのは……

「……………銃だけ？」

『「おー」』

モニターからカウントダウンの音が聞こえる。

『「よん！さん！」』

それと同時に、スフィアが次々に破壊されていく。

まるで見えない何かに破壊されるように、次々と。

「……………成る程ね」

ロープがわかったように眩いた。

「確かにクリアできるかもね、この試験」

「だろ？」

モニターでは、何もないところから、いきなりスバルが現れた。

さっきまで、ティアナの幻術で、姿を隠しながら攻撃していたのだ。

スフィアたちがそれに気付き攻撃するが、それを全てよけるスバル。

スバルのリボルバーナックルが回転を始めた。

『にー！いち！』

スバルが跳んだ。それに続き、ティアナも姿を現した。

『ぜろっ！クロスファイアー……』

『リボルバー……』

『シュートッ……』

ドゴオンッ！

スフィアが全て破壊された。

「さて……ここからだな」

それを見ていたライトは、その一言を呟くと、空を仰ぎ見て大あくびをした。

*

「成る程。これは確かにのびしろがありそうだね」

へりの中で見ていたフェイトが呟く。

「ふふん。そやる？」

「残るは、最終関門」

*

「イエーイ！ナイスだよティア！一発で決まったね！」

スバルがターゲットを壊しながら、嬉しそうに言う。

「ま、あんだだけ時間があればね」

銃を回収しながら、ティアナが答える。

「普段はマルチショットの練習率、あんま高くないのに……ティア
はやっぱり本番に強いなあ」

「うっさいわよ。さっさと片付けて次に……あっ」

ティアナは言葉を止めてしまった。

何故ならスバルの後ろに、仕留めそこねたスフィアがいたからだ。

「スバル防御！」

とっさにスバルを突飛ばし、なんとかスフィアの攻撃をよける二人。

その後、二手に別れて攻撃を分散させる。

攻撃をよけながら反撃するティアナ。

グキ

「あぁっ！」

鈍い音をたてた後、ティアナが小さく悲鳴をあげて倒れた。

足を瓦礫に引っかけたのだ。

「ティア！」

スバルが叫ぶ。

だが当然、それに答える余裕はティアにはなく、転がりながらスフィアの攻撃をよける。

体勢を立て直した後、スフィアに向かって二発魔力弾を撃つ。

一発はスフィアに当たり、もう一発は……監視用サーチャーに当たった。

*

「ん？何や？」

画面がいきなり見えなくなり、少し焦ったような声をあげるはやて。

「流れ弾がサーチャーに当たったみたいだったけど……」

冷静に分析するフェイト。

その後も、二人で画面を操作したが、もどには戻らなかった。

*

ピッピッピッ。

素早く画面を操作するなのは。

しかし画面はもとには戻らない。

「トラブルかなあ……リイン。一応様子を見に行くね」

『はいです。お願いします』

『私もセットアップしますか？』

なのはとリインの会話を聞いていたレイジングハートが、そう言う。

「そうだね。念のためお願い」

『オールライト。バリアジャケットスタンドアップ』

瞬間。レイジングハートが辺りに桃色の光を放った。

*

「あんの馬鹿……」

頭を右手でかかげ、空を仰いでライトが呟く。

「試験中に油断なんかしゃがって……」

「確かにあれはねえ……」

「実戦だったら死んでたな」

「やっぱり杞憂に終わらなかったかあ。あいついつつも気を抜くくせあるからなあ……はあ。誰に似たんだか」

「師匠じゃないのか？」

「だったらギンガに似たんだな。シューティングアーツの師匠はギンガだから」

「そのギンガに教えたのはお前だろうが」

「いやいや。それ言うんだったらローもだろ」

「僕はたまにしか教えてないよ？」

「やっぱりお前が原因だな」

「うう……はあ。まあいいや。俺様子見てくるわ」

そう言って、ライトは首にぶら下げている藍色のデバイス、クルセイドを手に持った。

「おいおい。試験中は、関係者以外立ち入り禁止だぞ？」

「なあに言っただ。スバルは身内みたいなもんだ。ばりばり関係者じゃん」

「いやだから試験の……………」

「クルセイドハーツ、セットアップ」

『イエス。バリアジャケットスタンドアップ』

藍色の光がライトを包む。

「ほ、本当に行く気がっ!?!」

「つたり前よお。お前らはそこにいろ。映像はクルセイド通して送るから、心配すんな……………」

そう言いながら、どんどん隼人たちから遠ざかっていくライト。

(さて、スバルはっ……………)

「ん〜、いないなあ」

地上を見回しながら、そう呟くライト。

《どうだ?いたか?》

念話で隼人がライトに、聞いてくる。

「いんや。まだ見付かってない」

《早く見つけろよ》

「過保護だなあ」

《それはライトもだと思っけどね》

「ロー、それはお前もだぞ……………おっ、いた」

《本当か!?!》

ライトの言葉に、念話で叫ぶ隼人。

「本当だよ。建物から出てきたから、そっちのモニターでも見られるだろ」

《本当だ……………あれ?ティアナだけ?》

「ああ。ティアしかない。スバルは……………あ、いた」

《何!?!どこだ!?!》

「隼人うるさい。今はスバルは集中してるみたいだな。魔力をためてる」

《……………最終関門に使うつもりか?》

「それしかないだろ。そうでもしないと、この関門はクリアできないよ」

《だよな。それより戻ってこなくて大丈夫？》

「平気平気。邪魔しなきゃ問題ナツシング」

そんな会話をしている間に、スバルとティアナは、すでにゴールに向かっていた。

「って一番の見所逃したあつ!!」

《すごかったよ。デイバインバスター》

「お前らは見たんだな……ん？おいおい……」

《どうした？》

「いや別に。ただ馬鹿が暴走してるから、止めてやるか、って話だ
「よ」

《……成る程。頼んだぞ》

「へいへい。クルセイド、ローティカルフィールド」

「それだけでいいんですか？」

「後は関係者が何とかしてくれるさ」

「分かりました。ローティカルフィールド」

ライトのデバイス、杖の先についた藍色の玉から、黒い光が放たれた。

*

「うわあああああああああつ!!」

なのはの眼下では、スピードを出しすぎて悲鳴をあげている、スバルとティアナがいた。

「アクティブガード。ホールディングネットもかなあ」

『イエス。アクティブガード&ホールディングネット』

スバルたちがゴールし、そのまま遮蔽物に向かって突っ込む。

「……………え？」

なのはが驚きの声をあげる。

スバルたちが突っ込んだことにじゃない。

スバルたちがゴールした直後、どこかから放たれた黒い光が、スバルたちに当たった途端、急に速度が落ちたのだ。

「今のは一体……」

*

「げっ」

スバルたちが突っ込んだのを見て、ライトがそう呟く。

「アクティブガードにホールディングネットって……俺が助ける必要なんてないじゃん」

瞬間。

ドオオンッ！

凄い勢いで突っ込んだ衝撃音が聞こえた。

《おいおい。大丈夫なのか？》

モニターで見ていた隼人がそう聞いてくる。

「問題ねえよ。ローティカルフィールドにアクティブガード、ホールディングネットまで使ってるんだ。あの程度で怪我するほつが奇跡だよ」

《だな》

「じゃあ、俺はこのまま様子を見てるよ」

《？何で？》

「馬鹿だなローは。スバルがシューティングアーツと魔法を始めるきっかけを作ったのは誰だ？」

《え？高町なのは一等空尉でしょ？何度もスバルに聞かされたからわかるよ》

「今その高町との感動の再会を果たしてるんだよ。出ていくのは野暮ってもんだ」

《へえ。ライトでもそついう気づかいするんだ》

「当たり前だろうが。それくらい」

《とが言っつて、本当は会ってスバルに抱きつかれるのが嫌なんだろ？》

「うっ」

《スバルはライトに一番懐いてるからねえ》

《昔から子どもに好かれるよな、お前》

「うるせえっ！俺はガキになんざ興味ねえっ！」

《いやそついう話はしてなかっただろ》

《そついえばライトって年上好きだっけ？》

「おうよっ！いつかミセスでマダムでセニョールなご婦人と結婚するんだっ！！」

《でも今までライトに告白した子、みんな年下だったよね？》

「言っなあっ！！」

《てかお前、前は女は同じ年以外信じないって言ってなかったか？》

《どうせいつものごとく適当に言ったんでしょ？ライトそつち方面に全く興味ないから》

「それだと俺がホモのように聞こえますが？」

《違っの？》

「違っわあっ！！」

《ま、漫才はこの辺にして、早くスバルのそこに行け》

「ん〜、行かないとスバル、後で知ったら怒るだろうなあ」

《ま、そつだろうな》

《話ももう終わってるみたいだしね。早く行きなよ》

「……………はあ。しゃあないか」

《僕達も今から向かうよ》

「はいはい」

そう言って、ライトはスバルたちのもとに降り立った。

*

「……………よつと」

ライトが地面に降り立つ。その場にいた全員がライトに注目した。

「ラ、ライ兄にい!?!」

スバルがなのはと出会えた感動でたまっていた涙いっぱい目の見開いて、ライトを見る。

「よお。久しぶりだなスバル」

「なつ、何で……………」

「お前ん所の親馬鹿なくそ上司が、十日間徹夜で働いた功労者に、

やっと与えられた貴重な二日間の休日を利用して、様子見てこいつ
て言ってきたんだよ。おかげで今にも倒れそうだよ」

「あ、あはは。ごめんね、ライ兄」

「謝るなら俺に眠る場所をくれ」

「ううっ……」

困っているスバルを見て、ライトはおかしそうに笑う。

「冗談だよ。会っていきなり抱きつかれるよりはマシだな」

「うう……ライ兄い……」

スバルがライトに抱きつく。

「あなた人の話聞いてましたかつ!？」

抱きついてきたスバルを引き剥がす。

「ライ兄い」

「あ〜もつっつさい!」

「あ、あの……」

なのはが戸惑いながら、ライトに話し掛けた。さすがにいきなりす
ぎる展開についていけないようだ。

「あ、わりいわりい。自己紹介しといたほうがいいか？俺は――
……」

「ライト・エリシオン一等空尉、ですか？」

「え？そうだけど……何で俺の名前――……」

「やっぱり……私は高町なのはです」

「ああ。話は聞いてるよ。スバルがいつつも話してたからなあ」

「ちよつ、ライ兄い！」

「何だよ。訓練の合間の会話でお前いつつも高町の話してたじゃん。
四年前に助けてもらったって」

「そ、そうだけど……」

「……あゝ。やなこと思い出した。あの時半狂乱になった隼人に八
つ当たりで殺されかけたんだった……」

「え？ライ兄達って確かあの時――……」

「わあーっ！わあーっ！わあーっ！」

いきなり大声をあげてスバルの口を塞ぐ。

「むーっ！むーっ！」

息ができずに苦しいので、暴れるスバル。

そのスバルの耳元に、ライトが口を近づけ、小声で呟く。

「お前忘れたのか？俺達はあの場所にいなかった。そういう話だったろ？」

「あつ。」「ごめん……………」

「もう絶対口滑らせるなよ」

そう言った後、スバルから離れるライト。

その後なのはに向けて片手をあげて、

「じゃあ、もう俺は行くよ。邪魔したな」

「え？もう行っちゃうの？久しぶりに会ったのに……………」

「これ以上ここにいたら、絶対倒れる」

「たかが十日ぐらいっ」

「お前ですら五日が限界だろうが…………あく駄目だ。さっき魔法も使ったし、かなり疲労がたまってるに違いない。なんか視界もぼやけてきたし…………あれ？スバルいつの間に分裂魔法なんて……………」

「ライ兄しっかりしてえっ！！」

ピタタタタタタタタタタタタタッ！！

「?どじろぞ」

「あなたは……私と会ったことはありませんか?」

「……ない、かな」

(ホントは一回あるけど、あれは会ったっていうよりは、見かけた、だよな)

「……そうですか」

残念そうな顔をするのは。

「?どつかで会ったっけ?」

「ううん。気のせいみたい。ごめんね、変なこと言って」

「いや別に。それより上の奴らに、降りてくるように言ったら?」
上にあるへりを指差してそう言う。

「……くらぶかあっ!」

ライトがいきなりその場をジャンプして叫んだ。

瞬間。

ドガアアン!!

「ええっ!?!」

驚きの声をあげるなのは。それはそうだろう。

ライトがいきなり叫びながらジャンプしたら、そこに二人の人物がすごい勢いで降りてきたのだ。

「お、今回はよけたな」

「さっすがライト！僕もそれくらい素早く反応できたらなあ」

「って、お前らはそのうち絶対俺を殺す！間違いなく殺す！てか殺す気だろっ！」

「いやだってゲンヤさんに言われてるんだよ。お前を怠けさせるな
って」

「だから常に緊張感をはってもらおうと……」

「それ違っつ！意味が絶対違っつ！」

「ロー兄、隼人兄、久しぶり」

「おうスバル。久しぶりだな」

「試験見てたよー。成長したよねー」

「えへへー。そう？」

「だが、自分の油断で、パートナーを傷つけてしまったことは、反省しろ」

「うん！」

スバルは、やってきた隼人とローに夢中だった。

(今のうちに……)

脱出を試みるライト。

「ライトくん？」

なのはが声をかけてきた。

「しーっ！今から悪魔三人から逃げ……」

「スバルーッ！あんたの兄貴が逃げ出そうとしてるわよー！」

ティアナがいきなり大声で言った。

「……………ティアナさん？」

「お久しぶりです、エリシオン一等空尉。お元気でしたか？」

一点の曇りもない笑顔でそう言うティアナ。

「さっきまでならまだ体の中に1%くらい元気があったかもな」

「今は？」

「おかげさまで、全てに絶望して、生气すらなくなつたよ」

「それはよかった」

「……………はあ。何で俺の周りにいる奴らはこんなのはっかなんだ？お前もそう思わないか？クルセイド」

『現実逃避に私を使われても困るのですが』

「だって周りに味方いないもん」

（前方にはオレンジの悪魔、後方には青い悪魔、左右は無駄に連携のとれた悪魔、帰ったらリボルバーナックルを片手にした悪魔……）

「どっかに天使とかいないかな？」

『なら高町さんはどうでしょう？美人ですし優しそうですよ』

「いやそっちの癒しは求めてないけど……………」

「ライ兄〜」

ギギギギ、と、壊れたブリキのオモチャのような軋む音を響かせながら、振り返るライト。

そこには、悪魔がいた。

「せっかく会えたのに帰るなんてひどいじゃあんっ！！」

また抱きついてくるスバル。

「だあああっ！！やめいっ！！こんなことがギンガに知れたら……」

……」

パシヤッ

「……………」

嫌な予感がした。

何となくだが嫌な予感がした。

本当に根拠なんてないけど、ものすっごい嫌な予感がした。

そう思ったライトが、音のしたほうを見ると、カメラ片手の隼人がいた。

「よし。これでライトはもう仕事をさばれないな。協力ご苦労、スバル」

「うんっ！約束通り後でアイスおごってね！」

「もちろんだ」

「安いなっ！俺の自由はアイス一つに負けたのか！？」

「いや、それってライ兄が……」

「仕事さばらなきゃいいだけだろ」

「だって俺の仕事量多すぎだもん。スバルは知らないだろうっけどさあ」

「どれくらい?」

「俺と同じくらいじゃないか?」

「それは俺のさぼった分をお前がやった場合だろ?」

「ああ。だが次から俺の仕事は少なくなりそうだよ。君は多くなるだろうがな」

「……ロー。あいつ殺すの手伝ってくれ」

「こっちにつけばお菓子をあげよう」

「ライト、悪いけど敵同士だね」

「……突っ込むの疲れてきたから、もう俺寝るわ」

「寝たらジャーマンスープレツ……」

「だから死ぬわっ!」

「ライトがその程度で死ぬわけないじゃん」

「普通だったら死ぬよ?コンクリに頭打ち付けられたら普通は死ぬよ?」

「ライ兄なら、ビルの上から飛び降り自殺しても生きてそうだよ」

「それはもはや人間じゃなくて化け物だな」

「あれ？エリシオン一等空尉は、女を襲う化け物だって……」

「ティアはさっきから俺に何の恨みがあるのか知らんが、取り敢えず違うからな」

「へえ。ライトくんってそういう人なんだ」

「高町も誤解しないでくれませんかねえっ!？」

皆から弄ばれているライト。哀れである。

「はぁ……………あ、そういえば何で俺の名前知ってんの？」

ライトがなのはに向かってそう問いかける。

「君は有名だからね」

「顔は知られてないはずなんだけどなあ……………ゲンヤのジジイか？」

「あ、やっぱりばれた？」

「だってそれ以外考えらんないだろ。今日ここに来るように言ったのも、どうせ何か裏があるんだろ？隼人」

「……………さすがにばれたか」

やれやれといった感じで、隼人がそう呟く。

「で、あの古狸は何考えてんだ？」

「それは……………」

ドゴオンー！

いきなりの爆音で、隼人の言葉は遮られた。

*

「……………あの三人が」

「スリーストライカーズ……………」

へりの中で、上から状況を見ていたはやとフェイトがそう呟く。

「……………何だか普通の人達やね」

「ふふ。そうだね」

三人やスバルたちの会話を聞いて、微笑みながら呟く二人。

噂では超人扱いの三人が、普通の人達みたいに、何でもない会話を
楽しみ、教え子や友達と戯れているのを、何だか微笑ましく感じて
いるのだ。

「…………あの三人、“六課”に入れたいなあ」

「でも、承諾してくれるかな？」

「……………多分無理やろなあ」

残念そうに呟くはやて。

「でも、一応でも声をかけてみたら？」

「……………そうやね、そうするわ。ありがとうなフェイトちゃん」

「ううん。気にしないで」

「でもそうになると、一つ確認せなあかんことがあるなあ」

「三人の実力？」

「正確には、ライト一等空尉の、かな。この人だけ、詳細なデータがないから」

「なら今から降りて……………」

「ううん。上から拡散弾クラスターを撃って、それをどう対処するか見てみる」

「え？でも……………」

「大丈夫。ただどう対処するか見るだけやから、危険はないよ」

「……………なるべく威力の小さい魔法にしてね」

「もちろんや。ほな、やるでえ」

そう言って、へりから出るはやて。フェイトもそれに続く。

そして、数発の拡散弾を作り、それをライトに向かって放った。

ドゴオン！

辺りを轟音に包まれる。

「……………はやて？」

「やばい……………少し威力が強すぎた」

あれに不意討ちで対応するのは、いくら何でも無理があるだろう。

「だ、大丈夫なの？」

「……………急いで向かうでっ！」

「わ、わかった！」

そう言って、二人は急いで地上に降りた。

*

「あゝ……ライトオ、生きてるかあ？」

粉塵のあがっているほうを見て、声をあげてそう問いかける隼人。

「返事がないねえ」

ローは全く心配せずに、そう呟く。

「え？ちよっ、ライ兄大丈夫なの！？」

スバルが慌てたようにそう二人に叫ぶ。

「さあ？」

「正直危ないかもね。不意討ちにあの威力じゃねえ」

「とうとうくたばったか。南無南無」

手を合わせてそう呟く隼人。

「ええええええっ！！」

「ほらスバルも。手を合わせて地獄にいるライトに——……………」

「勝手に殺すなあっ！そして何故天国でなく地獄！？」

粉塵の中から、叫びながら出てくるライト。

「おー。よく無事だったな」

「しかも無傷なんてねえ」

「俺だつて驚きだよっ！非殺傷設定の攻撃じゃなかったら死んでただろうよっ！」

「またまたあ」

「いやマジだからっ！謙遜でも何でもなく事実だから！それくらいはやばかったからっ！」

「でも、ライト無傷じゃん」

「どうせ使ったんだろ？じゃなきゃさすがに無傷はねえよ」

「だよねえ。それより今の攻撃なんだろね？」

「あー、それは……」

「すつ、すいませんっ！大丈夫でしたか！？」

上から、はやてが謝りながら降りてきた。

「大丈夫じゃねえ！死ぬかと思ったわ！！」

はやてに向かって叫ぶライト。

「え？うそ……」

はやての後に降りてきたフェイトが、驚いたように呟く。

「あれで………無傷？」

はやても驚いたように呟く。

「やっぱりさっきの、フェイトちゃんとはやてちゃんだったんだね」

なのはが二人に駆け寄りながら声をかける。

「う、うん。実力を見ようと思ったんだけど……」

「ちょっと威力が強すぎて………だから少しやばいと思ったら、無傷やし……」

「何か無傷でいた俺が悪いみたいに聞こえるんだが？」

「あつ、ちつ、違います！全部私が悪いんですっ！ホントにスンマセンでしたっ！！」

頭を下げて謝るはやて。

「あ、いや冗談なんだけど……」

「へ？………でも、さっきの拡散弾、下手したら……」

「あんなんで怪我してたら、毎日何回死んでるかわかんないよ」

そう言つて隼人とローを指差す。

「おいおい。誤解を招く言い方するなよ。ただ単に、仕事さぼるお前に、仕事が非番のときに喝を入れるだけだろ？」

「デバイス片手に『殺すぞ？』つて脅すのが、最近の喝の入れ方なのか。こりゃびつくりだな」

「びつくりだろ？」

「皮肉だよつ！！」

「まあ、こんな珍獣は放つておいて……初めまして八神二等陸佐。自分は、九弦院隼人と言います。階級は一等陸佐です」

隣で何か叫んでるライトを無視し、はやてに敬礼をしながら自己紹介をする隼人。

「あつ、八神はやて二等陸佐です。お噂は伺っております、九弦院捜査官」

そう言つて、はやても隼人に敬礼する。

「うーん、やつぱ苦手だなこういうのは……やつぱため口で話しか。それでいいか、八神」

「あ、はやてでかまいません、九弦院捜査官」

「なら俺も隼人でいいよ。それとお前もため口でいいから」

「あ、は……じゃなかった。うん、わかったわ。よろしくな、隼人」
「こちらこそ」

そう言って握手する二人。

「僕も挨拶した方がいいかな？」

「当たり前だろうが。もうちょっと礼儀を覚えろお前は」

「でもそこにいる珍獣に至っては、自分の上司にため口はおるか、喧嘩して差官されるような礼儀のれの字も知らないけどいいの？」

「残念ながら手遅れだ」

「お前らってほんつととうに失礼だよな」

「「事実だろ（でしょ）？」」

「否定はしない」

「しないんだ……」

呆れたようになのはが呟く。

「じゃあ僕も挨拶するかな。ローブ・ランゼルです。役職は執務官。よろしく願います」

敬礼しながらローが自己紹介。

「フェイト・テストロツサ・ハラオウンです。私も役職は執務官です。ランゼル執務官には、以前からお会いしたいと思ってました」

「僕もハラオウン執務官とは、一度会ってみたいと思ってたんだ。ああそれと、さつき隼人が言ってたけど、堅苦しい雰囲気って僕達苦手なんだ。呼び捨てとため口でいいよ」

「うん、わかった。よろしくね、ローブ」

「こちらこそ」

ローとフェイトも握手を交わす。

「何かあの四人、気があつてるみたいだねえ」

挨拶が終わった後、楽しそうにそれぞれ話しているのを見て、そう呟くライト。

「ライトくんは混ざらないの？」

そんなライトになのはが話しかける。

「ん〜。そういつお前は？」

「何か専門的な話してるからちょっとね……」

「成る程……俺は執務官も捜査官もやったことあるから、一応会話に混ざることできるけど……今はそれより寝たい」

そう言って伸びをしながら大あくびするライト。

「十日徹夜だったけ？」

「そう。少し気を抜くだけで夢の中に旅立てるよ」

「目の球磨もすごいもんね」

「そんだけ疲れてるってわけだ。だから俺は寝る。スバルの相手は任せたわ。あいつもそのほうが……………」？

話の途中で、立ったまま寝たライト。

「寝るの早いなあ……………あ、ギンガ」

「寝てないからリボルバーナックルで殴らないでくれえっ!!」

いきなり飛び起きて叫ぶライト。

「それに仕事はやってるし今日は休日だから寝ても問題ないと思うわけであってだから殴らないでくれるとありがたいというか……………」

怯えながら矢継ぎ早に弁明の言葉を紡ぐライト。

「大体お前の親父がこんな……………」

「え、えっと、冗談で言ったただけなんだけど……………」

「だから俺は悪くない……………って、今何て言った？」

「だから冗談なんだけど……………」

「……………帰る。こんなとこにいたら俺は寝ることができない」

そう言っただけをかえして歩きだすライト。

「え？ライ兄ホントに帰っちゃおうの？」

「ああ……………そろそろホントにヤバイ。過労死するんじゃないかと思っよ」

そう言うライトの足取りは、覚束なかった。

「だったら、ここの隊舎のベッド使えば？」

「ありがたい話だが、どうせ寝るの邪魔されるに決まってるんだ。帰って自室で寝る」

「帰っても一緒なんじゃない？」

「ふっふっふっ。甘く見るなよ高町くん。俺の自室は、超強力特殊結界をはってあるんだ……………そう。全ては睡眠のためにつ！」

拳を握り、熱く語るライト。

「滅茶苦茶無駄な魔力使ってるんだね……………」

「知ってるか？そうでもしないと、俺は一睡もできないんだ。こっぴどくでもない俺そのうち死ぬからな」

「ジャーマンスープレックスで起こされるの？」

「いやいや。そんなの序の口だって。一番酷かったのが、起きた時に模擬戦のど真ん中にいたときだな……………隼人はいつか殺す」

遠い目をしながら、爽やか笑顔でそう宣言する。

「あ、あはは……………大変なんだね」

「わかってくれるか？」

「まあ、仕事さぼるライトくんが悪いんだろっけどね」

「一日の内、約20時間モニターに向かってるんだぞ？さぼりなくもなるっつの」

「えっ！？ライトくんって戦技教官だよな？」

「……………まあ一応はな」

「だったら何でそんな……………」

「いろいろあるんだよ。いろいろ、な……………」

そう言うと、少しだけ寂しそうな顔をするライト。

「……………ライトくん？」

「何でもない。それより早く、スバルとティアに試験の結果を教えてください」

「……………あ」

「忘れてたんかいっ!」

「じゃはは」

「笑って誤魔化すな。スバルとティアが聞いてたら、啞然とした後にショックつけてるところだぞ」

「い、ごめん……………」

シユンとするなのは。それを見たライトは、ため息をついた後、頭をガシガシ掻いて、言った。

「あー、で、結果はどうなんだ?」

「不合格」

即答するなのは。

「やっぱなあ」

「わかってたの?」

「そりやなあ……………いろいろやっちゃったし……………でも実力も魔力も、すでにBランクはあるけど、いいのか?」

「それについては考えているから大丈夫。じゃあ、結果は場所を移して話すから、ついてきてくれるかな?」

「……………これ以上何に付き合わせるつもりだ」

「それは、後でわかるよ。じゃあ皆を呼んでくるね」

そう言っただけなのは皆に呼び掛けに行った。

(……………隼人とローのあの対応、やっぱり二人共何か知ってるんだな。さて、今回はどんな面倒に巻き込まれるのやら)

ライトにとってこういう時は、大抵面倒事に巻き込まれると、相場が決まっているのだ。

(……………しかも今回は、規模が違うっぽいなあ。エースオブエースに有名な執務官、さらには夜天の書の主……………はあ。)

「面倒くせえ……………」

そう呟いた後、ライトは大あくびをしながら、なのは達の所に向かった。

第一話 はじまりの時（後書き）

ゲンヤのジジイも、ローも隼人も何企んでんだか……

憧れの人に会えたスバルはご機嫌で俺に抱きついてくるし、有名な三人が俺達に話があるって言うし……

でもスバルたちって落ちたんだよなあ。その辺の采配はなのは頼みだけど、大丈夫かねえ。

あー、考えただけで眠くなってきたっ！

次回 魔法少女リリカルなのはStrikerS 三人のストライカー！

第二話 機動六課

Take Off

頼むから寝させてくれえっ！！

第二話 機動六課（前書き）

何かなのは達が話あるらしいけど……

何か嫌な予感がするんだよなあ。

かと言って逃げたら後が怖いし……

はあ。面倒くせえ……

かったるい……

億劫だ……

全部同じ意味だって？

そんだけだるいんだよ。

ゲンヤやロー達は、一体何考えてんだか……

まあ、俺の目的さえ達成できれば、どうでもいいけど。

それでは、魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のス
トライカー～第二話 機動六課

始まり始まり……。

第二話 機動六課

――四年前。

ミッドの臨海で起きた大規模な空港火災。

救助活動に参加したのは、災害担当と初動の陸士部隊、それに高町なのはと、フェイト・T・ハラオウン。

火災は見事に収まった。

その翌日。

八神はやては、ある決意をした。

それは、自分の部隊を持つこと。

災害救助に犯罪対策、発見されたロスト・ロギアの対策も、ミッドチルダ地上のの管理局部隊は行動が遅すぎる。

少数精鋭のエキスパート部隊。

それで成果を上げれば、少しは上の考えが変わるかもしれない。

そう考えたのだ。

それから四年後の、とあるロビー。

スバルにティアナ、それにライトたち三人が、フェイトからそのこ

とを説明されていた。

「とまあ、そんな経緯があつて、八神二佐は、新部隊設立のために奔走」

「四年ほどかかつて、やっとそのスタートをきれた。というわけや」

紅茶の入ったティーカップを、机に置きながら言うはやて。

そのはやての言葉に、リインが続く。

「部隊名は、時空管理局本局遺失物管理部、“機動六課”」

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導士が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「遺失物……ロスト・ログアですね」

はやての言葉にティアナが質問する。

「そう」

「でも、広域捜査は一課から五課までが担当するから、うちは対策専門」

「……………」

話を聞くうちに、段々今回ここに来た目的がわかり、隼人とローを睨み付けるライト。

(面倒くせえ…………ジジイは一体何考えてんだ？はやてと結構深い関係ってのは知ってるけどさあ……………はあ。やっぱり面倒くせえ)

そんなことばかり考えながら、さっさと話が終わらないかと思っ
ているライト。

ただでさえ眠くて、長い話を聞くのは苦痛なのだ。とっとと終わら
せたいのは当然だろう。

「で、まずはスバル・ナカジマ二等陸士。それにティアナ・ランス
ター二等陸士」

「「はいっ」「

どうやら説明は終わったらしく、やっと本題に入るようだ。

(“まずは”、ねえ)

これはつまり、ライトたちにも話があるということ。ライトは自分
の予想が外れであってくれと何度も心の中で祈った。

「私は、二人を機動六課のフォワードとして、迎え入れたいと考
える。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験はつめると思っ
し、昇進の機会も多くなる。どないやる？」

「あ、えっと…………」

「その…………」

「スバルは、高町教導官に、魔法を直接教わることができるし」

「は、はい」

「執務官志望のティアナには、私でよければアドバイスとか、できると思うんだ」

「あ、いえ。とんでもないと言いますか……………」

「……………はあ」

小さくため息をつくライト。もう自分の予想は100%当たりだと確信したからだ。

すると、全員目が一点に集中しているのに気が付いた。

見ると、なのはが書類みたいなものを持って、こちらを伺っていた。

「えっと、取り込み中かな？」

「ふふっ、平気やよ」

その言葉を聞くと、なのはははやての隣に座って、スバルとティアナに顔を向けた。

（何らかの処置はとるんだろうけど……………不合格には違いない。スバルもティアも落ち込むだろうな）

ライトはそう思いながら、机にある紅茶の入ったティーカップを持って、口をつけた。

(うまいなあ……………眠気が強すぎて味あんまりわかんないけど)

「取り敢えず、試験の結果ね」

「……………」

(二人共がっがちに緊張してらあ。結果がわかってるこっちとしては、何か複雑だが……………)

スバルとティアナを見て、そう思うライト。

「二人共、技術はほぼ問題なし」

スバルの顔が明るくなる。

(技術“は”、なんだよな)

「でも、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えています」

「あう……………」

「……………」

その言葉を聞き、二人共しゅんとする。

「自分やパートナーの安全だとか、試験のルールも守れない魔導士が、人を守るなんて、出来ないよね？」

ラインがなのはの隣で、うんうん頷いている。

(あれはユニゾンデバイス、だよな？よく出来てるなあ。階級まで
もらってるみたいだし、かなり大事にされてるんだな)

リインを見てそう思うライト。

「はい……」

なのはの言葉に、目を落としてティアアナが返事をする。スバルはず
っとおろおろした雰囲気だ。

(頼むから泣くのはやめてくれよ。後抱きついてくるのも)

そう願いながら、なのはの次の言葉を待つ。

「だから残念ながら、二人共不合格」

(あ、スバルが一瞬壊れかけた)

二人の反応を見て、ライトはスバルがちょっと過剰に落ち込みかけ
ていたが、何とか持ちなおしたことにホッとする。

「なんだけど」

「「えっ？」」

なのはの言葉に二人揃って声をあげる。

「二人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク
扱いしておくのは、かえって危ないかも……ってというのが、私
と試験官、それにライトくんの共通見解」

「おいおい。試験官でも何でも俺の意見なんか参考にしていいのか？」

「大丈夫だよ。君の意見は、私から見ても、充分なほどだったからね。だから君の名前もあげてみたの」

「そりゃ、どうも」

紅茶を飲みながら返事をするライト。恐らく照れ隠しだろう。

「ということで、これ」

そう言って、なのはは二つの封筒を机に置いた。

「特別講習に参加するための申請紙と推薦状ね。これを持って、本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に、再試験を受けられるから」

（成る程、ね。本局の奴らにしろいてもらって、再試験を受けろってことか）

「え……………」

「あ……………」

スバルとティアナが、なのはの顔と封筒を交互に見ながら、あわあわとしている。

《ん〜。こづい場合って、助け船とかだしたほづがいいかな？》

ローが念話で、隼人とライトに聞く。

《そうだな。だしてやれライト》

《何で俺なんだよ。それと、あんま甘やかすな。スバルだってもう半人前程度には成長したんだから》

《ふむ。一理ある》

《一理どころか百理はあるぞ》

《ライト、わけわかんないよ?》

《気にするな。それより、次多分俺達の話になるよなあ。ああ、面倒くせえ》

そう言った後、ライトは念話をきり、会話に意識を戻した。

「来週から、本局の厳しい先輩達にもしっかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよう。そしたら、Bランクなんて楽勝だよ。ね?」

そう言って二人に笑いかけるのは。

それを見て安心したように笑うスバルとティアナ。

「「ありがとうございます!」」

二人揃って頭を下げてお礼を言う。

「よかつたな、スバル」

隼人がスバルに笑いかけながら言う。

「うん！」

「合格までは試験に集中したいやろ？私への返事は、試験がすんでからってことにしとこか」

「「すみません！恐れ入ります！」」

立ち上がって敬礼する二人。

《………おめでとう、スバル。後でアイスおごってやるよ》

念話でライトがスバルにそう言った。

念話で言う理由は、ローや隼人にからかわれる原因になるからだ。

だから昔から、訓練の合間にアイスをおごる時は、ギンガにばれなように、よくこつしたのだ。

それをわかっているスバルは、顔を輝かせて、

《ありがとう！ライ兄！》

と、念話でかえした。

いきなり顔を輝かせたスバルを、ローと隼人以外は不思議そうな顔で見っていた。まあつまり、ローと隼人にはバレバレなのだ。

《やっぱりライトは優しいねえ》

《間違いなく、一番過保護なのはお前だな。ライト》

《やかましい!》

ライトはスバルを一瞥した後、なのは達三人に向き直った。

「で、スバルの話は終わったよな？次は俺達の番なんだろうけど、話って何だ？」

本当は何て言われるかはわかっているライト。でも建前で一応聞いておく。

はやてはライトの言葉を聞くと、一度頷いてから、口を開いた。

「多分何となくわかっていると思うけど……三人にも、機動六課に入って欲しいんよ」

「……………はあ。やっぱりか」

「駄目かな？」

フェイトがライトにそう聞くと、ライトは頭をガシガシ掻いて言った。

「面倒くせえからやだ」

ゴツンッ

隼人がライトを殴る。

「お前は本当に礼儀を知らんな」

「冗談に決まってるんだろがっ！」

「え？じゃあ……」

「おっと、勘違いすんなよ。まだ入るって決めたわけじゃないからな」

はやての言葉をライトは遮った。

「いくつか質問させてくれ。それを聞いてから決める。それでいいか？」

「うん。入ってくれる可能性があるだけで充分や」

「さいですか。じゃあまず一つ目。もし俺達はその部隊に入った場合、どの分隊に所属するんだ？」

「隼人は私のロングアーチに、ローブくんはフェイトちゃんのライティング分隊に、ライトくんはなのはちゃんのスターズ分隊に入ってると思うてるねんけど……」

「もう隊長も副隊長も決まっていて、フォワード陣も埋まってるんだ。そこに俺達が割り込むのは、ちょっとまずくないか？」

「その程度やったら、問題ないよ。皆そんなに心狭ないから、居心

地悪くもないと思う」

「わかった。じゃあ二つ目。部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総数は決まってるはずだ。そっちは既にオーバーSが三人いるんだ。そんな場所に俺達が入ったら、上が黙ってないぞ」

「後ろ楯はちゃんととってるよ。聖王教会と、クロノ・ハラオウン提督と、リンデイ・ハラオウン提督や」

「クロノが？」

「ん？クロノくんのこと知ってるん？」

「あゝ。まあ少しだけ……」

言葉を濁すライト。隼人とローも、どこか罰の悪そうな顔をしている。

「後、かの三提督も、協力をしてくれると、おっしゃってくれたわ」

「へ？ばあちゃんも？」

ゴツンッ

「お前な……」

「あ、わ、わりい。今のは俺が悪かったよ」

そう言って、殴ってきた隼人に、何とあのライトが謝った。

「三提督ともお知り合いなの？」

「あ……まあ、いろいろあってな。それより、最後の質問。これの返答次第で、俺は六課に入るかどうか決める」

「わかった」

はやてが少し緊張した面持ちで頷く。

「そう緊張するな。質問するのはお前じゃないんだから」

その言葉に、ローと隼人以外の全員が驚く。

「えっと……誰に質問するん？」

はやてがライトに聞く。

「……………隼人、ロー。お前ら、どっちに質問して欲しい？」

「隼人で」

「ま、妥当だな」

「ん。じゃあ隼人で」

その言葉に、更に驚く一同。

「な、何で隼人がローブくんに質問するん？」

「それは俺の質問を聞けばわかるよ」

そう言った後、隼人とローに、顔を向ける。

「お前らは、ゲンヤのジジイに何て言われて、俺をここに連れてきた」

「…………へ？」

全員、不思議そうな顔をする。それが六課に入ると、何の関係があるのか、と。

「ここに俺達三人が来たら、はやては確実に勧誘するって、ジジイはわかっていたはずだ。何でジジイは、俺を六課に入れようとしてんだ？」

その言葉を聞き、更に驚く一同。

「ナ、ナカジマ三佐がこの三人を、六課に？」

「お父さんが…………」

「…………はやて、何か聞いてる？」

「う、ううん。ただ単に見学に来るとしか…………この三人っていうのだって、直接会うまでは、只の予想やったし…………」

「あんたとゲンヤって、結構長い付き合いなんだろう？行動パターンくらい、予想出来たんだろ、あの古狸は」

「…………あの人やったらあり得るなあ」

「だろ？」

そう言った後、再びローと隼人を見るライト。

「で、あいつは何て言ってたんだ？」

その場に緊張が走る。隼人の答える一言によって、ライトが入るかどうかを決めるのだ。緊張しないほうがおかしい。

「……俺達に、はやてから誘われることを言った後、俺達の好きにしろって」

「……他にもあるだろ」

「ああ。お前に伝言がある」

「……何だ」

「ナカジマ三佐の言葉をそのまま伝えるぞ。『もうそろそろ、前に進め。六課はそのきっかけになるはずだ』、だ」

「……」

ライトの表情が、一気に険しくなる。

「……それだけか？」

「……ああ」

「……………そうか」

そう呟き、ライトは目を瞑る。

「……………はやて、さっきの返事をするぞ」

「え？あ、う、うん……………」

ライトたちの雰囲気、少し気圧されていたはやては、少し反応に遅れながら答える。

「入るよ。機動六課」

「！！ホンマか！？」

「ああ」

その言葉を聞き、驚きながら喜ぶはやてたち。

「ライ兄、本当に入るんだね」

「ああ。ただ、二つ条件をつけていいか？」

「できることやったらいいで」

「俺達が所属するのは、全員同じ分隊にしてくれ」

「え？それは……………」

「戦力の偏りなら気にするな。俺がいたいのは、俺達三人だけの、

新しい分隊を作ってくれってことだ」

「新しい分隊？」

「ああ。ロングアーチ、スターズ、ライトニングに次ぐ、四つ目の分隊。名前は……」

そこまで言った後、少し間を開けてから言った。

「ストライカー」

「四つ目の分隊……」

「ストライカー……」

はやてとなのはが呟く。

「相変わらずとんでもない発想をするな、お前」

「うるせえ」

隼人の言葉に、素っ気なく返すライト。

「一つ聞きたいんやけど」

「何？」

「その“ストライカー”分隊は、実行分隊？それともロングアーチみたいなサポート分隊？」

「どっちも違う」

「え？」

「ストライカーは、基本は他の分隊の補佐。俺がスターズの、ローがライトニングの、隼人がロングアーチの手伝いをするって感じだ」

「それやったら三人それぞれ……」

「いや、もう一つの条件があるから、それは無理」

「もう一つの条件？」

「ああ。俺達ストライカー分隊に、任務や仕事の強制は、なしにして欲しい」

「なっ!？」

「そ、そんなこと……」

「駄目に決まってる、だろ？あくまで任務と仕事だけだよ。出動の時は強制は当たり前前にオツケーだし、あんたらの働いてるところ見て働きたいと思ったら、自分から働くしな」

「……つまり、機動六課が自分達にとって相応しくない部隊やったら、手伝つ気はさらさらない、と?」

フェイトがライトに質問する。

「ああ、その通りだ。もしあんたらが、俺達から見て、上に立つに相応しいと判断したら、全力で手伝うつもりではある。だがもしそうでなければ……」

「……六課はすぐに抜ける？」

「本当、話が早くて助かるよ。で、どうする？もし自信がなければ、速攻でこの条件を断ってくれ。自信があるなら受け入れる」

はやては難しい顔をした後、静かに頷いた。

「了承、ね。あんた正気か？普通こんな条件のまないぜ？」

「出勤には参加してくれるんやろ？それに、あんたらに認めてもらえれば、積極的な協力も得られる。これほどいい条件もないと思うけど？」

その言葉を聞いたライトは、少し驚いた後、大声で笑いだした。

「ラ、ライ兄？」

「な、何で笑うん？」

「い、いやわりい」

笑うのをやめて、はやてに謝るライト。

「こりゃ大物だな、って思ってたさ。そんだけ言い切ったんだ。俺達を満足させるほどの部隊なんだろうな？機動六課は」

「当たり前や。絶対に自分から手伝いたくさせたるわ」

「言うねえ。こりゃ入るって言ったのは正解だったな」

「てか、お前ちつとも俺達の意見聞かなかったな」

隼人がライトを咎めるように言う。

「どうせお前ら、俺と同じ選択をしただろ？」

「まあねえ……」

「お前の選択は正しいよ。ま、まさかあんな条件だすとは思わなかったけどな」

「不服か？」

「まさか。大賛成だよ。俺だって、自分が認めた奴以外に従う気はないからな」

「僕は一日中機会いじれたらそれでいいけどなあ」

「俺は一日中寝れたら……」

「アホか。仕事ぶりを見なかったら、今の条件の意味がねえだろうが」

「せや！いくら何でもそんなしたら強制的に手伝わせるで！」

「冗談冗談」

「……………はあ。あんたがホンマにあの、救助隊の中では憧れの存在の、クリアストライカーなんか、って思ってしまうわ」

「クリアストライカー？」

ライトが首を傾げながら聞く。

「あなたの二つ名じゃない。まさかとは思っけど、知らないの？」

「ん〜。知らん」

「お前知らなかったのか？」

隼人が呆れながらライトに聞く。

「だってそれって、他の奴らが勝手につけた名前だろ？そんなの知るわけないじゃん」

「いや噂とか……………」

「あ……………そういえば、クリアストライカーっていう名前聞いたことあったな。何かあちこちで活躍してる英雄だとか……………まさか俺のことだったとはな。いやびっくりだ」

その言葉を聞いて、全員呆れたようにため息をつく。

「お前……」

「ありえへん……」

「これがあの英雄……」

「相変わらずですね……」

「ライトくんっていい加減だとは思ってたけど、ここまでなんて……」

「じゃあ三人揃って何て言われてるか……」

「いやさすがにそれは……」

「ん？何かあんのか？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「何で皆さん黙るんですかねえっ！……」

「だって……ねえ？」

「うん……」

「冗談だよっ！流石に知ってるよっ！……」

「じゃあ答えてみるよ」

「……」

考え込むライト。

(……クルセイド、今すぐ調べてくれっ！)

「クルセイドに念話で聞くなよ？」

(ばれたっ！？ま、まずい……どうする……え、えっと、三人で呼ばれる呼称だから……)

「わかったあっ！ずっこけ三人組だあっ！」

シーーーーン

「ひどいな」

「うん」

「というより、わかったって言った時点で知らないって認めてるよね」

「ギャグのセンスもいまいちゃったし」

「ごめんライ兄。フォローできないや」

「……………」

燃え尽きたライトに、全員が罵声を浴びせる。

「クルセイド、何か慰めの言葉をくれ」

『申し訳ございません。流石にあれのフォローは無理です』

「じゃあまだ罵声を言わないのは、ティア」

「ごめん、無理」

「言っとしたら罵声以外無理です」

「……………スバル。俺の味方はお前だけだ」

「ライ兄、そんな無茶ぶりされるのは困るんだけど」

「……………機動六課なんてだいつつきらいだあつ!!」

「うわっ、ガキかこいつっ!」

「隼人、もうおとなしく寝か（気絶さ）せたほうがよくない?」

「あれ?今気絶って言わなかった?」

「気のせい気のせい」

「うそだっ!お前絶対にー……」

「ゴッソッ」

「……………」

鈍い音と共に、静かになるライト。

「ふう。ようやくおとなしくなった」

「ちよつ、大丈夫なの？」

「ラ、ライ兄？生きてるう？」

「あー、今回はちよつとヤバいかもね。威力強すぎた」

「ええっ!？」

「地獄でも幸せに暮らせよ、ライト」

「……………か、勝手に殺すな」

白目をむいて、泡を口から出しているライトが呻くように咳く。

「あ、大丈夫そうだな」

「て、てめえ……………い、いつか殺す」

それを最後に動かなくなったライト。

「ほ、本当に大丈夫なの？」

フェイトが心配そうに隼人に聞く。

「大丈夫だよ。こいつの頑丈さは常軌を逸してるから」

「ま、まあはやてちゃんクワスターの拡散弾受けても無傷だったから、大丈夫

だとは思っけど……」

「ああ。あれ別にこいつが頑丈だからってわけじゃないぞ」

「ライトの稀少技能レアスキルだよ」

「え？ライトくんって稀少技能持ってるの？」

「うん。それもかなり異質の、ね」

「へえ。どんな能力？」

「それはお楽しみということぞ」

「ええやん。教えてよ」

「んー。実際に見たほうが早いよね。ライトの稀少技能は」

「ああ。そういう意味でもお楽しみってことで」

「ライ兄の稀少技能かぁ……」

「スバル。あんたなら知ってるんじゃないの？」

「ううん。話では聞いたことあるけど、使ってるのは見たことないから」

「ああ。そういえばこいつ、まだスバルに見せたことなかったんだっただけ？」

「そりゃ、あれは完璧実戦でしか使わないでしょ」

「いや、模擬戦でたまに使ってたぞ？」

「それって初めて戦う人との場合でしょ。僕達とやるときは……結構、というより毎回使ってるね」

「それはお前らが容赦ない攻撃を仕掛けてくるから、使わざるを得ないからだよ」

ライトが起き上がりながらそう言う。

「あ、ライト。起きたんだ」

「よく眠れたか？」

「ああ。おかげさまで綺麗な川と花畑を拝むこともできたよ」

「それはよかった」

ライトの皮肉を、いつものごとく軽く受け流す隼人。

「てか、マジで少し威力抑えろよな。俺じゃなかったら死んでるぞ」

「安心しろ。お前以外にはやらないから」

「俺にもするんじゃないよっ！！」

「はいはい。それより、さっきの問題はわかったか？」

「あ？さっきの？」

「俺達三人の呼称」

「……………ザ・地獄ブラザ……………」

「その先は言わなくていい」

「人のポケを途中で止めるなよ……………」

「いや、あれは止めるで普通」

「関西人だからって偉そうにつ！！！」

「何やと！？関西人馬鹿にすると痛い目みるでっ！！！」

「はやて、向こうのノリに合わせてなくていいから」

「そうだぞ。こいつのペースに合わせてたら、体がもたないぞ」

「だったら俺が寝てる時とか放つといってくれない？」

「それは面白くないからいやだ」

「……………はあ……………」

もはや諦めたらしく、またため息をつくライト。

「もう帰っていい？そろそろ限界だからさ……………」

「あ、うん。ごめんな、無茶させて……」

「いや……今後の詳細はゲンヤのジジイに送ってくれ」

「わかった。ナカジマ三佐によろしく言っというてね」

「ああ……」

「本当に大丈夫？今にも倒れそうだけど……」

「なのは、心配するなら枕をくれ」

「いやそんな同情するなら金をくれみたいと言われても……」

「今の俺には、枕さえあれば……」

「はいはい。それよりそろそろ本当に不味そうだし、早く帰ろっか」

「そうだな。スバル、もし六課に入るって決めたら、連絡してくれ」

「細やかながら、お祝いしてあげるよ」

「あ、あれは細やかっというのかな……」

前にスバルが陸士部隊の訓練校に入った時も、この二人は同じことを言っ、パーティー会場を丸々貸し切ってお祝いのだ。

これには流石のゲンヤも、呆れるしかなかったという。

「てか、あの時俺の名義使ってパーティー会場借りやがって……」

あれのせいで俺は、一月カップ麺生活……………もうあれは絶対嫌だ」

「貯金おろせばよかったじゃん」

「嫌だよ。せつかく老後の楽な生活のために、コツコツ貯めてるんだから……………」

「老後のために貯金……………」

「変な所で現実主義だね……………」

フェイトとなのはは、もう呆れるしかなかった。

「貯金つて、どれくらいあるん？」

「見るか？」

そう言つて、懐から通帳を取出し、はやてに渡す。

「どれどれ……………え？」

「どうしたのはや……………ふえ？」

「フェイトちゃん？」

「な、なのは……………こ、ここのこれ……………」

「ん？どれくらいあ……………嘘」

ライトの通帳の額を見て、固まる三人。

「ど、どうしたんですか？」

ティアナが気になって、三人に問いかける。

「テ、ティアナ。こ、これ……」

そう言って、なのはがティアナに通帳を渡す。スバルも横から覗きこむ。

「う、うそ……」

二人も中を見て固まる。

「おい。お前、あの中どうなってんだ？」

隼人がライトに問いかける。

「ん？そういえばお前らに中身見せたことなかったな。見てみたら？」

「そうさせて貰おう。ティアナ、貸してくれ」

「あ、は、はい……」

ティアナが隼人に通帳を渡す。ローも横から中を覗きこむ。

「う、これは……」

「うわぁ……す、すいね」

「ライト。何だこの額？」

「ん？額がどうかしたか？」

「どうしたじゃねえっ！こんだけありゃ、一生遊んで暮らせる所か、末代の世話までできるわっ！」

「えっ！？マジで!？」

通帳の額のすごさに、ライトが驚く。

「ど、どうやってこんな額貯めたの？」

なのはがライトにそう聞く。

「え？いや、あちこちの部隊に所属してわ貰って、それを全部貯金しただけけど……」

それを聞いて、隼人は納得したようだ。

「そっぴゃお前、あちこちで活躍してたな……その度に貰ったの全部貯めた結果がこれか」

「いやぁ……びっくりだ」

「お前がびっくりしてるのが一番のびっくりだよ。どんだけ適当に生きてんだお前は」

「いやだって、貰ってはすぐ貯金を繰り返してたら、額とかどうで

もよくなつて、その内貯まるだろって思ってたから……」

「……………はあ」

「流石にこれには驚くか呆れるしかできないね」

「分かってたはずなんだけどな。こういう奴だつて」

二人は揃つてため息をついた。

「ライトくん。執務官や捜査官、あちこちの救助隊に入ってたとか噂であるけど、あれつてホンマなん？」

「ん？ああ。本当だよ。後他にも色々やったけどね」

「何でそんなことしとつたん？」

「色々あるんだよ。色々、な」

「スリーストライカーズの謎の男やね」

「スリーストライカーズ？」

「さっきの問題の答えやよ」

「……………俺達がストライカー？」

「？そつやで」

「ガラじゃねえ……………」

「だったら分隊にストライカーなんて名前つけるなよ」

「だって何かカッコいいじゃん」

「スリーストライカーズのエースが、その呼び名を知らなくて、これから入る部隊に新しく作った分隊の名を、ストライカーにする……すごい偶然だな」

「あ？俺がエースなの？」

「ああ」

「ストライカーのエースとも呼ばれてる位有名なのに、その本人が知らんなんて……」

「フアンの子が聞いたら気絶するんじゃない？」

「そんなもんまであるのかよ……」

呆れながら呟くライト。

「そんな噂の張本人は……これなんかあ」

しみじみと呟くはやて。

「公の場では、せめてしっかりしてな」

「あゝ、それはその……」

罰が悪そうに視線をそらすライト。

「?どうしたん?」

はやてが不思議そうな顔をする。

すると、隼人がため息をつきながら話した。

「こいつ、一度会見の場で、上司殴ったことあるんだよ」

「ええっ!?!」

はやてが仰天している。他のメンバーもだ。

「あの頃は若かったのさ」

「まだ四年位しか経ってないぞ」

「知ってるか?男は三日あれば変わるって」

「お前のそのだらけた性格が、三日で変わるイリユージョンがあったら、全財産払ってでも見たいもんだな」

「だったら今から見せ……」

「ち、ちょっと待って!?!」

はやてが大声で二人のやり取りを遮る。

「ライトくんが会見で上司殴ったって………何で?」

「……………色々あんだよ」

「……………またそれか」

「まだ完璧に信用したわけじゃないからな。話す時が来たら、いずれ話すだろうしな」

「今話せんのか？」

「俺達を信用させてみる。そしたらいくらでも話してやるよ」

「……………わかったわ。つまりあんたらから過去のこととか聞いたら、信用されたって思うていいねんな？」

「ああ。その時が来るかどうかは、わかんないけどね」

「来る。必ず」

「うん。良い返事だ。やっぱ六課は面白そうだ」

そう言って笑うライト。

「じゃあ、今度こそ行くか。スバル、もし同じ部隊になったら、上司と部下になるけど、いつもと同じ接し方でいいからな」

「え？いいの？」

「この三人の前で、あれだけ俺達に好き放題接してた奴のセリフとは思えないな」

「あ、あはは……あの、すみませんでしたっ！」

スバルがなのは達に頭を下げる。

「気にしなくていいよ、スバル。大好きな人に久しぶりに会ったら、誰だってそうしたいのは、当たり前だから」

「だってさ。よかったなスバル」

「うん！」

「ティア、スバルのこと、よろしく頼むな」

「エリシオン一等空尉に頼まれなくても、どうせ世話を焼かされる運命ですよ、私は」

「スバルとコンビ組んでる時点で、確かにそうかもな」

苦笑しながら、ライトが言う。

「ライ兄もティアもひどいよお」

「だったら少しは成長しろ。それじゃあな。はやて達も、今度会うのは、六課の隊舎かな？」

「そうなるやろね」

「六課のこと、楽しみにしてるよ。じゃあな」

そう言っただけですライト。

「俺達もこれで。紅茶、うまかったよ」

「フェイト、また執務官の話しようね」

そう言っただけ、隼人とローもロビーを出ていく。

「私達も、これで失礼します」

「本局武装隊と再試験の件、ありがとうございましたっ！」

そう言っただけ、スバルとティアナもロビーを後にした。

「行っちゃったね」

「そうだね」

「あの二人、六課に入ってくれるかな？」

「うん。入ってくれれば嬉しいけど……」

「きっと入ってくれるよ」

「なのはちゃん、えらい自信あんなな」

「それくらいないと、ライトくん達は、協力してくれないよ」

「……そうだね」

「せやな。それくらいはないとな……………にしても、あの三人も色々あんねんなあ」

「あれだけの経歴があれば、ね」

「特にライトくんは、内戦地区に行っただっていう噂も本当っぽいしね」

「スリーストライカーズエース、クリアストライカー、か」

「仕事とか抜きにしても、六課を気に入ってくれたら、嬉しいやけどね」

「そうだね」

「うん、本当に」

そんな会話をしながら、三人もロビーを後にした。

*

「ふわぁぁあ」

108部隊隊舎につくなり、大あくびをするライト。

「おいおい、だらしないぞ。もっとしゃきつとしろ。しゃきつと」

「無理だよ。ライトがそんなことできるのは、それは世界の崩壊を意味するくらい無理な話だよ」

「ロー、お前段々口悪くなってないか？」

ライトが、隣にいるローに好き放題言われて、口が悪くなってることを指摘する。

「そんなことないよ。ライトに対してだけだしね」

「……はあ。お前ら二人の優しい部分が、いつか俺に向けられる日を、期待せずに待ってるよ」

そう言っつて、自室に向けて歩きだすライト。

「そんな日は来ないよー」

そう言っつて、ローも自分の仕事部屋に向けて歩きだした。

「全くだな。じゃあな」

隼人も歩きだす。

この三人が、次に会うのは、六課の隊舎でだろう。

(三人揃って、同じ仕事場なんて何時以来だろうな……)

そんなことを思いながら、ライトは自室に向かった。

第二話 機動六課（後書き）

六課に入ると言った次の日。

最後の休日を寝て満喫するはずが……

何でこうなったっ!？

もう何もかも面倒くせえ。

あの野郎も難しく考えすぎなんだよ。

子離れできない親父と、親離れできない子供。

愚かなのは一体どっちなんだろう……

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のストラ
イカー～第三話 出発

誰か仕事変わってくれ……

第三話 出発（前書き）

六課へ入ることを決めた翌日。

まだ一日ある休みをあれに費やそうとしたのに……

何でこうなるの？

しかも俺の懐がどんどん寂しくなるし……

ああ面倒くせえ。

六課に行ったら絶対寝まくってやる。

それでは第三話、出発

始まり始まり～

第三話 出発

泣いている人がいた。

その人は俺にとって大切な人だったのに……

だから約束をした。

もう、泣いて欲しくないから。

ただ、笑って欲しかったから。

なのに、そんな細やかな願いすら、叶えられることはなくて……

悔しくて泣いたのか、悲しくて泣いたのかも、もう覚えてはいなくて……

心の中が空っぽになっていくような感覚に襲われて……

気が付くと俺は、そこから逃げていた……

約束、したのに……

そう泣き叫びながら、そこから逃げだした。

*

「……………やな夢見ちまったな」

自室のベッドで寝ていたライトが、そう呟く。

ライトはベッドから起き上がり、大あくびをした。

(しかし、このタイミングである時の夢を見るとはな……………)

着替えながら、さっき見た夢のことを思い出している。

(やっぱり六課には、何かあのかねえ……………まあ、あのゲンヤのジジイの紹介みたいなもんだしな。ハズレの方がおかしいか)

着替え終わって、時刻を確認する。

(んー……………そろそろ行くか)

そう考え、ライトは自室を後にした。

*

「ふわあゝあ」

廊下を歩きながら、再び大あくびするライト。

「やっぱまだねみい……………もう一回寝るかな？」

「もうお昼過ぎてますよ？エリシオン一等空尉」

「いや十日寝てない奴が夕方前に起きたのって、ある意味奇跡と思わねえ？」

「……………いきなり現れたことに対する突っ込みとかないの？兄さんは」

「その程度のこと突っ込んでたら、体がもたないよ、ギンガ」

いきなり会話に入ってきた少女、ギンガに普通に対応するライト。

確かにそれくらいのことで一々突っ込んでいたら、隼人やローと関わってられないだろう。

「で、何か用？俺、今日はまだ休暇だぞ？」

「八神さんが作る、機動六課って所に移動するんでしょ？そうなたらもう中々会えなくなるから、今のうちに会っておこうかなって」

「もう知ってんのかよ。ゲンヤのジジイに聞いたのか？」

「うん。それと、ジジイじゃなくて、部隊長でしょ」

「それ言うならお前だって、兄さんじゃないだろ」

「あつ、じ、ごめん」

「いや、別にいいけどさ……それよりこの事、他にも知ってる奴いるか？」

「部隊みんな」

「……………はい？」

ギンガの言葉に、固まるライト。

「もうみんな知ってるよ。兄さんが機動六課に行くって。噂流れるのは早いからね」

「……………暇人どもが」

「それ、兄さんだけは言っちゃ駄目でしょ」

「そりゃそうだけどさあ……………自分が噂されて気分いいのなんて、目立ちたがり屋くらいだろ？」

「あー、確かにね」

「知ってるか？俺、何か巷じゃクリアストライカーとか呼ばれてるんだって」

「寧ろ知らない方が珍しいんじゃない？」

「え？お前も知ってたの？」

「この隊舎にいて、スリーストライカーズのこと、知らない人はいないよ」

「ここにいるぞ」

胸を張りながらそう言うライト。

「……………まさか知らなかったとか？」

「そのまさかだ」

「……………はあ。相変わらずだね、兄さんは」

「まあな。それよりスバルのこと聞かないのか？」

「もうスバルから聞いたよ」

「へえ。あ、そういえばあいつ、六課に入るのかな？」

「入るみたいだよ。隼人さんとローさんにも、もう伝えたらしいけど、兄さんにだけは伝わらなかつたって言ってたけど」

「あゝ、そういえば、ゆっくり寝るために、通信の全部を遮断してたんだっつたな」

「兄さんが伝えてくれって言ったのに、それはひどいね」

「あ、そういやアイス奢るって言ったのに、奢るの忘れてた」

「……スバル、怒ってるよきつと」

「うーん……六課に召集される時にでも、何か買って行ってやるかな」

「そうしておいた方がいいよ」

「どうせなら、フォワード陣全員分買っかな」

「だったら六課の皆さんの分買っていけば？」

「……かなり痛い出費になるけど、別にいいか」

「うん。そうしときなさい」

「はいはい。たっく、頼りな妹で、兄冥利につきるよ、ホント」

「いえいえ。兄が駄目すぎると、妹がしっかりしないといけなくなるもので」

「ホント、大した奴だよ、お前」

そう言って、歩きだすライト。

「あ、ちょっと待って」

「ん？どうかした？」

「私も、今日はオフだから、買い物に付き合ってくれない？」

「…………断ったら？」

「いつもと同じで」

(いつもと同じ……………ってことは、リボルバーナックル片手に追いか
け回されるのか。やれやれ)

「そんなにこの兄とデートしたいのか？」

「次にそんなおぞましいこと言ったら、リボルバーナックルを口の
なかに入れて回転させるわよ」

「五分で支度してきます」

そう言ってダッシュで自室に戻るライト。

「隊舎前にバイク用意しとくからねーっ！」

「りょーかいつ！」

そう大声で言いあった後、お互いに別れる。

(てか、俺用事あったんだけど……………まあ夜でもいいか)

そう思いながら、自室の扉を開けた。

*

「しかし、買い物って何買うんだ？」

街を歩きながら、ライトが隣を歩くギンガに聞く。

「うーん……服とかいろいろ、かな」

「服って……女物しか売ってない場所じゃないだろうな？」

「その方がいい？」

「ギンガ、お前に妖艶な顔は似合わない」

「ちよつ、そんな顔してないでしょっ！」

顔を赤くしながら、ギンガが叫ぶ。

「実際はいたずらっ子のする笑顔だったけど、そう言つと子供扱いすんなって怒るかと思つて」

「その発言に子供扱いすんなって怒りたいよっ！」

「わりいわりい。そんなじゃまずは服屋から行くか」

「兄さんの奢りね」

「ま、それくらいはいいよ。可愛い妹の頼みだしな」

「ふふっ、ありがとう」

ギンガは笑ってそう言った後、服屋まで走りだした。

「はぁ……まぁ、貯金の額すごいらしいし、いつか」

「ほら兄さん！早くしてよっ！」

「へいへーい」

適当に返事をした後、ライトも走りだした。

*

「お前……いくら奢りだからって、この量はありえねえだろ」

ライトは自分が両手で持っている紙袋を見て、前を歩くギンガを咎めるように言う。その数、約十個。服の数は……

「俺を破産させるつもりか？」

「いいじゃない。兄さんの服も買ったんだし」

「いや別に新しい服とかいらさないんだけど……レリック事件が終わるまでは、六課にいるだろうし」

「でもオフの時くらいあるでしょ？その時にでも使ってよ」

「十着もいらないだろ、絶対に」

因みにギンガの服は、その倍はある。

「まあいいや。で、もう日は沈む時間になったけど、どうする？」

「うーん……どこかで夕食食べて、後は帰るだけかな」

「服しか買わなかったな。しかもお前の出費はゼロときた。始めからそのつもりだったとか？」

「ふふっ。どうだろうね」

「勘弁してくれよお。俺のコツコツ貯めた貯金があ」

「いや兄さんの貯金はその程度じゃびくともしないですよ」

「いや何か精神的に」

「蚤の心臓の兄さんが？」

「……………夕食も奢るっか？」

「本当！？ありがとっっ！」

「なあ。顔にしてやったりって書いてるのは気のせいか？」

「気のせい気のせい」

笑って誤魔化すギンガに、もうライトは呆れるしかない。

「うーん、この辺で一番高いのは……………」

「帰っていいか？」

「じ、冗談だからっ！」

「目がマジだったぞ」

「兄さんが神経質なだけだよ」

「嘘つけえっ！本気で俺を破産させるつもりかあっ！」

「だから兄さんの貯金は……………」

「だからおろしたくないんだよっ！貯めたいんだよっ！」

「兄さんのケチッ！」

「それが奢られる態度かあっ！」

「じゃあ……兄さん、お願い」

上目遣いをお願いするギンガ。

「色気でおとすなんて十年早いよ、マセガキ」

「……………兄さん？」

「冗談です。この辺で一番高い店の最高級料理を奢らせていただきますので許してください」

「じゃああそこっ！」

ギンガがそう言って指差した先には、とてもかいビルが……

「……………ギンガさん？」

「何？」

「何じゃねえっ！あんな所の店なんてマジでシャレにならんわっ！」

「シャレのつもりなんてないけど？」

「しろよっ！お願いだからシャレにしろよっ！……」

「お願い、お兄ちゃん」

「お兄ちゃんって言うなあっ……！」

頭を抱えて悶絶するライト。

「ちよっ、こんな夜中に叫ばないでよ！注目浴びるわよ」

「はっ」

周りを見回すと、いくつもの視線がライト達に釘付けだった。

「ち、ちきしょーっ！」

そう言っつてバイクを停めている所まで走るライト。

「ちよっ、置いてかないでよーっ！」

ギンガもそれを追いかける。

叫びながら走る男と、それを追いかける女。

余計に注目を浴びていることに、二人が気付くことはなかった。

*

海岸線の道を、一つのバイクが駆け抜ける。

漆黒の闇を、赤いバイクが切り裂くように走る。

「ちょっと、とばしすぎだよっ！一応公務員でしょっ！」

後部座席にいる女が、そう叫ぶ。

「うるせえっ！俺は一迅の風となるっ！」

「いや意味わかんないからっ！ってわあああっ！カーブカーブッ！
！200キロで曲がれるわけないからっ！！」

「うおおおおおっ！！極限ドリフトオッ！！」

ブオオンッ！

ギュルンッ！

ズザザアアアッ！！

ギュオンッ！！

物凄い音と共に、ドリフトをするバイク。

そしてまたトップスピードで駆け出すバイク。

「い、今死を覚悟したよ。私……………じ、地面が目の前に……………」

「ん？わああああああああっ！？カーブウウウッ！？」
慌ててブレーキを踏むライト。

グギユルグギキイイイイイイイイッ！！

タイヤが破裂したんじゃないかと思う程の轟音と共に、バイクは止まった。

「はあ……はあ……。死ぬかと思った」

「こっちのセリフよっ！」

ゴツンッ

おもいつきりギンガに殴られるライト。

「いってえ〜。何すんだよっ！」

「こっちのセリフよっ！」

ゴツンッ

拳骨をまた頭にくらっライト。

「うっつ。さっきの仕返しのはずが、何でこんなこと……」

「へえ。兄さんそんなこと考えてたんだ」

「へ？あっ……あ、あのですね。これには海より深いわけがあっ

てですね。決してただの腹いせであんなことしたんじゃない……」

「天誅っ！」

「ぎゃあああああああああああああああああああつ！
？」

夜中の海岸線に、ライトの絶叫が響いた。

*

「し、死ぬかと思った……」

108部隊隊舎前で、バイクからおりながら眩くライト。

「自業自得よ」

ギンガもおりながらそう言う。

「普通はリボルバーナックルは使わない。絶対に……」

「男が細かいこと気にしない」

「いやデバイス使うか使わないかは全然細かくねえからな」

「~~~~」

「鼻歌で誤魔化すなっ！」

そんな会話をしながら、バイクをしまい、寮に戻る二人。

「はあ。今日用事があつたんだけどなあ」

「父さんに？」

「正解。うーん、どうしよう。明日にしよっかな」

「そうしなよ。今日はもう遅いし」

「だな。じゃあなギンガ。今日は面白かったよ」

「私もだよ。何よりタダだったしね」

「……………二度とお前とは出かけない」

「冗談だからっ！」

「はあ……………もういいや。おやすみギンガ」

そう言って自室に向けて歩きだすライト。

「あ、ちょっと待って。えっと……………あ、あつた。はいこれ」

そう言って、ギンガがライトに何かを渡す。

「……………何これ？」

「御守り」

「御守り？何で？」

「どうせ六課に行っても無茶するでしょ？だから、御守り」

「無茶って言うなら、スバルのほうだろ」

「あの子には、優秀な上官がつくから……………でも、兄さんを止める人はいないでしょ？」

「隼人とローは？」

「行動は別々でしょ？」

「……………はあ。よくご存知で。ま、せつかくだから貰っておくよ」

「うん。今日一日のお礼」

「あの大量の服と最高級料理のお礼が御守り一個ってのもなあ」

そつばやきながら、御守りを受け取る。

「ま、大事にさせて貰うよ。ありがとな」

「どう致しまして。じゃあおやすみ、兄さん」

そう言っつて、ギンガは自分の部屋のほうに歩きだした。

その姿が見えなくなった後、ライトも歩きだした。

「無茶するから御守り、ね」

ギンガから貰った御守りを、じつと見つめるライト。御守りには、“安全祈願”の文字。

「……………はあ。俺ってそんなに信用ないかな」

(まあそりゃあんなことしたらなあ……………)

自虐的な笑みを浮かべて、空を仰ぐライト。

「……………行くか」

そう呟き、ライトは歩きだした。自室の方向に背を向けて。

*

「……………来たか」

隊長室のソファーに座った、ゲンヤ・ナカジマが、部屋に入ってきた男、ライトにそう言う。

「来ないとも思ったか？」

ニヤリと笑ってライトが答える。

「いや何。ずいぶん遅かったからな。待ちくたびれただけだ」

「年寄りには時間過ぎるの早く感じるんだろ？気にするなって。もしかして、そろそろ引退の時期なんじゃねえの？」

「何言ってるんだよ。まだまだためえみたいな若造に比べたら、充分現役はれるさ」

「そりゃすごい」

ソファーに腰をおろしながら、ライトが呟く。

「にしても、よくギンガを撒けたな」

「やっぱあんたの差し金かよ」

ライトが少しだけ目を吊り上げて、ゲンヤを睨む。

「いや。俺は何も言ってるねえよ。あいつももうガキじゃないんだ。自分で気付いたんだろ」

「……………そうかよ」

「……………やっぱり、この話にギンガを立ち合わせるの嫌か？」

「……………当たり前だろ。ギンガだけじゃねえ。ローも隼人も、出来ればあんたも巻き込みたくはなかったよ」

「……………わりいな。息子離れできなくて」

「それ言ったら、俺も親離れしてないぜ。そのせいで、あんたに辛い思いだっさせてさしてんだから」

「……………一つ聞いていいか？」

「……………戻る気なら、ねえぞ」

「……………そうか」

目を伏せるゲンヤ。

「……………こつちも一つ聞かぞ。俺のやってる事知ってるのは、あんただけだよな？」

「俺からは誰にも喋ってねえぜ」

「……………ならいい。本題に入るぞ」

「ああ」

「…………機動六課は、本当に俺を変えるのか？」

「…………わからん。それはお前次第だからな」

「…………なら、もう一つ聞く。六課にいれば、あの男に会える可能性はあるか？」

「可能性は、な。六課の担当する事件からして、他やここよりは、会える可能性はあるはずだ」

「充分だ」

そう言って、席を立つ。

「いつものところか？」

「ああ。六課に行く前に整理しときたいから」

「…………道を、踏み外すなよ」

「…………道なら、とつくに踏み外してるよ」

それを最後に、二人の間に会話はなかった。

*

「……………うまくいかねえもんだな」

ゲンヤはそう呟いて、机の湯飲みを持った。

「……………八神の作る部隊が、あいつを前に進ませてくれりゃあ、いいんだけどな」

お茶を飲み、それを片付けてから、ゲンヤも隊長室を後にした。

*

「……………クルセイド。情報全部インプットしたな？」

自室のパソコンに向かいながら、デスクの上に置いているクルセイドに、そう聞くライト。

『イエス、マスター』

「よし。整理も終わったし、今日はもう寝るか」

『おやすみなさいませ、マスター』

「ああ。ゆっくり寝るよ」

ベッドに寝ながらライトは答える。

「今回は“当たり”かもしれないんだ。その時が来るまで、ゆっくり休むさ。もちろん、お前もな」

『イエス、マスター』

「……………今度こそ、全部終わるといいな」

そう言って、ライトは眠りについた。

『……………そうですね、マスター』

そう言って、クルセイドもそれきり黙った。

まだ時間は十時前。夕方近くに起きたにも関わらず、もう寝るのは無理もないだろう。十日も寝なかった人間が、たかが二十時間の睡眠で足りるはずがない。

明日の朝、ちゃんと起きて仕事をするかは、かなり怪しいものである。

はてさて、明日の朝、無事に起きられるのか、それとも、ギンガのリボルバーナックルに起こされるのか……

*

「し、死ぬかと思った」

とある執務室。

頬をなでながらライトがそう呟いた。

『いつも言ってますか？マスター』

「それだけいつも命懸けってことさ」

『普通に起きればいいだけなのでは？』

「クルセイドにはわからんだろうなあ。あのベッドから離れたくなる感情が。朝の気だるさも、布団の暖かさも、枕の柔らかな感触も、全てが俺を眠りへと誘う」

「御託はいいから、さっさと仕事して」

ライトの隣にいるローがそう言う。

「いやまず何で俺が執務官の事務処理手伝わないといけないかわけがわかんないんだけど……………」

「何言ってるの？ライトは戦技教官なんて肩書きの、お手伝いさんみたいなもんじゃん」

「……………否定できねえ」

これまで、執務官から捜査官に、実戦での指揮、救助活動と、ありとあらゆる事をやってきたライトは、そう言われても一切否定できなかった。

因みに、ライトは戦技教官の仕事だけは、ある理由から絶対にやることはない。

だが、みんなライトの活躍や働きぶりは知ってるので、咎めるものなどほとんどいない、“ほとんど”、というのは、彼の力に嫉妬している、一部のものからは、

あまりいい印象は持っていない。彼の性格も災いしてるのだろう。

以前そのことを隼人に指摘され、せめて公の場ではしっかりしろと言われた時、彼はこう言った。

『別にいいよ。嫌われるのには慣れてるから』

と、全く関心がなかった。

それを聞いた隼人は、呆れるしかなかったらしい。

「あゝ、だりい。てか、この事件の報告書やら事後処理って、この十日で俺が仕上げたはずなんだけど？」

「どうやら情報にちょっとミスがあってね。犯人グループの一部が、まだ捕まっていなかったんだよ。昨日ようやくその犯人達を僕が捕ま

えたから、君と一緒にこれをしろって頼まれたってわけ」

「さ、最悪だ。俺完璧に巻き添いくらっただけじゃん」

「まあ、そういうことになるねえ」

「この後隼人が担当してる事件の方も手伝うよう言われてるってのに……」

「どんなことするの？」

「犯人の過去のデータの収集、犯人の現在位置の情報収集、もし事件を起こしていたら、早急に現場に向かって捕まえてこいだよ」

「……ライトってさ、たまにだけどすこいって思うよ」

「全然嬉しくない。てか、絶対一人でできる仕事の許容量を超えてるよな？聞いたことねえぞ。執務官と捜査官の仕事、一日で両方やるなんて」

「でもできるんでしょ？」

「……はあ。できる自分が憎いよ」

「はいはい。で、どれくらいできた？」

「もう終わったよ」

そう言って席を立つライト。

「さすがに早いね。普通の人ならまだ半分も終わらないと思うよ」

「んなことねえよ。じゃあ行ってくるわ」

「うん。あんま無茶したら駄目だよ」

「その言葉をオフの時に一度でいいから言ってくれ」

「あはは。やだ」

笑顔でそう言うロー。

「……………もつお前とは話さん」

そう言って、ライトはずかずかと歩きながら執務室を後にした。

「……………これ、逆効果のような気がするんだけどなあ。ゲンヤさんも隼人もライトも、みんな不器用だからなあ」

ライトの出たいった扉を見ながらそう呟いた後、ローは仕事に戻った。

*

「お、終わった……」

ライトは自室のベッドに倒れながらそう呟いた。

あの後犯人を現場にて現行犯逮捕。その身柄をギンガに渡した後、その報告書を作成。隊舎に戻った後、ある事を数時間調べて、自室に戻り今に至る。

「あゝ。やっぱりここで調べるのはもう限界だなあ。地上本部に忍びこめたら手っ取り早いんだろうけど、陸は……特にレジアスがそれ許さないだろうしな。かと言って、レジアスや最高評議会の連中は確実に何か知ってるはずなんだよなあ。あゝ、考えるの面倒くせえ」

頭をがしがし掻きながらライトが呟く。

「大丈夫ですか？」

「……微妙だな。決定的な証拠は何もないし、下手にこっちから仕掛けたら、逆にはめられそうだしな。それに……」

「違います。そっちではなくて、マスター自信のことです。あまり無理をなさらないください」

「……ギンガも言ってたけど、俺ってそんなに無茶ばっかしてるかな？」

「自覚ないんですか？」

「……………ないな。ほら、俺っていつつもやる気ないのに、何で皆そう思うんだ？」

『それはあなたが……………』

「あー、わかったわかった。そういうことか。ったく。何年前のことひきずってんだあいつらは……………」

『それはあなたが、何度もやるからです。それに、それはマスターも同じですよ』

「……………お前との付き合いも、もうかなりになるんだよな」

『はい』

「……………早く渡せないかなあ」

そう言って目を閉じるライト。

『これであなたとのコンビも終わりになりますかね？』

「さあね。そうなることを祈るばかりだけど……………おやすみクルセイド」

『……………おやすみなさいませ、マスター』

*

「……………眠い」

ヘリポートでそう呟くライト。

「ヘリの中で寝る。ヘリの中で」

隣の隼人がそう言う。

「これから新しい部隊に行く人の態度とは思えないね」

ローも呆れたように呟く。

「じゃあ何か？思い出が仕事以外ないこの隊舎から離れることに、」

ちつとは感慨を持ってっか？」

「ああ」

「無理に決まってんだろっがっ！今思えばお前ら二人して山のよう
に押し付けやがってっ！！」

「ああ、それは……………」

「ロー」

「あっ……………只の嫌がらせだから気にしないでね」

「気にするわあっ！！」

今から、陸士108部隊より、機動六課に向かうために、へりに乗
り込むところの三人。

この三人には、感慨とかは一切ないらしい。

さっきからずっといつものように漫才みたいな会話を繰り返してい
た。

「……………三人共、へりに乗らないの？」

その会話を少し離れた場所で見ているギンガが、そう問う。

「あ、忘れてた」

ライトがそう返す。

「いやお前……」

「忘れてたって……」

隼人とローが、心底呆れたように呟く。

「そういうお前らはどうなんだよ？」

「無論忘れていた」

「それがどうかした？」

「………てめえらいつか殺す」

「はいはい。もういいから早く乗って」

そう言って、ギンガが三人の背中を押す。

「わかったから押すなって」

隼人がそう言いながら、歩きだす。

「ギンガにこんなこと言われる日が来るなんてねえ」

しみじみしながらローが呟く。

「てめえはジジイか？後、別に大したこと言われてないだろうが」

呆れながらライトが言う。

「あ、そうだ。兄さん、ちゃんと持ってる?」

「持ってるよ。ほれ」

そう言って、二つの首飾りのペンダントと一緒にお守りを出す。

「うん。ならいいよ」

「何だお前、お守りなんてもらったのか?」

「やらねえぞ」

「いや誰もそんなこと言ってねえだろ」

「何のお守り?」

「安全祈願だよ」

「……ああ、成る程」

「でしょ?」

「何だよっ!—んなに俺は危なっかしいかっ!?!」

「」「」「ああ(うん)」「」「」

「三人揃って即答かい」

「はいはい。もう本当に乗り込んで。パイロットの人待ちくたびれ

てるよ」

「へ〜い」

そう言っつてへりに乗り込むライト。

「中結構広いな」

隼人も乗り込みそう言っつ。

「そりゃそうだよ。何せこのへりは……」

隼人の眩きに対して、自慢のうんちくを語りだすロー。

「始まったよ……まあほっとけばいいか。ギンガ、スバルに何か伝えることあるか？」

「そうね……怪我だけはしないように言っつておいて」

「……それは無理なご注文だと思っつぞ」

「……だよな。なら、おめでとっつて言っつておいて」

「わかつた。じゃあなギンガ。お守り、ありがとな」

「ううん。気を付けてね、隼人さん、ローさん、兄さん」

「ああ。またなギンガ」

「またねえ」

そう言って、ヘリのドアを閉める。

「いよいよ、だね」

「ああ。そうだな」

隼人とローの二人がそう呟く。

「ぐがー」

対して、ライトは既に寝ていた。

「お前は本当に呑気だなあ」

「本当にねえ」

「うるせえ。また徹夜だったんだよ。五徹だぞ？眠くないはずないだろうが」

「うわあ。またすごそうだねそれは」

「まあ、そんな球磨だらけの顔で、これから同じ部隊になる人達との顔合わせはまずいかもな」

「だろ？だからつくまで寝かせてくれ」

「わかった。しっかり寝てろ」

「言われずとも」

そう言つて、どこかから枕を取り出すライト。

「どこに持ってたんだよそれ」

呆れながら問う隼人。

「気にするな。そんじゃおやすみ」

そう言つて、椅子の上で横になる。

「ぐかー」

「早いな」

一瞬で眠りに落ちるライト。それにまた呆れたように呟く隼人。

「僕達も少し仮眠とつとかなない？ライトほどじゃないけど、僕もあんまり寝てなくてね。もう眠くて眠くて」

「そうだな。寝れるときに寝といたほうがいいな」

そう言つて二人も目を瞑る。

いつもの騒がしい三人ではなく、疲れきつたように静かに眠っている。

六課への移動が決まつてからは、三人共今まで以上に忙しかったよ
うだ。

その三人が、六課隊舎につくまで、起きることはなかった。

第三話 出発（後書き）

六課への初出向。

色んな意味で早速注目を集めてしまっていた俺達三人。

いきなり面倒なことになりそうで早速嫌気がさしてきていた。

何だかんだで訓練を見ろって言われるし……

はあ……まあやる事ないしいつか。

スバルはしっかりやるのかねえ……

新しい部隊、新しい部下、新しい仲間。

ここで俺は変わっていくことができるんだろうか？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のストラ
イカー～

第四話 集結

はてさて、この先どうなるのやら……

オリジナル魔法設定（前書き）

ラ「なあ作者」

作「何だライト。こっちは今忙しいんだ」

ラ「ジャンプ片手で言われてもなあ……まあいいや。それより聞きたいんだけど、何でこんな中途半端な所でオリジナルの魔法を紹介すんだ？」

作「それはそろそろお前らが闘う話になるから」

ラ「うえ〜。もうかよ。だりい」

作「とても主人公とは思えない発言だな」

ラ「主人公？ああ、そっぴや俺ってそんな設定だったけ？」

作「………主人公変えようかな」

ラ「そしたら出番減ってゆっくり休めるな」

作「………お前に普通の考えで挑んだ俺が馬鹿だったよ」

ラ「いやあ」

作「褒めてないからっ！」

ラ「なんか相手も面倒くさくなってきたし、取り敢えずどっぞで」

作「話の続きは後書きでだ！」

ラ「ぐー」

作「寝るなあっ！」

オリジナル魔法設定

ライト・エリシオン

ローティカルフィールド

クルセイドの先端から光を発射し、その光が当たった半径10メートルの物質の動きを、一時的に遅くさせる。遅くさせると言っても、止まって見えるほど遅くではなく、少ししか遅くしない上、簡単に逃げられるから、戦闘ではあまり役に立たない。

ゴールドバインド

普通のバインドよりも、強度は何倍もあるが、魔力をかなり使う上、発動に時間がかかるので、これも一対一の時は、役に立たない。

マグネットバインド

いくつものバインドを同時に放ち、術式の核となる場所に、まるで磁石の吸引みたいに、放ったバインドで、捕まえたものだけをそこに引き寄せる。これにはあまり魔力を使わない上、発射にも時間がかからないので、ライトは犯人などを捕まえるとき、好んで使う。

ガトリングシュート

計六十発のシューターを、指定した方向に飛ばす魔法。操作性は一切なし。放つただけで一直線に進むだけ。一発一発の威力は低い、それを数で補っている。発射にかかる時間は極めて短い、一直線に進むだけなので、味方と一緒に戦うときには使えない魔法。

ストライクバスター

デイベインバスターと同じ。青い光線を放つ魔法。

アトランタバスター

計四つの光弾を、レーザーにして放つ魔法。威力は一発一発がストライクバスター並。ただし発射に時間がかかる。カートリッジを一つロードで発動可能。

サテライトカノン

ライトのオリジナル魔法の中で、最上位魔法の一つ。威力はスターライトブレイカー並。カートリッジを二つロードして発動可能。

ミラーイリユージョン

ライトの持っているなかで、一番強力な幻術。使い方は色々だが、フェイクシルエットのようない方が、一番多い。

ドライブシューター

アクセルシューターと数も操作性性能も同じだが、速度はアクセルシューターよりもかなり速い。

アクティブ

ソニックムーヴと同じ。高速移動。

アクティブドライブ

アクティブの五倍の速さで移動する超高速移動魔法。ライトの持つ高速移動の魔法の中で、一番速い魔法。

ナパームクラスタ

計十六発の電気を帯びたクラスタが、四方八方からそれぞれ別々の軌道で相手に向かう魔法。当たれば一時的に相手の神経を麻痺させて、動けなくすることができる。ただし、魔力の高い相手や、電気変換を持つ相手には、効きにくい。

サプライズファイバー

ライトが遊びで作った魔法。指定した空間を結界で覆い、その空間内で、様々な現象を発生させる幻術。

例 心霊現象

ラウンドセイバー

クルセイドの先端に魔力を集中し、それをおもいつきり振って放つ斬撃。

プロテクションGX

自分の体を薄く覆うプロテクション。強度は低いが、攻撃や高速移動しながらでも発動できる上、魔力もあまり消費しない。

イージス

プロテクションより強度の何倍もあるが、守れる部分が狭い。精々上半身を守るのが精一杯だが、発動に時間がいらす、魔力もあまり消費しない。カウンターを決める際に、ギリギリで相手の攻撃を受けるのによく使う。

ラウンドプロテクション

オーバルプロテクションを改造したものの。相手の射撃魔法が当たった瞬間、魔力を流しこみ回転させて、それを受け流す。魔力コントロールが難しいが、少ない魔力で相手の攻撃を防げる。

アサルト

ライトオリジナルの、超長距離射撃魔法。威力はあるが、魔力の消費が半端ない上、発射に時間がかかるので、滅多に使うことはない。

クリスタル

ライトの持つ最強高度を誇る防御魔法。六角形の結晶体がライトを包みこんで相手の攻撃を防ぐ。魔力消費の激しい魔法。

ローブ・ランゼル

裂風斬れつふうざん

ベレンスに魔力をため、それをいくつかに分散させて放つ拡散型の斬撃を飛ばす魔法。

閃光斬せんこうざん

足に魔力をため、一気に相手に近づき、目にも見えない速さで相手を斬り伏せる。

破斬はきん

ベレンスの、居合いモードで放つ、1stモードでの最強技。目にも移らないほど速い居合いよって斬撃を放つ技。その斬撃は、海を割るほど。

破突はとつ

ベレンスの2ndモード（刀身が槍のように細長く尖っている）で放つ技。威力は一点に集中している分、破斬より上。

アクティブ

ライトに教えてもらった高速移動魔法だが、ローブのほうか今では使いこなしていて、速度はライトより上。

アクティブドライブ

これもライトに教わったが、アクティブと同じくライトよりも速く動ける。アクティブドライブと閃光斬のコンビネーション技は、ラ

イトでも防ぐので精一杯。

閃刃風裂波せんじんふうれっば

無数の斬撃を放つ魔法。威力は一発一発が強力な上、速いが、魔力と体力の消費が結構激しいが、ローブは限定解除をしたら難なく使える。

千刃衝せんじんしゅう

いくつもの剣が見えるほどの錯覚を起こす剣速で、相手を突く技。

残影ざんえい

スピードの緩急を高速で行い、自分が何人にも見えるように大量の残像を作る技。アクティブをローブが独自にアレンジして作った。

クイックアクション

一度の斬撃に、フェイントを最低五回以上して相手に斬り掛かる技。ライトでも、あまりに速過ぎてフェイントに対応しきれない。

九弦院隼人

隼人の魔法は稀少技能が関わってくるので、また次回ということにしておきます。これで紹介した魔法以外にも、まだ出す予定です。

それでは次回、第四話集結。お楽しみに〜。

ドゴオオオオオオオオオッ！！

作者（炭）「……………」

ラ「ふう。いいストレス解消になるな。また来ようつと。隼人とかの魔法の紹介もあんだろうしな。ではまた次回〜」

第四話 集結（前書き）

ゲンヤのジジイと、ガラにもなくシリアスに話して、疲れて、眠く
なつて……

はあ。やっぱ慣れないことはするもんじゃねえな。ただ馬鹿みたい
に笑いながら、普通に暮らせたら一番なんだろうけど……

そんなもん、実際に手に入れられるのなんて、ごく一部の人間だけで、
俺は残念ながらそれに当てはまらない。

ああ。世の中何でこううまくいかないんだろうな？

………何時の間にか愚痴聞いてもらうコーナーになつてるな。

まあいいや。

それでは第四話、集結。

始まり始まり〜。

第四話 集結

炎が辺りを包んでいた。

あちこちに自分の大切な人達が倒れている。

倒されていく仲間達。

助けたいのに動かない体。

やめろ。

何度もそう叫んだ。

思い出がたくさんある場所が、燃えている。

大切な仲間達が倒れていく。

動け。動けよ。

何でこんなときに動かないんだよ。

何の為に今まで力をつけてきたんだよ。

ふざけんな。

もう失ってたまるかよ。

もう誰も失わせない。

誰も悲しませない。

絶対に。

絶対。

俺が守るんだ。

そう叫んでも体は動かず、大切な人がいなくなった。

何でだよ……

何で俺は守れないんだ……

誓ったのに……

約束したのに……

俺はあの日から……

何も変わってないじゃないか……

ちくしょう……

ちくしょうっ！

*

「……………今は、夢？」

椅子で寝ていたライトが、目を開けて呟く。

「あんな光景、見たことないぞ。まさか予知夢？」

（だとしたら最悪だな。あんな光景……………）

苦笑しながら起き上がるライト。

そして辺りを見回すライト。

「……………ローと隼人も寝てんのか」

寝ているローと隼人を見つけて呟く。

「……………動いてないってことは、もう着いたのか」

へりが動いてないことを確認し、窓の外を見ながら呟く。

「じゃあ起こした方がいいよな。おいロー、隼人、隊舎に着いたから起きろー」

二人をゆすりながら声をかける。

「……………ライトか？」

「ああ。もう隊舎に着いたぞ」

「そうか。わかった」

「ほら、ローも起きろ」

「ん？あさ？？」

「寝呆けんな。六課の隊舎に着いたんだよ」

「ホント？？だったら早速整備室見に行かないと」

「それより先に部隊の人達に挨拶が先だ。ライト、今何時だ？」

「えっと……………」

時計を見ながら、唸るライト。

「ん〜」

「何唸ってるんだよ」

「いやあのな……………ちょっとまずいかもしんない」

*

「……………もっかい言って、グリフィス君」

六課部隊長室で、はやてが眉をひそめながら、グリフィスに詰め寄る。

「え、えつと……………では、さっきの言葉をそのままもう一度言います。フォワード4名をはじめ、機動六課部隊員とスタッフ、ストライカー分隊を除いて、全員揃いました。今は全員、ロビーに集合、待機させてます」

「……………まさか来ないとか？」

なのはがはやての方を気にしながらグリフィスに聞く。

「いえ。迎えのへりは既に到着しているはずなのですが……………」

「まだどこにもいない？」

「はい。へりパイロットの話では、寝ていたのを起こすと、すぐに行くと答えたそうなのですが……………」

「……………まだ寝てるんじゃない？」

「ライトならあり得るかもね」

「すぐにへりの中見てきてっ!」

はやてがグリフィスに叫ぶように言う。

「いえ、それがへりの中にも既にいなくて……」

「……………」

鬼のような形相で黙るはやてを、なのはとフェイトが苦笑いしながら見ている。グリフィスは恐怖していたが。

「……………みんなを待たせんのもあかな。ほなのはちゃん、フェイトちゃん。まずは部隊のみんなにご挨拶や」

表情を切り替えて、いつものはやてに戻ったことをホッとしながら、なのはとフェイトは頷いた。

ロビーには、いろいろな人がいた。

その誰もが、いずれはエリートとなるであろう才能を秘めているもの達ばかりだ。しかしそんな中に、ライト達三人の姿はなかった。

(どうしちゃったんだろう、ライ兄達……)

三人の姿が見えないことに、疑問を感じるスバル。

(ライ兄とロー兄ならともかく、隼人兄もいるのに遅刻はないだろうし……どうしちゃったんだろう?)

そんな事を考えていると、ロビーにはやて達が入ってきた。

その姿を見て、みんな笑顔になる。

「機動六課課長。そして、この本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

壇上上がったはやてが、みんなにそう挨拶する。

パチパチパチパチ。

あたりから拍手がおこる。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守っていくことが、私達の使命であり、なすべきことです。実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性に溢れたフォワード陣。それぞれ、優れた専門技術の持ち主も、メカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって、事件に立ち向かっていけると信じ

てます」

そこで一度言葉を区切った後、続ける。

「まあ、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長、及び部隊長、八神はやてでした」

手をあげて、挨拶を終わらせるはやて。

パチパチパチパチ。

皆がそれに拍手していた。

その時、

「ふざけんなあっ！」

最悪の怒声が、ロビーに響いた。

*

十数分前。へりの中。

「もう集合時間過ぎてんだけど……」

「なっ……」

時間をライトに聞いた隼人が仰天する。

「それより早く整備室行こうよ」

「アホッ！んなことしてないで、さっさとロビーに行くぞっ！」

「え〜……」

「お前もうちよつと焦れよ」

「ライトには言われたくないなあ」

「それは否定しないけどさ、さっきボロクソ言ってた奴がそれじゃ、示しが付かないぞ？」

「それでも技術者としては、整備室は見ておかないとさあっ！ライ
トもわかるでしょ！？」

「まあ俺も少しはわかるけどさあ……」

「でしょ？だから早速……」

ゴシンッ

「……………」

動かなくなったローを引きずりながら、へりを出る隼人。

「……………うわぁ」

(ああはなりたくねえな)

ローを見ながらそう思うライト。

「何してる。早く行くぞ」

隼人がライトにそう言う。

「はいはい。行くから殴るなよぉ」

そう言いながら、ライトもへりの外に出た。

*

「ぐー」

寝ながら歩くライト。隣には隼人が……………いなかった。

「ぐー」

綺麗に壁にはぶつからないように歩くライト。起きてるんじゃないかと思つくらい普通に歩いている。

「ぐーぐー」

最早熟睡の域に達しているようだ。この男はどこでも寝れるどころか、何をしても寝れるらしい。

「やっと見つけたあつ！」

ライトの後ろから、隼人の叫び声が聞こえる。

「てめえ寝ながら勝手にどっか行くんじゃないやねえっ！」

頭を殴つてライトを起こす。

「んあ？隼人？ロビーには着いた？」

「まだだよ！お前のせいで！」

「なんだよ。俺ちゃんと歩いてただろ？」

「寝ながらな。そのせいでお前がどっかに行つて探すはめになったんだよ」

「あゝ、成る程。にしても、ローはえらいことになってるな」

隼人に引きずられて、顔とか地面に接してる部分がかなりグロテスクになっていた。

「心配ない。その辺は考えて引きずってるから」

「うーん……確かに見た目ほどひどくはないな。血がでてるからひどく見えるだ………なあ隼人。一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「この血に非常に似ている着色料は、ロキのしわざか？」

「正解っ！」

ライトがそう呟いた途端、隼人の後ろから、ユニゾンデバイスの口キがでてきた。

「正解っ！じゃねえよ。今から挨拶の場に向かうのに、これどうすんだよ。しかも鉄の臭いまでするし……それで本人けろっとしてたら完璧ホラーじゃん」

「なかなか粋なアイデアだろ？」

「ああ。粋すぎて俺には理解できないけどな」

（こいつは相変わらず、その名の通りのいたずら好きだな）

ロキという名は、第97管理外世界、地球の北欧神話に伝わる、いたずら好きの神の名前だ。

(いくらいたずら好きだったって、限度があるだろ。どう考えても、これはデバイスのすることじゃない)

「おいロキ。お前ももう少し俺の言うこと聞いてくれないか？」

ロキの惨状ロキのせいに気付いた隼人が、ロキを睨みながら言う。

「いやだね。俺は自由に生きるんだ」

「……………反抗期？」

「てめえライト。舐めたこと吐かすとはったおすぞポケツ！」

「ロキも悪い。性格も悪い。なのに性能だけはいい。世の中やっぱ間違ってるねえ」

「お前だけは言っちゃ駄目だろそれ」

ロキと隼人が、二人揃ってライトに言う。この時だけ、二人の心は一つになった。

「まあいいや。とつととロビーに行こうぜ」

そう言って、また寝ながら歩きだすライト。

「だから寝るなあっ！」

「よく寝ながら歩けるな」

ロキは初めてライトのことを感心した。

*

「ここか……」

ロビーの扉前で立ち止まり、ライトが眩く。

「もう挨拶始まってんじゃね？」

「だろうな。まあ、邪魔するのも悪いし、丁度終わりくらいの頃を見計らって……」

「整備室はどこっ!?!?」

ローが飛び起きながら叫ぶ。

「うわっ、このタイミングで最悪な奴が目覚めやがったっ!?!」

ライトが顔をしかめながら叫ぶ。

「くそっ!もう一度気絶……」

「ふっ」

一瞬で隼人とライトから離れて、どこかに走り去ろうとするロー。

「くそっ」

「……………あいつに身体能力で勝つのは無理だ。なら……………」

「……………了解」

ライトの呟きに、頷く隼人。

「チエーンバインド」

『チエーンバインド』

黒い魔力が隼人を包み、手から鎖みたいなのがローに向かって放たれ、ローの体に絡み付く。

「よしっ!」

「そのまま引き寄せろっ!」

二人がかりで鎖を引く。

「ぐぬぬ……………」

だがローも抵抗をやめない。

「いつそのこと、魔法撃つて気絶させるか?」

ライトがもう面倒くさくなったらしく、投げやりにそう言う。

「そしたらあいつ、俺らを襲うぞ」

「うわっ、それは嫌だな」

「だろ？だから取り敢えず引っ張っていくしかないんだよ」

「ううっ………ロキ。あいつ気絶させることできる？」

「魔力なしじゃ無理に決まってるんだろ」

「だよなあ。でも俺、二人がかりでもあいつに力で勝てる自信ねえよ」

「いいから取り敢えず引っ張れっ！このバインドだって長くはもたねえぞっ！」

「ああもうっ！何でっ、俺がっ、こんなっ、目につ、あっ、わっ、なっ、いっ、とっ、いけないんじゃないじゃボケェッ！！」

渾身の力でバインドを引っ張るライト。

するとローの体が浮き、一気にこっちに向かってくる。

「あれ？これってまずくない？」

「……………だな」

「これは俺のせいじゃねえぞ」

ライトと隼人とロキは、吹っ飛んでくるローを見ながらそんな呟きをもらす。

このままいけば確実にローは三人に突撃。後ろには未だ挨拶をしていると思われるロビーへの扉。

つまり……

ダアアアンツ！！

ローのタツクルを受け、三人はロビーに突っ込んだ。

「いたた………何するんだよライト」

「ふざけんなあつ！誰のせいでこうなったと思ってんじゃあつ！！」

「今回はかりはライトの言う通りだな。さて、どうしてくれようか？」

「は、隼人？顔が怖いよ？」

「ロー………歯あ食い縛れや」

「ライトも何で指をならしながらこっちに近づいてくるのかな？」

二人の威圧感に圧倒され、冷や汗を流すロー。

「クルセイド、今よりこいつに裁き与えるっ！準備はいいかあつ！？」

『はあ。私はいいですが、周りを見なくていいのですか?』

「周り?」

そう言って辺りを見回すと、ロビーに集まっていた人達全員が、ライト達を見ていた。

「……………あ。こんにちは?」

「いや違つだろ」

ライトの言葉に即座に突っ込みをいれる。

「何か最悪のタイミングだったみたいだね」

「「てめえのせいだろうがっ!!」」

「あ、あはは。こ、今回は僕は僕が悪かったかなあ」

頭を掻きながら苦笑しているローが二人に謝る。

「それで許されるとも?」

ゴキッ、ボキッ。

指をまた鳴らしながら、ローに近づくとライト。

《ちよっ、ライ兄っ!》

するとスバルから念話が入った。

《何だスバル。今俺は忙し……》

《前っ！前っ！部隊長が物凄い形相でライ兄達見てるからっ！》

「え？」

それを聞くと同時に、隼人とローの二人が顔を恐怖に歪んでいることに気付いた。

(や、やばい……)

壊れたブリキのオモチャのようにギギギ、と顔を後ろに向ける。

「お早うライトくん。もう昼やけど、よう寝れた？」

笑顔だ。はやての顔はそれはもう完璧な笑顔だ。一点の曇りもない、満面の笑みを浮かべている。普通ならこの顔を見て怒っているとは誰も思わないだろうが、付き合いの長いのは達や、気配をよむことには達人の域に達しているライト達は、はやてがどれくらい怒っているかがわかり、恐怖する。

「は、はやて？何か前と違って非常にお前のことが恐く感じるんだが？」

「気のせい」

「い、一応言っとくけど、ここに来るのが遅れたのも、さっきの騒ぎも全部ローのせいだからな？」

「何言ってるのさ。起こしにきたパイロットに行くって言って二度寝したのも、僕を引っ張ってここに突っ込んだのも、全部ライトじやん」

「ちよつと待て。後者の方とはかく、前者の方は何でそんなこと言えるんだ？」

「ベレンスが教えてくれたよ。パイロットの人が起こしに来たのに、君が適当にあしらってまた眠りこんだって」

そう言っつて、黄色いブレスレットを見せるロー。それがローのデバイス、ベレンスである。

「……………多分寝呆けてたんだろつな。全く覚えてない」

「でも事実だよ」

「……………はやて、もう挨拶は終わったな。俺はこの辺で……………」

「後で隊長室に来るように」

「……………だつてさロー」

「いやライトでしょ」

「三人ともや」

「何で俺まで？」

「隼人、自分も遅れたよなあ？」

「絶対に行きます」

はやての笑顔に恐怖し、一瞬で自分の言葉を塗り替える隼人。

「じゃあこれで解散。ストライカーは隊長室に来るように」

そう言ってロビーを出るはやて。

ロビーからはやてが出ていった後、三人揃ってため息をつく。

「こ、こええ……」

ライトははやての顔を思いだし、再び恐怖する。

「やっぱりライトくんが原因だったんだね」

未だに恐怖に震えている三人に、なのはが声をかける。

「な、なのは。た、助けてくれ。奴に殺される」

「大丈夫だよ。………多分」

「お終いだ。あれの親友がこう言うなんてお終いだ」

頭を抱えて絶望するライト。

「ああどうすれば………あれ？隼人とローは？」

辺りを見回すが、二人の姿が見えない。

「逃げたのかな？」

「何ですとっ！？だったら俺も……」

そう言って走り出そうとしたが、ライトは足を止めてしまった。

「……………何やってんだ？あいつら」

ライトの目の先には、六課のロビーに集まったメンバーに囲まれた、ローと隼人だった。

「君達は有名だからね。六課に来るって決まった時から、みんな大はしゃぎしてたよ」

なのはが苦笑しながら言う。

「……………ちょっと待て。まさかと思うが……………」

「じゃ、頑張つて」

そう言って離れるのは。

「……ってこらあっ！てめえ逃げんじゃ……………そうだ。今のうちに逃げれば……………」

「あそこにいるのはクリラストライカーのライト・エリシオン一等空尉だっ！群がるなら向こうにしろっ！」

隼人がライトを指差し叫ぶ。

「あの人が!？」

「一度話してみたかったんですっ！」

「ぜひ話を……」

一瞬でライトの周りに、群生が集まる。

「隼人てめえっ！」

「うるせえっ! てめえだけ逃がしてたまるかっ！」

「うーん……これって逃げてもいいよね？」

ローが唸りながら二人にそう聞く。

「あー……いいんじゃないね? こいつらには悪いけどね」

「そうだよな。じゃあ……」

しゃがんで足に力をいれるロー。

「逃げますかっ」

そう言って、高くジャンプし、群生の外に着地する。

助走なしで、軽く五メートルは跳んだローに、一同が唾然としている。

「よっ」と

そう言つてライトもジャンプする。平然と、ローと同じくらい高くジャンプするライトに、また一同は啞然とする。

「お前ら相変わらずの化け物じみた身体能力だな」

隼人が二人に向かつて呆れたように呟く。

「お前だつてこれくらいできるだろ？」

「魔力なしでできるわけないだろうが。ま、別にそんなことする必要はないけどな」

そう言う隼人は、いつの間にか群生の外にいた。

「……………どうやって出た？」

ライトが隼人にそう聞く。

「人の意識の薄い部分を見抜いて、そこを通れば、あの程度の人数なら普通に抜け出せる」

「……………俺からしたらお前の方が化け物だよ」

「でもライトも出来るよね？」

「こいつ程じゃないけどな」

そんな会話をする三人に、驚きと尊敬の視線が集まる。

「すじい……」

「さすがです……」

「噂は本当だったんだ……」

そんな視線に気付く三人。

「……取り敢えずこっから逃げるか」

すたこらさっさ、という擬音が聞こえるんじゃないかというくらい
の逃げっぷりを見せる三人。

ロビーから出た途端、三人はそれぞれの道に逃げた。

まるで今までに同じことが何度もあったんじゃないかと思つくらい
の連携っぷりだった。

*

「はあ……はあ……」

壁に手をつけて息を整えるライト。

「に、逃げ切ったぞ。あいつらだって自分の仕事があるんだ。深追いはしないはずだ」

コツコツ。

「ひいっ！」

前から足音が聞こえたので、咄嗟に壁に体を寄せて隠れるライト。

(だ、誰だ?)

そーっと顔を覗かせるライト。

「そういえば、お互いの自己紹介は、もう済んだ?」

そこにはなのはと、フォワードの四名がいた。

(なんだ、なのは達かよ。助かった)

心の底から安堵するライト。

「え、えっと……」

「名前と、経験やスキルの確認はしました」

「後部隊分けとコールサインもです」

スバル、ティアナ、エリオの順でなのは問いに答える。スバルは答えてるとは言えないが。

ライトはなのは達だと分かった途端に安心したのか、普通に姿を現した。

「あ、ライ兄っ！」

「ストップだスバル。抱きつくのはなし」

駆けてくるスバルを、手で制するライト。

「えー」

「えー、じゃねえっ！お前これから組む奴らに変な印象与えてどうすんだよ」

ライトは呆れながらそう言う。

「この子に変なのはもとからですよ」

ティアナがライトに向かってそう言う。

「それは確かに言ってるな……」

「ライ兄もティアもひどいよっ！」

「だって……なあ？」

「ええ……まあ」

スバルに対して同意見を持つ二人。

「うう………だったら開き直ってやるうっ！」

そう言っつてライトに抱きつくスバル。

「いや直す努力をしろよっ！」

スバルを引き剥がしながら叫ぶライト。

「ねえライトくん。これから訓練を始めるつもりなんだけど、よかつたら見てくれない？」

スバルを手で制しているライトにそう言うのは。

「何で俺が？」

「有名な戦技教官が目の前にいたら、教えるほうとしては、訓練を見てほしいって思うよ」

「嘘つけ。どうせ何か手伝わせる気だろ」

「にやはは。ばれた？」

「当たり前だ。まあ別にいっか。どうせやることもないしな」

「はやてちゃんは？」

「これからクラナガンに行くから、説教はまた今度だとさ」

「ああ。確かフェイトちゃんも一緒に行くんだっけ」

「隼人も行くらしい。色々と興味深いらしいぜ」

「ふーん。そういうものなんだ」

「上目指してる奴からしたらそうだろうな。それより、ひよっこ達は放っておいていいのか？」

そう言つて4人を指差すライト。

「もちろん忘れてないよ。エリオとキャロは初めて会うよね。こちら、特別実行分隊ストライカー分隊隊長で、スターズ分隊補佐担当のライト・エリシオン一等空尉」

「俺が隊長なのかよ……まあいいや。ライト・エリシオンだ。ライトでいいよ。エリオにキャロだっけ？」

そう言つて二人に手を差しだすライト。

「あつ、はいっ。エリオ・モンディアルです。よろしく願いします、ライト隊長」

「エリオ・モンディアル？」

顔を少しだけしかめながらライトが呟く。

「あ、あの……」

エリオが少し怯えたようにライトに眩く。

「あつ、わ、わりいな。ちょっと似た名前の知り合いがいたからさ」

「あつ、そうなんですか……」

「ああ。ごめんな、怖がらせて。それと隊長はいらないよ」

「分かりましたライトさん」

そう言っつてライトの手をとるエリオ。

「キャラ・ル・ルシエと、飛龍のフリードリヒです。よろしくお願
いします、ライトさん」

「くう〜」

「よろしくキャラ。それにフリード」

右手でキャラと握手して、左手でフリードの頭をなでる。

「さて、じゃあ行きますか」

「そうだね。あ、その前にみんなのデバイス、ちょっと貸してくれ
ないかな？」

「訓練用に何か細工するの？」

「うん。何ならライトくんのもしてあげようか？」

「ま、しといて損はないだろうし、お願いしようかな」

そう言っただけなのはにクルセイドを渡すライト。

「このデバイス、何だかレイジングハートに似てるね」

「そうか？色とか全く違うじゃん」

形は全く同じと言っても過言ではないが、色はレイジングハートは赤色、クルセイドは藍色と全く違っていた。

「名前は何ていうの？」

「クルセイドだよ。もう十年以上の付き合いになるな」

「え？ライトくんって九歳より前に魔導師になってるの？」

「ああ。スバルには話したっけ？」

「えっと……確か魔力に目覚めたのが五歳だったっけ？」

「正解。その時既に大魔力を持っていたからなあ。色々大変だったよ、うん」

「ふええ。私も結構早くに魔力に目覚めたけど、そんな歳で大魔力を持っていたなんて話聞いたことないよ」

「まあその話は置いて、クルセイドに出会ったのは、確か……
…何歳だったっけ？」

『六歳です』

「あー、そうそう。そうだったそうだった」
適当に頷くライト。

「本当に適当だね、ライトくんは」

「昔はこんなじゃなかったのになあ」

「おいこらスバル。こんなとは何だ、こんなとは」

「そう言われても無理ないよ、ライトくん」

「はいはい。俺が悪かった。エリオとキャロも、俺はこんな人間だから、あんま尊敬とかすんなよ。そしてその事を六課スタッフ全員に知らしめて、二度と俺に群がらないようにしてくれ」

「は、はあ………」

「………いかな。子供なのにゆとりを知らんのか？」

「いや、ただ単に訳がわからないだけだと思っよ」

「あーそうかい。それより、デバイスに細工するんだったら、整備室に行くよな？」

「え？うん行くけど………それが？」

「なら俺も整備室に行くよ」

「?何で?」

「ちよつとな……」

「?」

「ライ兄まさか……」

スバルの呟きに、ニヤリと笑うライト。

「その通りだスバル。最近体が鈍ってるからな。ちよつどいいだろ」

「うわぁ……初めて見るから緊張するなぁ」

「?何の話?」

なのはが首を傾げながらライトとスバルに聞く。

「気にすんなって。じゃあ行きますか」

ライトのその一言で、一回は歩きだした。

*

「ホンマについてくるん？」

へりポートに向かって歩いていているはやてが、隣を歩く隼人に聞く。

「ああ。やっぱり自分が関わる事件については、少しでも知っておきたいし、それにお前達の働きぶりとやらも見れるしな」

そう言って、はやてとフェイトを見る隼人。

「あはは……お手柔らかに」

そう言って、へりポートへの扉を開けるフェイト。

へりポートには既に先着がいた。

「あー、ヴァイスくん」

はやてがその先着に声をかける。

「もう準備できたんかー？」

「準備万端。いつでも出れますぜー。っと、そっちの方は？」

ヴァイスが隼人を見てそう言う。

「ああ。俺は六課特別実行分隊、ストライカー分隊ロングアーチ補

佐担当の九弦院隼人だ。呼び方は隼人でいいよ、ヴァイス」

「分かりました。よろしくお願いします、隼人さん」

「堅くなんなくていいよ。はやて達に接してるみたいに、気楽に話してくれ」

「そうですかい？いやあ、天下の“天空の采配者”ロードストライカーにそう言ってもらうのは、何だか恐縮ですがねえ」

「そうか？別に俺はお前やはやてと同じ、ただの一人の人間だ。何を恐縮する必要があるんだ？」

「……中々面白いお方ですねえ」

「俺の連れ二人はもっと面白いぜ。特にやる気の欠片もない自墮落男はオススメだ」

「覚えておきまさあ。それより、早く乗ってください。こいつも待ちくたびれちまうんでね」

そう言って、へりを指差すヴァイス。

「わあ。このへり、結構新型なんじゃない？」

フェイトがへりを見て呟く。

「JF704式。一昨年から武装隊で採用され始めた新兵器です。」

フェイトの言葉に、ヴァイスが生き生きとしながら答える。

「そついやローから聞いたことあるな。確か機動力がすごいとかなんとか……」

「そうなんすよっ！更に積載能力も一級品。こんなへりに乗れるっ
てのは、パイロットとしては幸せでしてねえ」

（こいつ、ローと話が合いそうだな）

熱く語るヴァイスを見てそう思う隼人。

「もっつ！ヴァイス陸曹！」

「んあ？」

そんなヴァイスに、リインが怒ったように話す。

「ヴァイス陸曹は皆の命を乗せる乗り物のパイロットなんですから、
ちゃんとしてないと駄目ですよっ！」

（その言葉をライトにも言ってくれ）

リインの言葉を聞き、しみじみ思う隼人。

「へいへい、分かってまさあね。リイン曹長」

指を二本立て、ウィンクしながらヴァイスが答える。

「なあ、こいつで大丈夫か？」

不安になってきた隼人が、はやてとフェイトに聞く。

「隼人さん、それはひどくないですかい？」

「いやだって……なあ？」

「あはは。まあわからんでもないかな」

「まあ普段のヴァイスを見てるとね」

「八神隊長もフェイトさんもひでえや」

そう言っただけで落ち込むヴァイス。

「で、どうなんだ？」

「腕は確かやよ。それは間違いない」

「や、八神隊長……」

「後は軽い人間やけど」

「やっぱひでえっ！」

「ま、はやてが言うんなら、腕は確かなんだろう。じゃあしっかり頼むぜ、パイロットさん」

隼人は、そう言っただけでヴァイスの肩を叩いてへりに乗り込んだ。

「了解」

親指を立ててそれに答えるヴァイス。

「なんや二人共、もう友達みたいやね」

「二人共気さくな性格だから、色々と気があつんじゃないかな？」

「まあ六課の中じゃ、スリーストライカーズに一番近い人間やろうしね。後の二人とも気があいそうや」

そう言つて、ヘリの中に入るはやて。

「ふふつ。そうだね」

フェイトもそれに続く。

ヘリの中では、既にヴァイスが操縦席で色々操作を行っていた。

「八神隊長、フェイトさん、隼人さん、行き先はどちらに？」

飛行準備ができたヴァイスが、後ろの三人を見ながらそう聞く。

「首都クラナガン」

「中央管理局まで」

それにはやてとフェイトが答える。

「了解」

そう言つて、体勢をもとに戻し、操作パネルを見る。

「行くぜ、ストームレイダー」

『オーケー。テイクオフ、スタンバイ』

ヴァイスのデバイス、ストームレイダーがそう言つと、へりは空に飛び立った。

*

「ふわあゝあ」

広大なる海の前で、大あくびをするライト。

「ライトくん。せめて後輩の前ではしっかりしてね」

ライトの隣で、制服の佇まいを直していたのはがそう言つ。

「今更遅いつて。それより、本当にいいんだな？」

「うん。あの子達にとつてもいい勉強になると思つしね。もちろん

私も」

「そうかねえ。参考になることなんてないと思うぞ。特にローは」

「まあ、君たちの実力と能力チエックもかねてるからね。存分に暴れてよ」

「存分って言うてもリミッターつきだけだな」

「どれくらい落とされてるの？」

「俺もローもAAだよ。隼人はAだったと思う」

「ライトくん達の元の魔導師ランクは？」

「俺が空戦SS、ローが空戦S+、隼人が総合SS+」

「ふええ。皆すごいね」

「エースオブエースに言われてもなあ」

「にゃはは」

さつきから二人はそんな会話をしながら、ある人物を待っていた。

「しっかし遅いなあ、あいつら」

「おかしいな。もう来るはずなんだけど……」

「大方だだこねてるんだらうけどな。整備室から出たくないって」

「それってもう禁断症状になってない？」

「そんなのとっくの昔からだよ」

「に、にやはは……」

なのはは苦笑いするしかなかった。

「なのはさーん、ライトさーん」

そんな二人に、名前を呼びながら近寄ってくる人物が二人。

「シャーリー」

なのはが一人の人物の名前を呼ぶ。

「……………ローはやっぱりこうなったか」

シャーリーに引きずられているもう一人の人物、ローを見て呟くライト。

「やっぱりって……………分かってたんなら押し付けなさいよお」

「分かってたから押し付けたんだよ。それにこいつの技術力は役に立つだろ？」

「それは……………正直まるで適う気がしないくらいすごかったですけど」

「だろ？役に立ってるんだから、この位目を瞑れ」

「うう……はい」

うなだれながら、しびしび頷くシャーリー。

「あ、戻ってきたな」

走りこみに行っていたフォワード四名が、ライト達の方に向かって走ってきていた。

*

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるから、ちよつとだけ大切に扱ってね」

預かっていたデバイスを、四人に返したなのはが、軽く説明する。

（だったら俺とローのは別に必要なかったかもな）

シャーリーの隣で、なのはの説明を聞いているライトはそんなことを思った。

「それと、メカニックのシャーリーから一言」

シャーリーを見てなのはが言う。

「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆はシャーリーって呼ぶので、よかったですらそう呼んでね」

そう言つて四人に笑いかける。

「皆のデバイスを改良したり、調整したりもするんで、時々訓練を見せてもらつたりします。あつ、デバイスについての相談とかあつたら、遠慮なく言つてね」

「……はいつ」「……」

シャーリーの言葉に元気よく頷く四人。

「おいロー。お前も軽く自己紹介しとけ」

「はあい」

そう言いながら、起き上がるロー。

「特別実行分隊ストライカー分隊、ライティング分隊補佐担当のロブ・ランゼルです。僕もシャーリーと同じで、メカニックデザイナーもやってるんで、デバイスについての相談なら、いつでも言つてね」

「「「はいつ」「」」

「ロー兄、勝手に変な機能つけないでよ?」

「何年前の話?今じゃもうそんなことしないよ」

「ああ、そんなこともあったなあ。直す俺の身にもなれって言うてぼこぼこにしたこともあったっけ」

「ライトくんもデバイスの改良とか調整とかできるの?」

「ローにその技術を教えたのは俺だよ」

その言葉に、ローとスバル以外の全員が驚く。

「ライトくんって本当に何でもできるんだね」

「んなことねえよ。俺だって、楽器で弾けないものくらいある」

「楽器も弾けるの?」

「ああ。ギターにベースにピアノにバイオリンにドラムにフルートにハーモニカにトランペットくらいかな。ジャンルは、クラシックにバラードに……」

「もういいよ。ライトくんがどれくらいすごいかは分かったから」

「え?今のつてすごいなの?」

その言葉に一同哑然。

「スバル、さっきの話、本当なの？」

「楽器のこと？」

「全部よ全部。デバイスのとか……」

「本当だよ。暇なときギン姉のデバイスをよく調整してたから。楽器も、今言っただのは全部聞かせてもらったことあるよ」

「ほ、本当なんですね……」

「す、す……」

小声でライトの今言ったことを話しているフォワード陣。

「じゃあお喋りはこの辺にして、早速訓練に入ろうか？」

「は、はあ……」

「でも、ここですか？」

なのはの言葉に、スバルとティアナが疑問の声をあげる。

(そりゃ普通はそう思うよなあ)

ティアナの言葉に心の中で同調するライト。

「ふふっ。シャーリー」

「はい」

なのはに呼ばれて、手をあげて元気よく返事をした後、その手を一振り。

すると、シャーリーの周りにいくつかのモニターやキーボードが現れた。

「機動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレータ」

キーボードを操作しながら、シャーリーが説明をする。

「ステージセット」

すると、海にいくつも浮かんでいた六角形のものの上に、街ができた。

「うわぁ……」

「わぁ……」

「うわぁ……」

「すごい……」

上から順に、スバル、キャロ、ティアナ、エリオが驚きの声をあげる。

それを少し離れた場所で見ている赤毛の少女がいた。

「ヴィータ、ここにいたか」

赤毛の少女、ヴィータの後ろから女性の声がした。

その女性はヴィータの隣に立ち、ヴィータと同じようにフォワード陣のことにを見た。

「シグナム」

隣の女性、シグナムを見上げながらその名を呼ぶヴィータ。

「新人達は早速やっているようだな」

「ああ」

「お前は参加しないのか？」

「四人共まだよちよち歩きのひよっこだ。私が教導を手伝うのはもうちょっと先だな」

「そうか。ならストライカーの方はどうだ？」

「……………ふざけた野郎だよ。いつも適当に、へらへらしてそうなの…辛いことなんて何にも知らなそうなの、ただ才能だけで押し上がった。それが私の第一印象だよ」

「そうか。まあ確かに、しっかりしてるとは言えないだろうな」

「だろ？それに今はそんな奴らにかまってるくらいなら、自分の訓

練をしたいしさ……同じ分隊だからな。私は空でなのはを守ってやらなきゃいけねえ。あんな補佐なんか頼るわけにもいかないしな」

「……そうか。頼むぞ」

「ああ。そういえばシャマルは？」

「自分の城だ」

*

陸戦用訓練シミュレータ。

そこに四人の男女と、それを見守る四人の男女。

「よしつと。みんな、聞こえる？」

なのはがフォワードの四人に、シミュレータのビルの上からそう言う。

「「「「「はいっ
「「「「「」

「じゃあ、早速ターゲットを出して行こうか。まずは軽く八体から」
「動作レベルC、攻撃制度D、ってところですかね」

キーボードを操作しながらシャーリーがなのはに聞く。

「うん」

シャーリーの言葉に頷いた後、下にいる四人を見る。

「私達の仕事は、搜索指定ロスト・ロギアの保守管理。その目的の為に、私達が戦うことになる相手は……これ」

フォワード四人の後ろから、いくつかの魔法陣が現れ、その中心から、青色の機械が出てくる。

（あれがガジェットって奴か。話には聞いたことあるけど、そんなに厄介なのか？）

青色の機体、ガジェットドローンを見てそう思うライト。

《ロー、どう思うっ？》

念話でローに聞いてみるライト。

《ん〜。見た目で判断したらいけないのは戦いの常識中の常識だからねえ。まだわかんないよ》

《そりゃそうか。ま、今はそれよりも……》

《だね。賭けるのはいつものでいい？》

《ああ。今日こそ勝つ。この前ギンガのせいで財布が空っぽになったからな。これ以上の出費はごめんだ》

《いやだから貯金……》

《だからおろしたくないんだよっ！それに、やっぱり一回くらいは勝ちたいしな》

《ふふふ。ごちになります》

《ぜってえ勝つつ！》

そんな会話をしているライトとローの前では、なのはとシャーリーがガジェットのことを新人達に説明していた。

「自立行動型の魔導機械。これは、近づいてくると攻撃してくるタイプね。攻撃は結構するどいよ」

「では、第一回模擬戦訓練。ミッション目的。逃走するターゲット八体の破壊。または捕獲。15分以内」

「……はいつ」「……」

説明を聞き終えた四人が元気よく返事をする。

「それでは……」

「ミッション……」

「スタートッ！！」

それを合図に、八体のガジェットが逃げ出した。

（さて、四人はクリアできるかな？）

*

時空管理局、ミッドチルダ地上本部中央議事センター。

そこでは、はやて達三人と、あちこちのお偉いさん達が議論を交わしていた。

「搜索指定遺失物、ロスト・ロギアについては、皆さんよくご存知のことと思います」

お偉いさん達に、はやてがロスト・ロギアについて語っている。

（地上本部か……少し懐かしいな）

隼人ははやての言葉を聞きながら、そんなことを思っていた。

（ライトは何て思うかな？あいつのことだから、どうせ知るかって答えそうだけど……）

自堕落な友人を思い浮かべ、秘かに苦笑する隼人。

「様々な世界で生じたオーバーテクノロジーのうち、消滅した世界や、古代文明を歴史持つ世界において発見される、危険度の高い古代遺産。特に大規模な事件や災害を巻き起こす可能性のあるロスト・ロギアは、正しい管理を行わなければなりません。発掘や密輸による流通ルートが存在するのも確かです」

はやてが言葉を紡ぐ度に、モニターの画面が変わる。

「さて、我々機動六課が設立されたのには、一つの理由があります」

モニターに、赤い宝石が移る。

「第一級搜索指定ロスト・ロギア。通称“レリック”」

（これがレリックか……）

「このレリック、外観は只の宝石ですが、古代文明時代に何らかの目的で作成された、超高エネルギー結晶体であることが判明しています。レリックは、過去に四度発見され、そのうち三度は、周辺を巻き込む大規模な災害を発生させています」

モニターに災害の映像が移る。

(……あの時の空港火災はこれが原因だったのか)

一番始めに出てきた映像を見て、そう思う隼人。

お偉いさん達も、騒つき始める。

「そして、後者二件では、このような拠点が発見されています」

モニターがまた変わる。薄暗い部屋に、ポットやパイプがいくつも
ある映像。

(生体研究施設か?)

隼人が少し眉をひそめながらそう思う。

「極めて高度な、魔力エネルギー研究施設です。発見されたのは、
いずれも未開の世界。こういった施設の建造許可のされていない世
界で、災害発生直後にまるで足跡を消すかのように破棄されていま
す。悪意ある、少なくとも、法や、人々の平和を守る気のない、何
者かがレリックを収集し、運用しようとしている、広域次元犯罪の
可能性が高いのです」

モニターが暗くなる。

「そして、その何者かが使用してると思われる魔導機械がこちら」

モニターに、黄色の目玉みたいなのがついた、棒状の青い機械が映
る。

「通称、“ガジェットドローン”。レリックを始め、特定のロスト・

ロギアの反応を搜索し、回収しようとする、自立行動型の自動機械です」

*

「うおおおおっ!!」

スバルがガジェット四機に向かってリボルバーシュートを放つ。

ドゴオンッ!

だがあっさり避けられる。

「何これっ!?!動き早っ!」

ガジェットの動きを見てそう叫ぶスバル。

ガジェットの向かう先には、エリオが待ち構えていた。それに気付いたガジェットが、エリオに向けてレーザーを放つ。

それをエリオはよけて、自分のデバイスを振りかぶる。

「てやああああっ！てやあ！はあっ！」

二つの衝撃破を放つ。

ドオン！

ドオン！

しかしそれもあっさり避けられ、エリオを通りすぎて逃げていくガジェット達。

「駄目だ……ふわふわ避けられて、当たらない」

「前衛二人、分散しすぎっ！ちょっとは後ろのこと考えてっ！」

《は、はいっ！》

《ごめんっ！》

ティアナがデバイスの銃に、魔力を溜める。

「ちびっこ、威力強化お願い」

「はい。ケリユケイオン」

『イエス。ブーストアップ』

「シューーーっ！！」

ドオンドオンドオンドオンッ！！

強化された四発の弾丸が、ガジェットに向かう。

だがその弾丸は、ガジェットに当たる寸前で消えてしまった。

「バリアッ！？」

「違います！フィールド系！」

「魔力が消された！？」

ティアナ、キャロ、スバルの順でそう言う。

「あれは……アンチマジックフィールド？」

ライトが少し驚いたように呟く。

「そう。ガジェットドローンには、ちょっと厄介な性質があるの。

ライトくんの言うとおり、攻撃魔力をかき消す、アンチマジックフィールド。通称AMF。普通の射撃は通用しないし……」

「あつ、くそつ。このっ」

スバルがなのはの説明の途中で、ガジェットの逃げていく方に、ウイングロードを作る。

「スバルッ！バカ、危ないっ！」

ティアナの忠告も無視し、ウイングロードに乗り、突っ込むスバル。

「あんのアホ……」

思わずそう呟くライト。

「それに、AMFを全開にされると……」

なのはの呟きと同時に、シャーリーはガジェットをそうさし、AMFを全開になるよう操作した。

スバルのウィングロードが途中で消える。

「ふえっ！？うわたたっとうわああああああっ！！」

ガシャアアン！

スバルは為す術もなく、先の無くなったウィングロードを走り、そのまま廃ビルに突っ込んだ。

「飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる」

「いやもうちょい早く言ってやるつよ」

なのはの言葉に、ライトが突っ込む。

「言うよりは、自分の体で味わった方が速いかなって」

「あゝ。まあスバルの場合そうかもな」

「でしょ？」

「それよりスバルは無事かなあ？」

「何言ってるんだよロー。あいつの取り柄は頑丈さだけ？この程度で怪我なんてするかよ」

《スバル。無事か？》

念話でスバルに聞くライト。何だかんだでやはり心配らしい。

「いつつ。な、何とか」

頭を撫でながらそれに答えるスバル。

「無事だった？」

ローがニヤニヤしながら聞いてくる。

「にやはは。やっぱり心配なんだね」

「……………ローや隼人みたいな奴が増えた気分だ」

「「気のせい気のせい」」

「……………はあ。まあいいや。にしてもあれってデバイスに細工してできてるんだよな？」

ローとなのはの相手が面倒くさくなったライトが、シャーリーに聞く。

「はい。訓練中は、皆のデバイスに、ちょっと工夫をして、擬似的に再現してるだけですけどね。でも、現物からデータ取ってるからかなり本物に近いですよ」

「その細工って、俺とローのにも？」

「はい。ちゃんとしたよ」

「ふーん」

(だったら俺達もやっという方がいいかも。まだ相手したことないわけだし)

シャーリーの説明を聞き終わったライトは、そんなことを思いながら、視線をスバル達フォワード陣に戻した。既になのはから、どうすればいいか考えて、素早く行動するように言われたようだ。

(ティアが何か考えていて、スバルとエリオはその為の足止め役。キャラはサポートかな?)

散っていくフォワード陣を見てそう思うライト。

「へえ。皆よく走りますねえ」

フォワード陣が移っているモニターを見ながらそう呟くシャーリー。

「危なっかしくてドキドキだけだね」

「子供なんて皆そんなもんだろ」

「まあ確かにライトの子供の頃のことを考えたらそうかもね」

「いやどつちかと言うと、俺がお前の面倒見てたよな？」

「さっ、スバル達に集中しなきゃ」

「分かりやすく話そらしてんじゃねえっ！」

「はいはい。ライトくん落ち着いて。シャーリー、デバイスのデータとれそう？」

「良いのがとれてますよ。四機とも良い子に仕上げますよ」

「あっ、それ僕も手伝うよ」

「本当ですか！？助かりますっ！」

(こいつ、さっきの禁断症状状態のローのこと忘れたのか？……………まあ、俺に被害は出ないだろうし、いっか)

ライトは、ローとシャーリーの話聞いてそう思った後、モニターに目を移した。

ガジェット四機の向かう先に、エリオとスバルが待ち受けている。

「行くよ、ストラダー！カートリッジロードッ！」

ガシュッ！

ストラーダから、カートリッジが一つ出る。

エリオの足下に、三角の魔法陣が出現し、エリオはストラーダを上に掲げ、素早く回す。

「てやああああああああっ！てやあ！はあっ！せやっ！」

ドゴォ！ズガァ！ゴォオン！

掛け声とともに何度も自分の足場を切り付け、その足場を崩す。

（成る程。ガジェット達の逃げ道を限定させる寸法か）

エリオの行動に、納得したようにそう思うライト。

崩れた足場は瓦礫と化し、ガジェット達を襲う。

それから逃れる為に上に逃げたガジェットに、スバルが突っ込む。

「潰れてろおっ！」

掛け声とともにリボルバーナックルでガジェットの一機に殴りかかるが、AMFで魔力が無効化されて威力が出ず、破壊できなかった。

「くう。やっぱり魔力が消されちゃうと、いまいち威力が出ない……」

そう呟くスバルの後ろにガジェットが近づく。

「そんならっ！」

スバルは振り向いてそのガジェットを蹴り、地面に叩きつけると、それに馬乗りになる。

「ううりいやあああああああああああああああつ！
」

掛け声とともに、ガジェットに無理矢理リボルバーナックルをめり込ませ、そこから回転を加えて破壊した。

「うわあ……何て力業」

「まあ、スバルらしいやり方だけどな」

それを見ていたローとライトが呟く。

スバルはガッツポーズをとっていた。

「連続行きます」

キャラロがガジェット達を睨みながらそう呟く。

「フリード、ブラストフレア！」

フリードの口の前に、火球ができる。

「ファイヤツ！」

キャラロの言葉と同時に、フリードはその火球をガジェット達に放つ。

「我が求めるは戒める物、捕える物、ことのはに答えよ、鋼鉄の縛鎖、連結召喚、アルケミックチェーン！」

キャラの詠唱が終わると同時に、炎に動きを止めていたガジェット達の下に、召喚魔法陣が現れる。

そこからいくつかの鎖が出てきて、ガジェット達を捕えた。

「うわあ。召喚ってあんなこともできるんですね」

「無機物操作と組み合わせるね。中々器用だ」

「てか、マジであれで10歳？才能の塊みたいな奴だな」

「ライトくんは人のこと言えないと思うけど？」

「俺だって10歳のころは……既に魔導師ランクがオーバースだったような気がしないでもない」

「いや9歳の時点でオーバースだったじゃん」

「9歳で!?!」

シャーリーが鳩が豆鉄砲くらったような顔をしている。

「ま、まあ過去よりも今が大事だよ。うん」

そう言って適当に誤魔化すライト。視線は、モニターに移っているティアナ。

「こちとら射撃型。無効化されて、はいそつですかつて下がったんじゃ、生き残れないのよっ！」

ガシュッ！ガシュッ！

二つのカートリッジをロードし、足下に魔法陣を展開し、銃を逃がっているガジェットに照準をあわせる。

《スバル！上から仕留めるから、そのまま追つてて！》

《おつっ！》

「魔力弾！？AMFがあるのに？」

ティアナのとつた行動に、驚いたようにシャーリーが言う。

『いいえ。通用する方法があります』

「うん」

シャーリーの言葉にレイジングハートが答え、それになのはが頷く。

「今のティアナにできるかねえ」

それを見ていたライトは、誰にも聞こえないくらい小さく呟く。

魔力弾をチャージしているティアナ。

（攻撃用の弾体を、無効化フィールドで消される膜状バリアで包む。フィールドを突き抜けるまでの間だけ外殻がもてば……本命の球が、

ターゲットに届くっ！)

魔力弾を薄い膜状バリアで必死に包もうとするティアナ。

「フィールド系防御を突き抜ける、多重弾殻射撃。AAランク魔導師のスキルなんだけどね」

「AA!？」

なのはの言葉に驚くシャーリー。

「今のティアナには難しい魔法だね。ライトはできるところっ?」

「出来るさ。あいつなら」

「ふん。なら、できるんだろうね」

モニターでは、ティアナが既に魔力弾の半分以上を、膜状バリアで包んでいた。

(固まれっ!.....固まれっ!.....固まれっ!.....固まれっ!)

「はああああああああああああっ!」

気合いとともに一気に包み終えるティアナ。

「バリアブルシュートっ!」

そしてそれをガジェットに放つ。

ドガアッ！

ドゴオッ！

バリアブルシュートは、見事二体のガジェットを貫いた。

「ティア！」

《ナイス！ナイスだよティア！やったねえっ！流石っ！》

ガジェットを追いかけていたスバルは、足を止めてティアナに歓喜の声を念話で伝えた。

「はぁ……はぁ……。スバルうっさい」

その後、地面に仰向けに倒れるティアナ。さっきの攻撃が余程こたえたのだろう。

「このくらい……当然よっ」

それを見ていたローは、笑いながらライトのほうを向いた。

「やっぱり、ライトの予想通りになったね」

「そおだな。それより、次は俺達だぞ」

「分かってるよ」

腕をぶんぶん回しながらローが言う。

「じゃあなのは。フォワード陣を一旦ここに集めてくれ」

「うん、わかったよ」

「うわあ。ドキドキしますね」

シャーリーが緊張したようにそう言う。

なのは念話で、フォワード陣にここに来るように指示をだした。

*

「んじゃ、これから俺とローで模擬戦するから」

戻ってきたフォワード陣に、まえぶりなしでいきなりそう言うらしい。

フォワード陣三人は驚いているが、スバルはやっぱりという顔をする。

「スバルは知ってたの？」

なのはがスバルに聞く。

「あつ、はい。よく模擬戦の話は聞いてましたから……」

「あ、あのっ……」

ティアナが声をあげる。

「どうしていきなり模擬戦なんてやるんですか？」

当然の疑問だった。

「理由は三つ。一つ目は、なのはが俺達の実力とか、戦い方を見るため。今後の出動のときの配置とか考えたら、まあ当たり前だな」

「二つ目は？」

「二つ目はお前らにとっての参考になれば、だ。俺達クラスの模擬戦は、いい経験になるかもしれないからな」

「最後は？」

「腕が鈍っていないかの確認。任務とかで闘うことはあっても、同クラスの奴との闘いなんてあんまないからな。こういうのはやっぱり必要なんだよ。納得した？」

「はい。じゃあ、色々盗ませてもらいます」

「生意気言うね。ま、やれるもんならやってみろって感じだけどな。じゃあなのは。軽い準備運動がてら、さっきのガジェットと闘っていいか？」

「うん、いいよ。数と時間は？」

「うん……三十体と一分で」

「ええっ!？」

「さ、三十体を……」

「一分で？」

「……本当にそれでいいね？」

「ああ。俺とローそれぞれに三十体だから、計六十体だな」

「」「」「ええっ!？」」「」「」

「ろ、六十体を一分？」

「シャーリー、それで設定して」

「なのはさん？」

「本人がそれでって言うてるから、多分大丈夫」

「わ、わかりました」

「じゃあ、行くか」

「どっちが早くつぶせるか、競争する？」

「いいぜ。ウォーミングアップで本気は出さないけどな」

そう言つて、二人はバリアジャケットに身を包んだ。

黒を主張している騎士をイメージさせるライトのバリアジャケット。

白を主張している王子をイメージさせるローブのバリアジャケット。

二人のバリアジャケットは、まるで正反対だった。

「じゃあ、二人とも行きますよ」

所定の位置についた二人に、シャーリーが声をかける。

「「いつでも」

「それでは……スタートッ！」

*

「だああああっ！くっそ、負けたっ！」

ライトが頭を掻きながら叫ぶ。

「あはは。まあコンマ数秒差だったけどね」

二人の足下には、大量のガジェットの残骸。

『ふ、二人ともすごいですね……………』

シャーリーがそう呟く。

ライトがかかった時間は三十秒。ローブがかかった時間は二十九秒。

しかも一気に何体も片付けることはなく、一体一体倒してこの時間なのだ。流石のなのもこれには驚いている。フォワード陣に至っては、目を点にしていた。

「じゃあ、本番行きますか」

「ああ。分かっているとと思うが、負けたら……………」

「分かってるよ……………」

そう言って不適に笑う二人。

「？何の話でしょうか？」

エリオが不思議そうに呟く。

「あゝ。多分それは……………」

スバルが答えようとするが、それは遮られた。

モニターに移っている二人が動いたからだ。

「行くぞローツ！」

「こっちも行くよっ！」

ローはライトに突っ込み、ライトはローから距離をとる。

「「晩飯をかけて、いざ勝負っ！！」」

第四話 集結（後書き）

ローブとの模擬戦。

勝てば晩飯はただ。ギンガのせいで財布が寂しい今、負けるわけにはいかない。

かと言って俺、あいつに……

だあああっ！！

この際ネガティブな考えはなしだっ！

あの作戦さえ使えば勝てるはずだし……

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS（三人のストラ
イカー）《第五話、初日の終わり》

やっとベッドで寝れると思ったら……何これっ!？

第五話 初日の終わり（前書き）

六課に来た初日。

いきなりいろんなことがあったような気がする。

スバルや他のフォワード陣の成長に期待しながら、訓練を見ていたら、中々優秀で期待できた。

そして、ローとの模擬戦が始まった。

俺は、勝てるんだろうか？

それでは第五話、初日の終わり

始まり始まり〜

今更だけど、昔話みたいな始まり方だな。

第五話 初日の終わり

「「晩飯をかけて、いざ勝負っ!!!」」

ローブが一気にライトとの距離を縮め、自分のデバイス、ベレンスを横に一振り。ベレンスは、刀身が黄色、柄が黒の刀だ。剣ではない。

バリインツ!

しかし、ローブが切ったライトは、ガラスが割れるような音とともに崩れ落ちた。

「……ミライイリユージョン。幻術か」

(何時の間につ!?)

なのはがそれを見て驚く。幻術を使う暇なんてなかったはずだ。なのに何時使ったのか?

(……………どこだ?)

ローブは意識を集中させる。探索系の魔法は持っているが、どうせ結界を張っているだろうから、それは無意味だ。なら、攻撃してきた時に、いつでも対応できるように意識を集中させるしかない。その攻撃から場所を逆算すれば、ライトの位置もわかる。

(幻術はやっぱり面倒だな。気配は消してるから、向こうの位置もわからないし……相変わらず面倒くさい闘い方だなあ)

バチバチバチ。

何時の間にか、ロープの四方を、電気を帯びた魔力弾が囲んでいた。

「ナパームクラスター……本当に面倒だなあ。あれ？何で僕がライトの口癖を言ってるんだろう？」

クラスターはまだ、ふよふよ浮いているだけだ。

「……………」

(動けば一気に、か?)

警戒しながら、一步前に進んだ瞬間、計十六発のクラスターが、それぞれ別々のカーブを描きながらロープに向かう。

「ベレンス」

『アクティブ』

ロープの体が黄色の光に包まれ、一気にその場から離れる。

クラスターの包囲網から抜け体勢を整えるロープ。

バリインツ！

「ストライクバスターッ！！」

『ストライクバスター』

いきなり空間がひび割れ、そこからライトが青い砲撃を、体勢を整えたばかりのローブに放つ。

ドゴオオオンッ！！

爆発によって舞い上がった噴煙が、あたりを包み込む。

「クルセイド、ローの位置は？」

『わかりません。結界を張っています』

「なら、一旦離脱だ」

『わかりました。ミラーイリユージョン』

そして、またライトは姿を消す。

「いった〜〜……」

廃ビルの中で、ローブがそう呟く。ストライクバスターを、アクティブで何とか避けたが、爆風までは避けきれなかったようだ。

「こんな模擬戦も中々ないだろうね。お互いに姿を隠すなんて」

『どうしますか？マスター』

「う〜ん……空戦にもっていった方がいいんだろうけど……」

『狙い撃ちされますか？』

「確実にね。アクティブ使っても、ダメージは受けるだろうけど…」

『今よりはマシですか?』

「うん。プロテクション張りながら、一気に空に上がって、空戦に持ち込む」

『了解しました』

*

「……さて、どうするか」

廃ビルの陰に隠れているライトが呟く。幻術で隠れるのは、それなりに魔力を消費するのでやめたのだ。

「今回は勝ちたいなあ」

『勝てますかね?』

「さあ?もういつそ空戦に持ち込んで、一か八かの作戦やってみよ

うかな？」

『あれですか？』

「まだローにも見せたことないし、隼人には成功しただろ？」

『……………そうですね。私も勝ちたいですし、やりますか』

「ああ。絶対勝つっ！」

*

「……………行くよ」

そう呟いて、ロープは廃ビルから飛び出した。

『アクティブ』

一瞬で空まであがるロープ。

(？攻撃してこない？)

ロープは、砲撃や射撃が一切こないことを疑問に思う。

「よお、ローブ」

ローブの視線の先に、ライトがいた。

「……自分から空戦に持ち込むなんて、勝負捨てた？」

「おいおい。空戦ランクは俺の方が上だぜ？」

「分かってるでしょ。近接戦で僕に勝ち目がないのは」

「ああ。けどな、空戦は近距離戦じゃなくて、中距離や長距離の方が有利に働くんだぜ」

「僕のスピードを知っててそんなこと言うなんてねえ」

ベレンスを構え、一步踏み込むローブ。

「クルセイド」

『イエス。ガトリングシュート、セット』

ライトの周りに、大量の青い光弾が現れる。

「それは動きが単純だから、簡単に避けられるよ」

「だろうな。一方からだけなら、な」

「っ!？」

何時の間にか、ローブを取り囲むように、四方面それぞれに、ガトリングシュートをセットしたライトがいた。

「……幻術使いすぎでしょ」

「そうしなきゃ、お前には勝てないからな」

四人のライトが、クルセイドをローブに向ける。

「ガトリングシュートッ!!」

計、二百四十発の魔力弾が、ローブに襲いかかる。

「ベレンスッ！」

『裂風斬』

「はあっ！」

四方面のうち、一方向に向かって斬撃を放つ。

だが、斬撃は魔力弾を擦り抜けた。

（こっちは幻術！）

『アクティブ』

高速移動で幻術と分かった魔力弾の群れに突っ込む。残りの三方向全ての魔力弾をよけることに成功した。

「さて、本体は……」

「ここだよ」

「え？」

ローブが上を見ると、そこには四つの青い光弾を携えた、ライトがいた。

ローブが慌ててさっきの三人を見ると、バキッ、という音とともに崩れ落ちた。

『ゴールドバインド』

ガキッ

ローブを金色の分厚いバインドで捕まえる。

「しま……」

「アトランタ……」

「くっ……ベレンス」

『イエス。居合いモード』

ローブのベレンスを持っている手とは逆の手に、鞘が現れる。

「はぁぁぁぁぁ……」

「三連……」

もう光線は寸前まで迫っていた。

「破斬っ！！！」

超高速で居合いで鞘から刀を抜き、斬撃を放ち、ベレンスを鞘に戻し、また放つ。

それを三回繰り返し、破斬を三回連続で放ち、全ての光線を相殺する。

(よし、このまま……)

『ドライブシューター』

「シューッ！……」

「なっ！？」

いくつものシューターを、一瞬だけ油断し、隙を作ったロープに放つ。

ドドドドドドドドドドドドオオオオオオオンッ！！

全弾命中し、地上に落下するロープ。

「これで決めるっ！クルセイドッ！……」

『ストライクバスター』

ドゴオオオン！！

クルセイドの先端から、青い光線が、落下したロープに当たり、地面に叩きつける。

「だめ押しだっ！」

『ガトリングシュート』

「シュートッ！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン！！

計六十発もの魔力弾が、ロープの落下した辺りの地面をえぐる。

「はぁ……はぁ……」

ライトは、息を切らしながら、ロープの落下した場所を睨みつけていた。

そこは噴煙が上がっていて、ロープの状況がわからなかった。

*

「す、すごい……」

「あんな風に幻術を使うなんて……」

「あの剣速も、見えなかった……」

「砲撃の威力も使い方も……」

フォワード四人は目を見開いていた。

「な、なのはさん……」

「うん……正直、予想以上だったよ。あれでリミッター付きなのが信じられないよ」

なのはも驚きながら、そう呟く。

「で、でもあれ、やりすぎじゃあ……」

「だね。あれじゃローブくんが無事かどうか……取り敢えず模擬戦はここまでだね」

そう言って、なのはが模擬戦を終わらせようとすると、ある違和感に気が付いた。

他の皆も気付いたのか、不思議そうな顔をする。

モニターに映っているライトは、決して勝利した喜びに染まっているのではなく、いつ、どの方向から、どんな攻撃がきても対処できるように、集中していた。

構えは決して解かず、プロテクションをいつでも張れるようにして、ロープの落ちた所から目を離さなかった。

「ライトさん、すごい集中力ですね……」

「う、うん……」

「スバル、ロープさんとライトさんの模擬戦での勝率は？」

「え、えっと……その……」

「はつきり言いなさい」

「わ、分かったよ。ライ兄が言うには、模擬戦でロー兄に勝ったことがないって……」

「……え？」

全員がその言葉に驚く。

あれほどの力を持つライトが、一度も勝ったことがないと言うのだ。驚かないほうがおかしい。

「じ、じゃあまだ……」

「勝負はついてない？」

モニターを見る全員に、緊張が走った。

*

「……直撃したのはドライブシューターだけか」

ライトはクルセイドを構えながら、そう呟いた。

実際、さっきの攻撃で直撃したのは、ドライブシューターだけだ。ストライクバスターがぶつかると直前、ローブはプロテクションで威力を和らげ、ガトリングシュートを剣撃で全て弾いていた。

「……イージスの準備は？」

『既に出来ています』

「よし」

（もうこっちも向こうも、あんまり魔力は残っていない。なら、次

で勝敗がつく。あいつの最速の剣技をイージスで防いでカウンターで成功すれば俺の勝ち。失敗すればローの勝ち)

ライトは、いつもみたいなポケットとした顔ではなく、真剣な顔だ。

ライトでも、ローブの剣技を防いでカウンターできる可能性は五分いや、それ以下だろう。

(どっからでも来いや)

最後の一発、ストライクバスターのチャージをするライト。

もうローブもかなりボロボロのはず。なら、これで決めることもできる。

(集中しろ……)

意識を研ぎ澄ませ、ローブの落下した場所を見る。

瞬間。

少しだけ煙が揺れた時には、ローブはライトの後ろにいた。

*

「「「えっ!?!」「」」」

いきなりローブがライトの後ろに現れたことに、驚くフォワード陣。

「な、なのはさん。今の見えましたか？」

「……………私でも見えなかった、かな」

「え?じゃあ幻術で姿を消してたんですか?」

「……………多分違う。あれは、純粹な速さだと思う」

「そんな……………」

なのはの言葉に、シャーリーは驚くことしかできない。

そして、次の光景は、一同をさらに驚かした。

*

「閃光斬っ！」

後ろからローブが、目にも見えない速さでライトに斬り掛かる（もちろん非殺傷設定）。

ガキインッ！

しかし、それはライトのイージスで防がれた。

「……今のに反応するって、どういう反射神経？」

「あんな動きするお前のほうがおかしいっての」

そう言つて、クルセイドをローブの腹に押しあてる。

「零距离ストライクバスターッ！」

青い閃光が、ローブをつらぬ……… かなかった。

体をひねって避けたのだ。

「なっ！？」

「零距离の砲撃技は、横に少し動くだけで避けれる。忘れたの？」

勝利に焦るあまり、ミスをしてしまったライト。本来ならあのタイミングで避けられる者などいないだろうが、相手はローブだ。そんなものは簡単に避けられることを想定しておくべきだったのだ。

そして、避けたローブは、ブレンスを鞘にしまっていた。

「やべっ……」

「破斬」

ドゴオオオンー！！

爆発音とともに、煙が空にあがる。その煙の中から、ライトが墜落していた。

気絶してではなく、ロープと距離をとるために。

(まだ後一発なら、砲撃も撃てる。体勢を立て直して……)

しかし、逃げた先には既にロープが待ち構えていた。

そして、ライトの腹をおもいきり蹴って地面に叩きつける。

「がっ……くっ」

すぐに起き上がって反撃しようとしたが、ライトの首筋にはベレンスが突き付けられていた。

「……………また負けた」

ガツクリとうなだれながら、ライトが呟く。

「ふふっ。ごちになります」

笑いながらそう言ってベレンスをしまっろープ。

「てか、普通あのタイミングで避けるか？」

立ち上がりながら、信じられないという顔で、ライトが呟く。

「君の幻術の多様性の方がびっくりだよ。あそこで全部幻術って、どれだけ性格悪いんだよ」

「あそこで決めるはずだったのに……何だよ、破斬四連発って。ありえねえ……」

「まあ、おかげで魔力と体力をかなり使ったけどね」

「何連までいけるんだ？」

「今はリミッターつけてるから四連くらいが限界かな。リミッターはずしたら、十連くらいは可能だよ」

「うわあ……それ最悪だな。てか、俺もう魔力空っぽなんだけど」

「僕もだよ。誰かさんが砲撃をバンバン撃ってきたおかげで、全身ボロボロだし……」

「俺だってボロボロだったの。しかも負けたから晩飯おごらないといけないし……はあ。今回は初勝利もらえると思っただけだなあ……」

「まあ、今回は今までで一番危なかったね。最後の零距离のあれ、普通に砲撃されたら、負けてたの僕かも」

「うげえ。マジかよ……」

さらにうなだれるライト。

「そういえば、使わなかったね。希少技能^{レアスキル}」

「使ったよ。最後に破斬くらう直前に。でなきゃ、今ごろ全身包帯まみれだったろうよ」

「大丈夫ー!？」

二人がさっきまでの模擬戦のことを話していると、なのは達が駆け寄ってきた。

「よお。どうだった?何か参考になったか?」

ライトがフォワード陣を見ながらそう言う。

「え、えつと……」

四人とも目をそらす。ライト達の闘い方は、技術がないと出来ないものばかりだ。まだひよつこの四人に、参考しろと言うのは、酷な話だろう。

「で、なのは。俺達の実力チェックはできた?」

「まあ、とんでもなく強い、つてのは分かったよ。それより、二人とも怪我大丈夫?」

「平気平気。いつものことだから」

そう言つて、ヘラヘラ笑つライト。

「まあ、いつもボロボロなのはライトだけだね」

「言つなチクシヨウ………てか、また負けたあああああああ
っ!!!」

頭を抱え、半狂乱になるライト。

「ねえライトくん。一つ聞いていい?」

「晩飯おごつてくれるなら」

「一つ聞いていい?」

笑顔で質問を繰り返すなのは。

「はい。何でも聞いてください」

冷や汗を流しながら、そう言つライト。

「一番始めの幻術だけど、あれっていつ使つたの?」

「始め?……ああ、あれか。ちょっと特殊な技法を使つただけだよ」

「特殊な技法?」

「ああ。まず、俺が後ろに下がつたのと同時に、自分の前に、自分の幻術を置いて、その後自分を幻術で隠しただけ。まあ、発動する

瞬間、相手に違和感を与えないために、スピードをあげたりするんだけど……これが結構繊細な作業でな。使えるようになるまで、かなり時間がある」

「……そんな技術聞いたことないよ」

「だって俺が作ったんだもん」

当たり前のように言うライトに、一同はもう、驚くことしか出来なかった。

その後、フォワード陣は夜までなのは地獄の特訓をつけ、グロッキー状態になったのは、言うまでもなかった。

*

「ううっ……」

財布と、目の前でうまさうにラーメンを食べているローブを交互に見るライト。

場所は食堂。時刻はすでに夜中だ。あの後、フォワード陣の訓練が

終わるまで、二人とも一応付き合ったのだ。一応というのは、ただ見ていただけだったからだ。

「……………うまそうに食いやがって」

「他人の不幸は蜜の味って本当だったんだねえ」

ラーメンをすすりながらそう言うロープ。どうやって話しているんだろう？

「……………俺、向こうで食ってくるわ」

そう言って、席から立ち上がる。

「またやるうね〜」

それを手を振って見送るロープ。

食堂の端の席まで行き、そこに座る。一番ロープから離れた席だ。

「……………」

無言でカレーを食べるライト。全く美味しそうではない。

「ああ、これが負け犬の味か……………いつかローにも絶対味わせてやる」

不気味なことを呟きながら、カレーを食べる。そのペースは遅い。

「隣、いいですか？」

「んあ？どつぞ？」

ライトは不思議に思いながらそう言った。

(何でわざわざこんな端に来たんだ？)

もう既に夜中。こんな時刻に食堂を利用する者はほとんどおらず、席なんてあちこちあいているのだ。わざわざ端の、しかも不気味な言葉を呟いて、どす黒いオーラを放っているライトの隣に座るなど、普通はあり得ないだろう。

(どんな物好きか、顔を拝んでやろう)

そう思つて横を見ると、なのはがオムライスの乗ったお盆を、机に置いていた。

「何だ、なのはか」

「何だつていうのはひどいなあ」

「どんな物好きなのか期待したら、知り合いだったんだ。つまらなくもなるさ。只でさえブルーな気持ち100%真つ最中なんだからさ」

カレーを口に放り込みながらそう言うライト。

「にやはは。ご機嫌斜めだね」

「そりゃそつだ。今回の戦術には自信があつたのに……また負けたんだからな」

「ローブくんって本当に強いね」

「一対一で、あいつに勝てる奴がこの世にいたら、俺はそいつを尊敬するね」

「じゃあ私がやってみようかな」

「無理無理。あいつに勝つための最低条件が、ある程度接近戦ができることと、砲撃魔法を持っていることと、あのスピード対応する事だからな」

「随分難しい最低条件だね」

「まあ、団体戦ならわかんないけどな」

「へえ。団体戦で勝ったことあるの？」

「……………このカレー、中々いけるな」

「……………ないんだね」

「……………あいつと戦う奴が真っ先にやられて、そこから一気に陣形を崩されて負ける」

「成る程。まあ確かに、団体戦でも個人の力は重要だしね」

「一応全員をAAクラスで固めたんだけど……………無意味だったよ」

「に、にやはは……………」

なのは苦笑するしかなかった。

「くっそ〜。ローの野郎うまそうに食いやがって……ん？あれは…
…」

ライトが恨めしそうに見ていたローブに、一人の女性が近づいていた。

「あれってフェイトじゃん」

「え？あ、本当だ」

金髪の長髪だから、遠目に見てもすぐに分かった。

「やっぱり執務官同士、気が合うのかねえ」

「そうだね。そういえばライトくんって、教え子とかいるの？」

「……………いるよ」

なのはの言葉を聞いたライトは、少しだけ目を細めてそう言った。

「へえ。やっぱりみんな活躍してたりする？」

「いんや。全然そんなことねえよ。皆普通さ」

そう言って、席を立ち上がるライト。

「じゃあおやすみ、なのは」

「うん、おやすみ」

そう言って、ライトは食堂を後にした。

（あれ？そついや俺達の部屋ってどこだろ？んんん……はやてに聞けばいいか）

そつ思い、部隊長室に足を向けた。

*

「ふふつ。ライトは悔しそうだねえ」

ラーメンをすすりながら、さっき自分がこてんぱんにしたライトを見て呟く。本当にどうやって喋ってるんだろつ。

「負け犬観察って楽しい〜」

性格が若干破綻しているローブ。どうやらライトに勝った時にはこうなるらしい。

「おや？」

そんな悪趣味極まりないことをやっているローブの視界に、ライトに近づくなのはの姿が目映った。

「なのはとライト……お互いが付き合えば、いいからかうネタに……」

「悪趣味だよ、ローブ」

「あつ、フェイト。こんばんは」

「こんばんは。それよりローブってそんなに性格悪かったの？」

「ライトに勝った時の日課だよ。負けた時のライトって、見てるだけで面白いけど、けしかけるともっと面白いからね」

「？何か勝負でもしたの？」

「ああ。今日僕とライトで模擬戦やったんだ」

「へえ。で、ローブが勝って、ライトはあんなに落ち込んでるの？」

「うん。まあ、ライトって僕に勝ったことないんだけどね。だから毎回あんな感じ」

「そ、そうなんだ……」

フェイトがローブの隣に座る。お盆にはうどんが乗っていた。

「ラーメン食べてる横でうどん食べられるのはなあ……」

「え？そう？」

「例えるなら、ラーメン屋があつて、その常連さんの隣でメニューも見ずにうどんを頼む、みないな？」

「いや、それは……」

「昔ライトが言ったネタなんだけど、やっぱり微妙だよなあ」

「……ノーコメントで」

「フェイトはそれが肯定の言葉ってことを理解しよう……あれ？もう食べたんだ」

ロープの視線の先には、食堂から出ていくライトの姿が。

「なのは一人残して行くかなあ？普通」

「じゃあなのは呼んできていい？」

「どうぞどうぞ。僕はライトと違って優しいからね」

「優しい人は、普通、他人の不幸は蜜の味、なんて言わないよ」

「……聞いてたの？」

「ふふっ。じゃあなのは呼んでくるね」

そうやってなのはの所まで行くフェイト。

(にしても、ライトにしては珍しいなあ。いくら負けて気が立ってるからって、一緒に食べてる人ほったらかしにして去るなんて……)

ローブはライトのとつた行動に、疑問を感じる。

「にはは。お邪魔します」

「いや何か違うない？それ」

前の席に座ったなのはに、そう突っ込みをいれるローブ。

「ねえなのは。ライトが席を立つ前、どんな話してたの？」

「え？えっと、教え子がいるかどうか聞いて、その子達が今、活躍してるかどうかとかを聞いたら、その質問に答えて席を立ったの」

「……………成る程ね」

ローブは納得したように呟く。

「「？」」

なのはとフェイトが不思議そうな顔をしている。

「いやあ、何でもないよ。じゃあ僕も食べ終わったから、これで失礼するよ」

そう言って席を立つローブ。

「うん。おやすみロープ」

「おやすみ〜」

「おやすみ。じゃあ、また明日」

そう言つと、ロープも食堂を後にした。

*

「ふわあ〜あ。早く寝てえ」

部隊長室へ向けて歩きながら、大あくびをするライト。そんなライトの行く先に、一人の男がいた。

「いやあ。これはこれは。隼人さん曰く、やる気の欠片もない自墮落男じゃあないですか」

「君は誰かな？悪いけど、チャラ男に知り合いはいないんで」

「ひどいっすよ兄貴っ！久々の再開なのにつ！」

「るっせえっ！先に言ってきたのはてめえだろうがヴァイスッ！！」

「何だあ。覚えてるじゃないっすか、兄貴い」

「うわっ、こいつっせえっ！」

ライトは目の前の男、ヴァイスを面倒くさそうに見た。

どうやらこの二人、過去に会ったことがあるらしい。

「てかお前、今はヘリパイロットなの？」

「ええ、まあ……」

「………そっいや、ストームレイダーは？」

「ああ、ここにっすよ」

そう言っつて、自分のデバイス、ストームレイダーを出すヴァイス。

「久しぶり、ストームレイダー。アホな主人を持つと苦労するな」

「ちょっと、俺よりストームレイダーのほうが対応がいいっつてどっい
うことっすか!?!」

「え？そんなもんだろ？お前なんて」

「やっぱりひでえっ!」

「ははつ。ま、冗談はこの辺にして……久しぶり、ヴァイス」

「……ういっす。武装隊以来っすかね？あん時は色々世話んなりました」

「全くだ」

「いやそこは否定しようよ」

「え〜？」

「あんたはガキっすかつ！？」

「冗談冗談。でも本当に久しぶりだな。背も随分伸びたし……俺のほづが小さいのに、兄貴つてのもおかしな話だな」

「兄貴は兄貴っすから」

「まあいいや。俺もう眠いから、さっさと部屋に行かせてくれ。話はまた今度にでもすればいいし」

「え？でもこっちは部長室っすよ？寮は反対なんじゃ……」

「部屋の場所がわからないんだよ。まだはやてから聞いてないし」

「え？兄貴知らないんすか？」

「ああ。だからそう言って……」

「いやそっちなじゃないんすけど……まあ、聞けばわかるか」

「何の話だ？」

「いや何。こっちの話っす。それじゃ兄貴、自分はこれで」

「ああ。せいぜいまた女に泣かされないように気を付けな」

「兄貴も女泣かせちゃ駄目っすよ」

若干涙声になりながら、ヴァイスが走り去った。

（ああ、思い出すなあ。昔、あいつがセツティングした合コンで、何回も泣かされて、俺がそれをからかって……てか、そのヴァイスを泣かした女は、何でか知らないけど、俺の所ばっか来てたな。あの時の殺気丸出しのヴァイスの顔といったらもう……）

「っと、思い出に浸ってる場合じゃねえな。さっさと部隊長室に行
こ」

*

「ライト、どこ行ったんだろっ？」

(部屋に戻ったのかな?……いやでも、僕達って自分の部屋がわからないんだよねえ。ライトは一刻も早く寝たいはずだから、部屋の場所を知るために……)

「はやての所かな?」

そう呟いて、部隊長室に歩を進めることにしたロープ。

「ふつぎけんなああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつ!!!」

そんなロープの耳に、聞き慣れた二人の男の叫び声が聞こえてきた。その声は、六課隊舎の全てに響き渡るんじゃないかと思うくらい大きかった。

「……何してんだろうね、あいつらは」

そう呟いて、部隊長室に向けて歩きだした。

*

……一時間前

「はあ、何つーか、やっぱりあそこは苦手だな」

クラナガンから帰ってきた隼人が、そう呟く。

「何や情けない。あれくらいのこと、これからしょっちゅうあるで隣を歩くはやてが、そう言う。」

「いや、あの雰囲気にはやっぱり慣れないわ。まあ、まだマシだけどさ」

「マシ?」

「捜査司令になってくれっていう話があったときなんかもっとひどいんだよ。何時間も延々と昇進したらどうだって」

「へえ。やっぱり隼人ってすごいねんなあ」

「別に。俺なんて、ライト達に比べれば全然だよ」

「ふうん……ライトくん達も、やっぱりすごいねんなあ……ん?」

歩いていると、食堂についたはやての目に、ヴォルケンリッターの皆が映っていた。

「あっ、はやてっ!」

ヴィータがはやてに声をかける。

「じゃ、俺はこの辺で」

そう言って、隼人はその場から去ろうとする。

「あつ、隼人。一時間後に部隊長室にライトくん達と来て。話しておくことがあるから」

「……………分かった」

そう言つて、隼人は今度こそ、その場を去つた。

(ああ……………やっぱり昼間のときのことだよなあ。あの時はやてのことを思い出すと……………だ、駄目だ。震えが止まらねえ)

そんな事を思いながら、隼人はライト達を探すことにした。この後ライト達が食堂に現れるとも知らず。

*

「あれ？隼人？何してるの？」

食堂を後にしたローブが、隼人を見付けてそう聞く。

「ああ、ちょうど良かった。お前とライトを探してたんだよ」

「?何で?」

「はやてが、話あるから部隊長室まで来いってさ」

「……………嫌な予感しかしないねえ」

「まあな。指定された時間まで、後二十分しかない。さっさとライトを探して、はやてんところに行くぞ」

「分かった。手分けして探そう」

「ああ。見つけ次第、はやてのところに行け。見つからなくても、時間がきたらはやてのところに行くぞ。分かったな?」

「了解」

そう言って、二人は分かれた。

*

「ぐーぐー」

ヴァイスと分かれた後、偶数ロビーにでてしまったライトは、そのソファでうたた寝していた。

「ん……ありや？俺、寝てたのか？」

目を覚まして、ソファから起き上がってライトが呟く。

「ふわぁあ。えっと……俺、何してたんだっけ？」

うん、と唸りながら考え込むライト。

「ああ、そっか。はやてん所に行って、部屋の場所聞くんだったけな」

そう言いながら立ち上がり、ロビーから出ていくライト。

「おっ、やっと見つけた」

ロビーを出た途端、声をかけられた。

「ん？隼人か。何か用？」

「はやてが、話あるから部長室まで来いってさ」

「げっ、マジかよ……面倒くせえ。でもどっちにしろはやてに用があるしなあ……はあ。じゃあないか」

「ま、諦めろってこった。俺もローブも諦めてる」

「そら殊勝なことだ。まあいいや。さっさと行こっ」

そう言っつて、ライトは歩きだした。

「俺もあいつ位気楽に考えた方がいいか」

隼人もその後が続いた。

*

「ありゃ？」

部隊長室に着いたが、中には誰もいなかった。

「チビ狸はまだか……」

「へえ。ライトくん、それって誰のこと？」

ビクビクッ!!

突然後ろから、二人が最も聞きたくない声が聞こえた。

「え、えと……いらっしやっただんですか？ 部隊長」

「おや？いつものため口でええよ？ライトくん」

「い、いやあの、き、恐縮と言うつか何と言うか……」

冷や汗を流しながら、あたふたと答えるライト。

「ま、ええわ。ローブくんがまだ来てないけど、先に二人に話とく
で」

そうはやてが言うと、どこに隠れていたのか、ヴォルケンリッター
の面々が現れた。

「え？何？ひよっとして今ここにいる全員から制裁を与えるとかそ
んなオチ？」

「それもいいねんけどな、話は別の事。三人の部屋についてや」

「「な、何だ……」」

途端にホッとするライトと隼人。

「てか、それならちょうど良かったよ。俺も自分の部屋がどこか聞
こつと思つてたから」

「そうかあ。なら、今から部屋番号言つて」

「ああ」

「……、や」

「……あれ？」

部屋番号を聞いて、場所を確認していたライトが、疑問の声をあげる。

「どつした？ライト」

「いや……男子寮にはその番号がないんだけど……」

「はあっ？」

「男子寮“には”、やる？」

「？どついうことだ？」

「……俺の見間違いじゃなかったら、女子寮にその番号がある」

「はあっ！？」

隼人が叫び声をあげた。

「……おいこらはやて。これはどついうことだ？」

ライトがドスの効いた目で、はやてを睨む。

「いやあ、ライトくん達が来るのは完璧予定外の事やったから、男子寮に空きがないんよお。始めは悪いかなあって思てんけど、初日から遅刻してくるような人らに罪悪感持つのもアホらしいし、別にええよな？」

「はあっ！？嫌だよっ！！」

「あっ、因みにライトくんの部屋はなのはちゃんとフェイトちゃんのお向かいやで。嬉しい？」

「嬉しくねえっ！！」

「隼人とローブくんの部屋は、ライトくんの隣の隣の隣やで。間にはスバルとティアナの部屋と、シグナムとヴィータの部屋やから。後、ライトくんの同居人はエリオやから。フェイトちゃんの安心の為、二人とも協力してな」

「ふっざけんなああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

二人揃って叫ぶ。

「てか絶対おかしいだろっ！何だよその部屋配置っ！明らかに凶っただろっ！」

「え？そんなことしとらんよ？なあ？皆」

「ああ。主はそんなことはしない」

「はやては嘘つかねーよ」

「シグナムとヴィータちゃんの言うとおりよ」

「なら何でお前らは俺らと目を合わせようとしななんだよっ！！！！」

「「「……………」」」

「そこで黙るなあっ！！」

「まあ落ち着け」

ザフィーラがライトをなだめようとする。

「うおっ！？犬が喋ったっ！？」

「犬ではない。狼だ」

「いやどつちでもいいけど、この中で一番まともな奴が人じゃないって事実が、俺は悲しいよ」

「てか、マジで俺達は女子寮に住まないといけないのか？」

「マジやで」

「……………最悪だ。今日の昼間の出来事がなかったら、普通に突っぱねるのに」

「はあっ！？お前この話受け入れる気が！？」

「あ、因みにこれ断ったら野宿になるで」

「上等だ。ライオンの巣の中で住むのとどつちがいいかなんて決まってるしな」

「そおか。まあ気いつけてな。朝練してるシグナムやヴィータが、

“ たまたま ” ライトくん当たる可能性もあるから

「……………チビ狸」

「何か言った？」

「イエナニモ」

「で、この話を了承する？」

「それしか選べねえだろうが」

「ん、了承つと。ほな、もう行ってええで。ロープくんには私が伝えるから」

「……………はあ」

「何で二人揃ってそんなにげんなりしてるの？」

部隊長室に来たロープが、二人の様子を見て、そう尋ねる。

「はやての話を聞けばわかる」

「お前もこうなるだろうよ」

そんな捨て台詞とともに、二人は部隊長室を後にした。

*

「……………はあ」

自分の部屋の前で、ため息をつくライト。

(本当に女子寮に住むんだな……………ちよつとでも冗談だと期待した自分が憎い)

「あれ？ライトくん？」

自分の部屋の前で落ち込んでいたら、なのはに話しかけられた。

「ああなのは。ちよつと今は話しかけないでくれ。呪いで人を殺せるかどうか実験中だから」

「な、何だかよくわからないけど、取り敢えず落ち着こう」

その言葉に、ピクツと反応するライト。

「……………落ち着こう？これが落ち着いてられるかあああああああああああ……………」

「えっと、取り敢えずもう夜中だから、静かにしてね」

「あっ、わりい」

途端に黙るライト。それくらいの理性は残っていたらしい。

「くっそお。これも全部チビ狸のせいだっ!」

「もしかして部屋割りのこと?」

「女子寮の自分の部屋の前でうなだれる理由が、他にあるか?」

「に、にやはは……」

「てか、フェイトも過保護すぎるだろ。いくらエリオが心配だからって部屋を近くにするためにこんなことするって……はあ」

「ま、まあまあ。別に不便があるわけじゃないんだし……」

「……お前、向かいに男が住むのによくそんな平然としてられるな?」

「だってライトくん達にそんな度胸ないでしょ?」

「ないのは度胸じゃなくて興味だ」

「それ、女性に言うのは失礼じゃない?」

「事実だから仕方ない」

「……朝、起こしに行ったあげるね?」

笑顔でそう言うライト。

「へ？」

「ギンガにはよく起こしてもらったんでしょ？なら、私も起こしてあげるね」

「い、いやその……」

「じゃあ、また明日」

そう言っただけで目の前の部屋になのはは入った。

「や、やばい……いや、エリオもいるんだし、手荒なマネはしないはず。大丈夫。信じるんだイメージーション。感じるんだインスピレーション……俺の死以外ないような気がしてきた」

明日のことを恐怖しながら、部屋に入る。

部屋の二段ベッドの下で、エリオが寝ている。

「子供なんだから、普通は上で寝るだろうに……何遠慮してんだか」
そう呟きながら、魔法でエリオを起こさないように、上に運ぶ。

「クルセイドがないから、調整難しいな」

エリオを無事起こさずに上に運んだライトが、デバイスがないことをぼやく。

ロープとの模擬戦が激しかったので、念のためにクルセイドとベレ

ンスを、メンテナンスのためにシャーリーに預けているのだ。

「まあ、起こさなかったしいいか」

因みに電気はつけていない。エリオが起きるかもしれないからだ。ライトは子供に甘すぎる人間だった。

「さて、寝るか」

二段ベッドの下のほうで寝るライト。

(スバル・ナカジマ…………ティアナ・ランスター…………エリオ・モンディアル…………キャロ・ル・ルシエ…………)

「ははっ。何なんだよこの面子…………こいつらが六課に集まったのって、本当に偶然か？ゲンヤはこの事を本当に知らなかったのか？」

目を手で覆って呟くライト。

(…………もし偶然なら、六課は本当に俺を前に進めるきっかけになるかもな)

それを最後に、ライトの意識は闇に沈んだ。

第五話 初日の終わり（後書き）

結局負けた。

最悪だ。

ローにはおちよくられまくるわ、チビ狸に職権乱用されるわ、白い悪魔に死刑宣告をつけるわ……

これを最悪と言わず何を最悪と言っっ！？

ああ、ギンガに起こされていた朝が、今から天国に見えてきた。

次回 魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のストライカー～

《第六話 六課で迎える朝》

T A K E
O F F

あゝっ！マジめんどいっ！！

第六話 六課で迎える朝（前書き）

初日にいろんなことがあって、というより、面倒くさいことが山ほどあって、それはそれは疲れてベッドで熟睡してたのに……

あの起こし方はあんまりじゃないっすかねっ！？

もうここを俺の愚痴を聞いてもらうコーナーに変えてくれ。

頼むから。

マジで。

それでは第六話、六課で迎える朝

始まります。

第六話 六課で迎える朝

泣いている子がいた。

その子は大怪我をして、もう歩くことができずにいた。

なのに皆といるときは笑っていた。

その子は強い子だ。

俺はそう思っていた。

なのに、その子は泣いていた。

一人でいる時に泣いていたのだ。

その子は強くなんてなかった。

ただ、優しすぎる子だったんだ。

皆に心配かけないように、いつも笑っていたのだ。

俺は馬鹿だ。

何で気付かなかった……

強がってるって、何で気付かなかった……

気付けたはずなのに……

俺がそいつから目をそらしていたから……

更につらい思いをさせて……

何で俺は……

いつも……

いつも……

その子から逃げたら駄目なのに……

だって俺は、その子の……

*

「……………また、か」

ライトは起き上がりながらそう呟く。時刻はまだ午前3時。

「最近多いな。ま、別にいいけどな」

(罪の意識を、忘れずにすむ)

ライトはそう思うと、また眠りについた。

*

「ぐー」

既に日が昇る時間。熟睡しているライト。

「ん？あれ？」

そんなライトに比べて、エリオは目を覚ました。

「何で僕、上で寝てるんだらう？」

自分が上で寝ていることを、不思議に思う。

「ライトさんが運んでくれたのかな？」

そう思いながら、下で寝ているライトを見る。

「ん〜。もう寝れないよぉ〜」

「へ〜。なら、起こしてあげるよ」

「っ!?!?」

エリオはその声に驚いた。いつの間にかなのはが部屋の中にいたのだ。

「エリオ。ちょっと危ないから、下がってて」

「あっ、は、はい」

そう言って、ベッドから降りて、なのはの後ろに下がる。

「ライトくん。はい、あ〜ん」

そう言って、ライトの口にあるものを入れる。

瞬間。

「ぐぼぁあああっ!?!?!?」

妙な奇声をあげながら、ライトが飛び起きた。

「じほっ、ごほっ………な、何だ今の?」

状況が理解できないライトが、そう呟く。

「あ、起きた？」

「な、なのはか？な、何だ今の人体破壊兵器は？あ、あり得ない味がしたんだけど……」

「シヤマルさんの料理だよ」

「………知ってるか？なのは。料理するのは、人の食べる物を美味しく、食べやすくすることを言っ、食材を味覚抹消兵器にするものじゃないんだよ？」

「知ってるよ」

「今のを料理って言うことは……まさかなのはもこんな……」

「んなわけないでしょっ！」

そう言っ、ライトの顔面に枕を叩きつける。

「俺のマイ枕に何てことをっ！」

「怒るところはそこなんだ……」

「当たり前だ。もうこいつとの付き合いは何年にもなるんだ。もはやこいつは俺の体の一部と言っても過言じゃないっ……」

「……もう起きたみたいだし、すぐにエリオと一緒に、訓練場に来てね」

「ボケを華麗にスルーか。まあいいや。了解」

「分かりました」

ライトとエリオの返事を確認すると、なのはは部屋を出ていった。

(……まさに白い悪魔だな)

そんな感想を抱くライト。

「あつ、あの、ライトさん」

「ん？何？」

「僕を上に移動させたのはライトさんですか？」

「そうだけど、まずかった？」

「い、いえ。そうではなく……」

「遠慮ならすんなよ」

「え？」

「子供のうちから、いつちよ前に遠慮なんかすんなって話だよ。お前みたいな子供の我が儘くらい、六課の皆は軽く聞いてくれるさ。もちろん、俺もな。だから子供のうちから遠慮なんてすんな」

そう言っつて、エリオの頭に手を置く。

「ま、俺のことは兄貴みたいな感じで、頼ってくれていいから。分

「かったか？」

「はいっ！」

エリオは笑顔で頷いた。

「うん、いい返事だ。そんじゃ行くこうか」

そう言って、二人は部屋を出た。

*

「じゃあ、午前の訓練はこれで終わり。皆、午後の訓練に備えて、ちゃんと休むようにね」

「……は、はい……」「……」

（うわ……。死屍累々ってこういうのかな？）

フォワード四人を見て、そう思うライト。

因みに、ローブはフェイトに、隼人ははやての仕事を手伝っている。

(わずか二日にして、入る条件をクリアにするとは……八神はやて、いや、機動六課恐るべし)

「にしても、暇だな」

ずっとフォワード陣の訓練を見ていただけなので、暇で暇で仕方がないようだ。

「なら、ライトくんも訓練する？」

「そしたらこいつらはボロ雑巾のようになるぞ」

ライトがそう言った途端、フォワード四人は首をブンブンと横に振る。

「だってさ」

「ま、今はこれ以上きつくするつもりはないけどね。まだ基礎段階だし」

「」「」「」……「」「」

フォワード四人は、その言葉に震えていた。

「おいおい。びびらせてどうすんだよ」

「だって仕方ないじゃない。事実なんだから」

「それ、止めの一言だと思っぞ」

そう言った後、ライトはどこかに歩きだした。

「どこ行くの？」

「休憩だろ？だからやりたいことやるんだよ」

そう言って、ライトは歩き続けた。

*

「」「」「」
「」「」「」

四つの屍、もといフォワード陣が、ライトの足元に転がっていた。

「おゝい。生きてるか？」

「」「」「」
「な、何とか……」「」「」

「なら放っておいても大丈夫だな」

「」「」「」
「ええっ！？」

「冗談だからハモるな。ほれ、立てるか？」

まずはキャロとエリオに手を差し出して起き上がらせた後、スバルとティアナを起き上がらせる。

「それじゃ、今日はここまで。皆、明日に備えて、ゆっくり休んでね」

「……は、はい……」「」「」

「俺も帰って寝るか」

「あつ、ライトくん。軽くでいいから、私の訓練に付き合ってくれない？」

「ん」。ま、俺も一日見てるだけってのもなんだしな。いいぜ」

その言葉を、ライトは十分後に後悔した。

*

「……………どの辺が軽く？」

ライトのバリアジャケットは、所々汚れていた。

「じゃはは。つい」

そう言うなのはバリアジャケットも、あちこち汚れていた。

始めは軽い誘導弾の撃ち合いや、回避アクションの練習だったが、気付けば模擬戦のような形になっていたのだ。

「やっぱりライトくんは強いね」

「ローほどじゃないけどな」

「ローブくんは……………仕方ないよ、うん」

なのはは、実際に戦ってわかったことがある。それは、ライトが真っ正面から戦っても、自分と互角レベルの実力を持っているのに、幻術などで不意をつく攻撃などを何度も使って勝てないローブが、どれだけすごいかということだ。見ているだけでは分からないことだ。

「てか、お前大丈夫か？」

「何が？」

「朝から晩までフォワードの訓練に付き合っ、その後模擬戦まがいのことして……………体は平気か？」

「にやはは。平気平気。私って頑丈だから」

「ああ、成る程」

「……………そこは納得するところかな？」

「冗談だよ。お前も“一応”女なんだ。あんま無茶はすんなよ。周りが心配する」

「言い方がとても気になるけど、まあ、“一応”ありがとう」

「……………それは皮肉と受け取っていいんだな？」

「さあ？じゃあ私はやることあるからこれで。また明日ね、ライトくん」

「出来れば朝には会いたくねえな」

なのはが降りていくのを見て、そう呟くライト。

「じゃあオレらも帰るか」

『はい、マスター』

*

「ぐー」

「ライトさん。早く起きないとまた悶絶することになりますよ」

朝、エリオは必死にライトの体を揺すって起こそうとしていた。

「ん〜。後五年〜」

「いやそんなこと言ってたらまた……」

「エリオ、下がってて」

エリオの後ろから声が聞こえる。

「な、なのはさん……」

「早く。危ないから」

なのはの後ろには、フェイトとローブがいた。

「フェイトさんとローブさんもっ!?!?」

「エリオ、早く」

「あっ、え、えっと、はい……」

「よし。なのは、ライトの口にそれを」

エリオが下がったのを見て、ローブがなのはにそう言う。

「了解。ライトくん、あくん」

ライトの口に、“何か”が入った。

「ぐぐらあああっ!!」

また飛び起きるライト。

「げほっ！げほっ！またか！？またなのかつ!？」

二度目ということもあって、何があったかすぐに理解するライト。

「どう？シヤマルさんの料理、美味しかった？」

「だ・か・らっ！あれは料理じゃなくて内臓破壊兵器だっつってんだろっ!!」

「起き抜けとは思えないほどの突っ込みっぷり。さすがだね、ライト」

「……………え？ロー？」

冷や汗を流しだすライト。

「ま、まさかと思うけど、今のお前の料理か？」

「え？違っけど？」

「そ、そっか……」

ホッとため息をつくライト。

《ライトくん、ローブくんの料理ってそんなにひどいの？》

ライトの態度が気になったのか、なのはが念話でライトに聞く。

《ひどいか？だって？……んなレベルじゃねえよ、あれは。あれは……そう、核だっ！核兵器と言っても過言じゃねえっ！！あっ、駄目だ。思い出したら震えが……》

ガクガクと震えだすライト。

《……何かごめん》

《いや、別に……》

「」「」？「」「」

いきなり震えだしたライトを、ローブ達は不思議そうに見ていた。

「……それより、何で今日はこんな大人数なんだ？」

ライトが、ローブとフェイトを見ながら呟く。

「いやあ。なのはから昨日のことを聞いてね。面白そうだったから」

「私はなのはに着いて来ただけ、かな」

「……念のために言っとくけど、別にエリオに変なこととしてねえぞ」
ギクッ

「やっぱりかよっ!..?」

あからさまな反応をするフェイトに、思わず突っ込むライト。

「はあ……朝から本当に面倒くせえ」

そう呟きながら起きるライト。

「ありゃ、もう起きるの?」

ロープがつまらなそうに言う。

「もしここで布団に潜りこんだら、何してた?」

「そりゃもちろんジャーマンスー……」

「その先はいい」

ライトがロープの口を塞ぐ。

「はあ。もうさっさと行こつぜ。何だか自分の部屋に集まらねると、俺の逃げ道が無くなったよつな気がしてくるから」

「えっ?そんなものあると思ってるの?」

「……………実家に帰らせてください」

「そしたらギンガのリボルバーナックルが君を待ってるよ」

「……………もうやだ。こんな環境」

そう呟いた後、ライトは部屋を出た。ローブ達も、その後についていった。

*

「あゝ。やっぱり朝って何も口にいらたくね」

机に顔を突っ伏しながら、そう呟くライト。

場所は食堂。その後フォワード陣の早朝訓練が終わって、今は皆で朝食を食べているのだ。

「駄目だよライトくん。朝はちゃんと食べないと」

隣に座っているのはが、ライトに注意する。

「いや俺もそうしたいのは山々なんだが、どっかの誰かさんが毎朝俺に毒物を食べさせるせいで、胃がちょっとヤバイことになってる。胃が何も受け付けないんだ」

「へえ。そんなことする人がいるんだ。ライトくんも大変だね」

「……………白い悪魔」

「何か言ったかな？」

なのはが笑顔で聞いてくる。

「いや、そのお……………なのははいつもしっかりしていて、見習わないとなあと……………」

「そう？なら私の書類仕事全部やる？」

「丁重にお断りさせていただきます……………それより、やっぱり俺も何か食おうかな」

「そうしなよ。後でお腹が空いても、お昼まで何も食べられないんだから」

「まあ、俺は見てるだけだけだな」

そう言って席を立って、フードコートまで行く。

「ん〜、何にしようかな……………」

(やっぱり朝だからなるべく軽いものに……)

その時、ライトは奇妙な名前の料理が目に入った。

『地獄の黙示録へのカレー』

「……………」

(オーケーオーケー。焦るな俺。冷静になるんだ。判断を間違えるな。興味本位で行動すると痛い目にあうって分かってるだろう？ここは定石に従うんだ。おいしい役はヴァイスにでも譲って、俺は普通のメニューを選ぶ。そう、俺はっ!!！)

「地獄の黙示録へのカレー、お願いします」

興味本位に勝てなかったライトであった。

*

「……………何それ？」

戻ってきたライトに、開口一番そう聞くなのは。ライトの持っ

るお盆には、赤い湯気が出た、真っ赤なカレーがあった。

「……………今では後悔してます」

「何で犯罪者が記者会見で言うセリフを言ってるのかわからないけど……………それ、食べられるの？」

「……………ためしにスバルとローに食べさせようかな」

「無理だと思うよ。二人ともそれ見て若干ひいてるし」

「てか、食堂にいる奴ら全員、こっちを見てないか？」

「絶対原因はこれだろうけどね」

ライトはお盆を机に置き、席に座った。

そして、スプーンをルーの中に入れる。

ジュワアアアッ

「……………気のせいかな？鉄が溶けるような音がしたのは」

『……………』

ライトの疑問に、答えられるものはいなかった。

(……………覚悟決めろっ！)

そう思い、スプーンを持ち上げる。

「……………」

若干溶けているスプーン。

(すみません。さっきの覚悟、なしにしてもらえませんか?)

だが、そんなライトの願いは、自分に集まっている視線が許してくれなかった。

「……………死にはしないだろ」

そう呟いて、それを食べた。

(……………あれ?そんなに辛く……………んっ!?)

始めのうちは表情に変化がなかったライトの顔から、汗が大量に流れでてくる。

「……………ライトくん?」

「……………」

なのはが恐る恐るライトに声をかけるが、返事がない。只の屍のようだ。

「……………」

ボタン

ライトはいきなり机に突っ伏し、それ以降ピクリとも動かなかつた。それを見た隊員達は、後にこれを『地獄へ誘うカレー』と呼ぶようになった。

*

「し、死ぬかと思った……………」

廊下を歩きながら、そう呟くライト。

『またそれですか？』

クルセイドが呆れたように言う。

「あ、あれはもう兵器とかそんなんじゃねえ。死神だ。人を地獄へ誘う死神の使者に違いないっ!!」

『はあ。まあ、頑丈さが取り柄のマスターが、夜になるまで目を覚まさなかつたことから、どれだけ危険かは分かりますけどね』

そう。時刻は既に夜。ライトは約15時間もの間気絶していたのだ。

「やべえ、全然眠くねえ。どうしよう……」

『なら、またあのカレーを食べては？』

「流石にその勇気は俺にはないよ」

そう言った後、少し考えるような仕草をする。

「……………ゲームでもやるか」

『あれですか？随分久しぶりですね』

「まあ、最近やる機会なかったからなあ」

『そうですね。では、訓練場前でやりますか？』

「ああ。それと、一応聞いておくけど、ローの奴がいらん設定とか追加させてないよな？」

『はい。その心配は多分ありません』

「多分っ！？今多分つつたかつ！？」

『まあ、大丈夫だと思います』

「……………果てしなく不安になってきた」

そう呟いた後、ライトは訓練場に向けて歩きだした。

*

「ふう。今日も大変だったなあ」

廊下を歩きながら、フェイトが呟く。今日の分の仕事がやっと終わり、自室に向かっているのだ。

そんなフェイトの行く先に、ピンクの髪をポニーテールで括った背の高い女性がいた。

「あ、シグナム。こんばんは」

フェイトはその女性、シグナムに挨拶をした。

「ん？ああ、テストロッサか。やっと仕事が片付いたのか？」

「はい。明日はお昼からですから、今からゆっくり休むつもりです。シグナムは？」

「私も似たようなものだ。今から自室に戻って休むつもりだ」

「なら、途中まで一緒に行きましょっか」

「そうだな」

シグナムの言葉を聞いて、フェイトは嬉しそうに笑って、歩きだした。シグナムもそれに続く。

「そういえば、ストライカーの奴らはどうだ？」

シグナムが隣を歩くフェイトに聞く。

「ちゃんとやってますよ。隼人ははやてのバックアップや書類整理を手伝ったり、ローブも私の仕事をよく手伝ってくれます。優秀すぎて困るくらいですよ」

そう言って、フェイトは笑った。

「ふっ、そうか」

フェイトの言葉を聞き、笑ってシグナムが言った。

「そういえば、もう一人はどうなんだ？」

シグナムが、思い出したようにフェイトに聞く。

「あ、ライトは……まだ何もしてないですね」

苦笑しながらフェイトが言う。

「なのはの手伝いは？」

「まだ、フォワードの皆は基礎段階ですから、ライトが加わるのは、

少なくともその後だって、なのはが言っていました」

「ふむ、成る程な。まあ、ちゃんとしているなら、それでいい」

「ふふ。そうですね」

二人は、互いに笑いあう。

そんな二人の前に、大あくびをしながら、玄関のほうに向かって歩く男が一人いた。

「あれ？ライト」

フェイトがライトの名前を呼ぶ。

「ん？フェイト？」

男、ライトが振り返って、フェイトの名前を呼ぶ。

「えっと、そっちは？」

ライトがシグナムのほうを見て言う。

「初めましてではないんだがな」

シグナムが少し目を細めて言う。

「どっかで会ったっけ？」

ライトは思い出そうとしているが、中々思い出せない。

「お前が武装隊にいた時、ヴァイスの紹介で、一度だけ会ったことがあるんだが……」

「武装隊？……あぁっ、思い出したっ！！」

ライトが手をポンツ、とぅって声をあげる。

「やっと思い出したか」

「出来れば思い出したくなかったけどな」

ライトはシグナムから、一歩ひいてそう言う。

「二人は知り合いなの？」

フェイトが二人に尋ねる。

「一回しか会ってないから、正直微妙だな」

ライトが顔を若干引きつらせながら答える。

「ふむ。では、思い出した所で、あの時の続きを……」

「誰がやるかっ！」

「あの時？」

シグナムの言葉に、フェイトが首を傾げる。

「こいつにヴァイスが、俺が強いとか何とか吹き込みやがって、挨拶すんだ途端いきなりデバイス構えて『模擬戦をしろ』とか言ってきたんだよ。もちろん逃げたがな。逃げまくったがな。最終的に逃げ切って、『次に会った時には、レヴァンティンの鎧にしてくれるっ！』って捨て台詞とともに去っていったよ。まっ、その後俺、すぐに別の部隊に移転が決まったから、それ以来顔を会わすことはなかったけど」

ライトが、過去に会ったシグナムとの追いかけてこを思い出しながら話す。

「た、大変そうだね……」

フェイトは苦笑するしかなかった。

「さあ、ライト・エリシオン。さっさとセットアップしろ」

シグナムが、目を爛々と輝かせながら言う。

「いやセットアップしろって、ここ隊舎内だからな。分かってる？」

ライトはそう言いながら、逃げる体勢をとる。

「今度は逃がさん」

シグナムがライトの肩をつかむ。

「ちよっ、まっ、フェイト！ヘルプミーッ！！」

ライトがシグナムに引きずられながら、フェイトに助けを求める。

*

「そういえば、ライトは何で外に行こうとしてたの？」

諦めたように、シグナムの隣を歩いているライトに、フェイトが思
い出したように聞く。

「いや何。ちょっとゲームでもやろうと思ってな」

「ゲーム？」

ライトの言葉に、二人が首を傾げる。それはそうだろう。普通、ゲ
ームは室内などでするもので、わざわざ外に出てするものではない。

「まあ、ゲームという名の訓練なんだけど」

「「？」」

また首を傾げる二人。

「なんなら、実際に見てみるか？」

ライトが立ち止まってそう言う。

「ライトの訓練か……」

「興味深いな。やってみてくれ」

二人の言葉を聞いて、ライトは頷いた後、二人から数歩距離をとっ
て、クルセイドを取り出した。

「クルセイド。アボイドゲーム、セット」

『イエス。アボイドゲームセット』

瞬間、ライトの周りに、青い光弾が現れた。その数は、計二十。

その光景に、二人は少し驚いていたが、これがライトの訓練だとすぐに理解し、冷静にそれを観察することにした。

『Three、Two、Once』

クルセイドが、カウントダウンする。

『Zero』

瞬間、光弾の一つが、ライトに向かって放たれる。何の前触れもなしに、近距離から放たれたのだ。

しかし、ライトはそれを、少し体をひねってよけた。

フェイトとシグナムの二人は、そのことに驚愕する。それなりに距離があるのなら、避けることは簡単だが、あの至近距離から放たれた光弾を、あっさりと避けたライトに、二人は驚きを隠せない。

しかし、この後の光景に、二人は更に驚いた。

ライトの周りの光弾が、また迫る。それもライトは頭を下に下げて避ける。さらに後ろから迫った光弾を、体をブーメランのような形に体をひねって避ける。そしてまた光弾が迫ると思ったら、今度は

中々攻めてこず、かと思つたら、真正面と後ろから、同時に放たれる。それを、体をS字にして避ける。

『レベル1、クリア。プログラムを終了させます』

そんな動作を、一分間続けた所で、クルセイドから終了の合図がでた。

「ふう。やっぱり結構キツいな」

全然辛そうな顔をせず、けろつとした顔で、ライトが呟く。

「す、すごいね……」

「ああ。並外れた動体視力と反射神経、それに経験によって積み重ねられた観察眼がなければ、あんな動きはできない」

フェイトの呟きに、シグナムが冷静に分析したことを教える。

その二人に、ライトが近づく。

「おい。今のは何だ？」

シグナムが率直に聞く。

「ん？アボイドゲームのこと？」

「ああ」

「あれは、ローの奴が考えた、フィジカルトレーニングの一つだよ。

デバイスが、自分のマスターの魔力を吸い取って、計二十発の魔力弾を、周りに設置して、不規則かつランダムに、一分間襲ってくるというシステム。しかも、放たれた魔力弾は、すぐに補充されるから球切れはない。まあ、ゲームってのは、ただの名前だ」

ライトの説明を受けて、納得し、驚く二人。

「ね、ねえ。さっき最後に、レベル1クリアって言ってたけど、それより凄いのがあるの？」

フエイトが、疑問に思ったことを聞く。

「ああ。さっきのは一番レベルの低いやつね。最高レベルは15」

「さ、さっきので一番低いの？」

「ああ。因みに、10越えた辺りから、俺も球に当たるくらいになるから。15までクリアできたのは、ローだけだ」

「……………ライト。そのゲーム、私にもやらしてくれないか？」

説明を聞き終わったシグナムが、ライトに聞く。

「別にいいけど……………当たると痛いぜ？」

訓練とはいえ、生成されるのは魔力弾。当たれば当然痛く、ケガをする事もある。ロー曰く、『その方が、必死に避けるから』とのことだ。

「構わない」

だが、ライトの心配を、シグナムは一蹴した。

「……………はあ。危ないって判断したら、すぐに止めるからな」
ため息をついた後、そう言って、クルセイドを渡す。

「因みに、三発当たらなかったらクリアだ。三発当たっても、一分間続くから、気を抜くなよ」

「分かった。では、始めてくれ」

『イエス。アボイドゲームセット』

そして、シグナムの訓練が始まった。

*

「シ、シグナム？大丈夫ですか？」

「生きてるかあ？」

いくつも魔力弾をくらったシグナムが、地面に突っ伏している。

その後、シグナムはクリアできるまで、何度もやったのだ。結果、ボロボロになりながらも、レベル1クリアに成功した。

「も、問題ない……」

立ち上がりながら、そう言うシグナム。

「今日はもう休んどけ。訓練用の魔力弾だから、明日までには、完治してるだろ」

「ああ。そうさせてもらおう」

そう言って、シグナムは歩き去った。

「ライトはこれからどうするの？」

シグナムが隊舎の中に入ってから、フェイトがライトに聞く。

「ん〜。ま、ゲームの続きだな。今日こそレベル13をクリアしてみせるっ……」

「じゃあ、私も見ていい？」

「いいぜ。さあて、まずはレベル2からだ。クルセイド」

『イエス。レベル2セット』

ライトの周りに、二十発の魔力弾が現れる。

「?さっきと同じ?」

フェイトは、てっきり数が増えるものだと思っていたのだ。

「ま、見てろって」

『Zero』

クルセイドが、スタートの合図を出す。

瞬間、同時に三つの魔力弾が、ライトに向かう。

「えっ!?!」

フェイトが驚く。レベル1では、同時に放たれるのは、2発までだったのだ。それがいきなり3発。

しかし、ライトはそれをあっさり避ける。避けて体勢が少し崩れたライトの後ろから、魔力弾が迫る。ライトは体勢を整え、それを右足を軸に回転して避ける。次に上、右、後ろから3発向かってくる。それをライトは、斜め右後ろに一步下がって避ける。すかさず前から魔力弾が迫って来た。しゃがんでそれを避け、素早く立ち上がり、ジャンプする。ライトの下を、左右から来た二つの魔力弾が通りすぎた。

『レベル2クリア』

クルセイドからの終了の合図。

「ふう」

軽く息をつくライト。その顔は涼しいものだった。

「……凄いね、ライト」

フェイトが、感心したように呟く。

「俺なんてまだまだだよ。レベル15なんて、球数六十だぞ？ローがクリアしたときは、ローって本当に人間か？って思ったよ」

「あはは……でもやっぱり凄いよ。シグナムでもやっとの思いでレベル1をクリアできたくらいなのに」

「あー。そりゃ馴れだよ、馴れ」

「馴れ？」

「そう、馴れ。このゲームが、回避アクションを素早く効率的に行うための訓練するのはわかるよな？」

「うん」

「このゲームを俺は何年もやってるから、その能力がかなり上がってるんだ。だから、あんな動きもできるようになったってわけ」

「へえ。このゲームって、ローブが作ったんだよね？」

「ああ。あいつのうりはスピードだからな。速すぎる動きは、勘やセンスに頼って動くのは危ない。だから、そのスピードを最大限に

活かすための訓練システムを、あいつはいくつも作ってるんだ」

「……………ローブのスピードは凄いつてなのはが言ってたけど、そういう訓練をして、培った能力なんだね」

「そゆこと。俺や隼人用のシステムも、あいつは作ってくれてる。だから俺達も更に強くなることができた。あいつの機械オタクっぷりも、こういう時には感謝できるってもんだ」

「ふふっ」

「？」

いきなりフェイトが笑ったので、ライトは首を傾げる。

「どした？いきなり笑って」

「ふふっ。仲、いいんだなって思って」

「へ？」

「気付いてないの？ライト、凄い嬉しそうに話してたよ。まるで自慢の弟を話すお兄さんみたいに」

「っ！？」

ライトはフェイトの言葉を聞いた瞬間、顔を反らした。何となく恥ずかしくなって、赤くなった顔を見られないためだ。

「おっ、俺はもう部屋に戻るわ。じ、じゃあおやすみっ！フェイト

ッー!!」

そう言っつて、ダッシュで走り去るライト。かと思っつたら、戻つて来た。

そして、フェイトの両肩を掴む。

「ラ、ライト?」

「フェイト……くれぐれも、く・れ・ぐ・れ・も、この事は誰にも話すな。いいな?」

「……明日の朝ご飯、奢つてくれたらいいよ」

「ゴフッ」

急所に当たつた。ライトの財布に500のダメージ。

「そ、それだけは……」

「え? 昼食も追加?」

「……朝ご飯を、奢らせてもらいます」

「うん。じゃあ、戻ろっか」

「……また、寂しくなるなあ」

ライトは財布を見て、そう呟いた後、フェイトの後についていった。

*

お互いの部屋の前で立ち止まるフェイトとライト。

「じゃあおやすみなあ、フェイト」

「あつ、ちょっと待って」

自分の部屋に入ろうとしたライトを、フェイトが呼び止める。

「ん？何？」

後ろに振り向いて、フェイトに聞く。

「あの……エリオのこと、お願い出来ないかな？」

「は？」

いきなりそんなことを言われて、ポカンと口を開けるライト。

「どゆーじやー？」

ライトが訳が分からなかった。同室という理由で、自分にお願いののはおかしい。そういう心配をなくすために、わざわざ部屋を向かいにしたのでそれはない。普段訓練などで一緒のときが多いから、これもおかしい。それならば、自分でなくなのはに頼めばいい話だ。では何故自分？

ここまでの思考に至るまでの時間は、わずかコンマ二秒。

ライトはますます分からなくなり、フェイトの顔をじっと見る。

「エリオと、仲良くして欲しいの」

「何で俺？」

「エリオは男の子だから、私やなのはに話しにくい悩みとかもあるかもしれないし、深い話や相談もやりやすいかなって」

「……成る程な。でも、俺でいいのか？エリオだって、俺なんかを頼りするのを、不満に思ったりしないのか？」

「ふふつ。大丈夫だよ。エリオ、ライトのこと、お兄さんみたいだつて言ってたから。エリオ、ずっとお兄さんが欲しいって思ってたみたいだしね」

「……もしかして、頼んだ一番の理由ってそれ？」

「ふふつ。さて、どうでしょう？」

そう笑って、フェイトは自分の部屋に入ろうとする。

「あつ、フェイト。明日はなのは達に、朝来ないように言っというて」「??どうして?」

フェイトが首を傾げる。

「自分で絶対に起きれるから」

「?」

「お前朝の騒ぎ知らないのか?俺がカレー食って気絶したの」

「……………あつ、そうだ。思い出した。あの後、どうなったの?私仕事ですぐにでたから」

「さっきまで気絶してた。つまり、俺はすでに十五時間も寝てるってことだ。そんな奴が、寝坊なんてすると思うか?」

「でも逆に聞くけど、寝ることはできるの?」

「……………ふっ。マイ枕さえあれば、容易いことだ。1年365日24時間いけるぜ」

「それ、死んでるよね?絶対死んでるよね?」

「細かいことは気にしたら負けだ。じゃあ、ちゃんと伝えとけよ」

そう言っつて、自分の部屋に入るライト。

「はあ。まあ、明日は起こす必要はないかな」

そう呟いて、フェイトも自分の部屋に入っていった。

*

翌朝。

「ぐー、がー」

はい、もの見事に熟睡してますね。誰が？ライトに決まってる。

「ライトさーん。起きてください」

そして、昨日に続いてライトを起こそうとしているエリオ。

「んー？エリオかー？」

「はい、そうです。早くしないと、またなのはさんに起こされますよ」

「それだけは嫌だっ！」

そう叫んで、飛び起きるライト。

「……………って、今日はなのは来ないんだっただ」

「?どうしてですか?」

「まあ、ちょっといろいろあるんだよ。それよりエリオ。お前に聞きたいことがあるんだけど、いいか?」

ライトが、真剣な顔でエリオに聞く。エリオは、そんなライトに驚きながら頷いた。

「じゃあ聞くぞ。お前は……………」

そこで、ライトが言いにくそうに言葉を止める。

数秒経った後、決心したように口を開いた。

「プロジェクトFで、生まれた人間か?」

「……………え?」

エリオが、信じられない顔をした後、顔を青くした。

「ど、どうしてそれを……………」

エリオが、震える声でライトに聞く。

「何年も前に、違法研究がらみの事件を担当した事があるんだ。その研究の中には、プロジェクトFもあってな……………研究素体となった人間の名前は、全員覚えただ。エリオ・モンディアルの名前は、

その時に覚えた名前の一つにあった」

「……………だから初めて会ったとき、あんな顔をしたんですか？」

エリオの目が、鋭くなる。

「ああ。名前を聞いた時は、びっくりしたよ。プロジェクトFには、苦い思い出もあるしな」

そう言って、目を伏せるライト。

「……………どうして、今まで聞かなかったんですか？」

「……………聞いて欲しくないと思ったから」

「え？」

エリオが目を見開く。

「その事は、お前……………いや。プロジェクトFで生み出された全ての人にとって、トラウマでしかないだろうからな。聞かなくて困ることもないしな。だから、今まで聞かなかった」

「……………なら、どうして今になって聞いてきたんですか？」

エリオは、また目を鋭くする。

「……………昨日さ、フェイトに聞いたから、かな」

「……………何を聞いたんですか？」

「…………お前が、俺を兄貴みたいに思ってくれてるって」

「…………え？」

また、エリオは目を見開いた。ライトは頭を掻きながら話した。

「やっぱりさ。そういう風に思ってくれてる奴に、隠し事はしたくないだろ？だから聞いた。俺の身勝手な気持ちから聞いたんだ。失望したって構わないよ」

そう言っつて、ライトはエリオの顔を見た。その顔はまだ暗い。

「…………ライトさんは、僕達は偽物だと思いますか？」

「…………は？」

エリオのいきなりの言葉に、訳が分からず疑問の声を上げる。

「プロジェクトFで生み出された僕達は、ただの劣化コピーで、偽りの存在だと、思いますか？」

エリオは、怯えたような顔をしている。

「…………はあ」

そんなエリオを見て、ライトは盛大にため息をついた後、エリオの頭に手をおいて、口を開いた。

「お前はお前だ。誰の代わりでもねえ。誰もお前にはなれねえ。今まで生きてきたお前は本物だ。フェイトやなのは、フォワードの皆

と一緒に笑ってるのはお前だ。今、ここで俺に頭を撫でられているのはお前だ。お前らは、劣化コピーでも、偽りでもねえ。ただの一人の、人間だ」

そう言つて、ライトはエリオに笑いかけた。

「だからエリオ、二度とそんな下らないことは聞くな。不安に思うな。お前が大切に思つてくれてる人間は、そんな事望んじやいねえ。お前は、楽しい時に笑つて、悲しい時に泣いて、大切な人達と一緒に、未来に向かって進む。そんな人間に、なつて欲しいつて、思つてるはずだから」

そう言つて、ライトは少しだけ寂しそうな顔をした。

「だから笑つて、今日も皆と一緒に、悪女なのはにこてんぱんにされてこい」

そう言つて、また笑う。

「……それじゃ僕達、何だか変な人達じゃないですか？」

エリオは苦笑しながら言う。その顔に、さっきのような暗い部分は、一切なかった。

「そうか？」

ライトは、エリオがもとに戻ったことに安心しながら、ちやかすように聞く。

「そうですよ。こてんぱんにされて笑つてたら、変じゃないですか」

「あつ、そりゃそうだな」

エリオの言葉に、納得したように手をポンとつつライト。

「あ、あの……ライトさん。一つ、お願いしてもよろしいでしょうか？」

エリオが、緊張した面持ちで聞く。

「前に言っただろ？わがままくらい、いくらでも言えって。お兄さんにドンと言ってみなさい」

そう言っつて、胸を張るライト。

「じ、じゃあ言いますね」

「ふん」

「は、はい……」

エリオは一度深呼吸した後、言った。

「兄さんって、呼んでもいいでしょうか？」

「……………」

エリオの言葉を聞いた瞬間、ライトは固まってしまった。

「えっ、えっと。ごめん。もう一回だけ、言ってくれない？よく聞き取れなくてさ」

ライトがしどろもどろになりながら、エリオに聞く。

「は、はい……………兄さんと、呼んでもいいでしょうか？」

「……………」

「……………」

またしても固まるライト。今度は石化していた。

「ま、前に、“俺のことは兄貴みたいに思ってくれ”とおっしゃっていたので、その……………だ、駄目でしょうか？」

エリオが、少し寂しそうに顔を伏せる。

(……………はぁ。後でフェイトに何て言われるか。ローと隼人には確実にからかわれるな)

そう思って、エリオにはれないように小さくため息をついた後、ライトは口を開いた。

「いいよ、別に。好きなように呼べばいいさ」

その言葉を聞いたエリオの顔は、どんどん明るくなっていく。

「はいっ！ありがとうございますっ！」

満面の笑みでそう言うエリオ。

(……………まっ、この顔が見ただけでも、よしとしますか)

エリオの顔を見て、そう思うライト。

「……………ん？」

ライトが何かに気付いたように声をあげる。

(……………あいつら)

そう思って、ベッドから立ち上がるライト。

「？兄さん？」

エリオが不思議そうな顔をして、ライトに声をかける。

「いやなに。ちょっっつと気になることがあってな」

そう言っつて、ドアの前まで歩き、その扉を開けた。

『どわあああああああああああつ！？』

すると雪崩こむように、なのはにフェイト、はやて、ローブ、隼人、ロキ、シグナム、ヴィータ、シャマル、リイン、それにフォワード陣が倒れこんで部屋に入ってきた。

ライトは、それを数歩下がって避けた。

エリオはその光景を見て、驚いていた。

「さて、君たち。弁明はあるかね？」

なのは達の目の前で、ライトが悪魔のような笑みを浮かべてそう言う。

「え、えっと……」

「ラ、ライトくん。落ち着いて……」

「ラ、ライ兄。悪気はなかったんだよ……」

「そ、そうだぞライト。スバルの言う通り、悪気はなかったんだ」

「朝食奢るから許して〜」

それぞれが、弁明の声をあげる。

「……………フェイト？最後にお前の弁明を聞こうか？」

満面の笑みでそう言うライト。

「え、えっと……………てへっ？」

ブチッ

「じゃかあしいっ！！てめえら絶対に許さねえっ！！」

「や、やばいっ！皆逃げるでっ！……」

『はいっ（おっっ）！！』

そう言っつて、散会する面々。

「待ちやがれえっ！！」

それを両手をあげて追いかけるライト。

エリオはそんな光景を見て、笑っていた。

六課の朝は、今日も騒がしく始まったのであった。

第六話 六課で迎える朝（後書き）

だあああああああああああつ！！

また俺に恥ずかしい秘密が増えたあああああああああつ！！
あつ！！

最悪だ……

本当に最悪だ……

低血圧なのに朝から暴れさせられるし……

え？次はこの話の二週間後？

やったあつ！

しばらくサボれるっ！

新人共よ、せいぜいなのはにしがかれるがいつ！

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers ～三人のストラ
イカー～

第七話 ファーストアラート

新人達の活躍と俺の墮落に、Take Off！！

主人公設定（前書き）

作者「今回は主人公の設定を作ってみました」

ライト「何で今更？」

作者「だって、よく考えたら、お前らの容姿とか全く描写されてないじゃん？」

ライト「いやそれお前のせいだろっ！！」

作者「気にすんなって」

ライト「本人が言うんじゃねえっ！！」

隼人「ライト、やめろ。何だかお前が不憫に思えてくる」

作者「全くだ。不憫な奴め」

ライト「……………こいつ、炭にしているか？」

隼人「どうぞ」

作者「いや見捨てないでっ！お願いだからっ！三百円あげるからっ！」

ライト「銀のネタパクるんじゃねエエエエエエエエエエエエエエエエエエっ！！」

隼人「面倒くさくなったので、取り敢えずどうぞ」

主人公設定

ライト・エリシオン

身長 175cm

体重 60kg

目の色 蒼色

髪の色 蒼色

髪型 いちい

ちセツトしないので、あちこち跳ねているセミロング。

中性的な顔立ちだけど、顔は整っているので結構モデルが、本人に自覚なし。何度か男に告白された際に、相手をぼこぼこにした経験あり。以来、自分の顔にコンプレックスをもつ用になる。

デバイス愛称 クルセイド

正式名称 クルセイドハーツ

形は、レイジングハートと同じ。色は、レイジングハートの赤い玉の部分が藍色で、黄色の部分は同じで、持つ部分も同じ。

ポジションはなのと同じCG^{センターガード}だけど、ギンガとスバルにシューティングアーツを教えているように、接近戦もかなりいける。

魔力の色は蒼色。

魔導師ランクは、空戦SS。

よく仕事をさぼっては、妹分のギンガに、デバイス片手に追いかけまわされている。

たまに隼人とローの二人と一緒に集まっては、二人に弄ばれている。いつもやる気がなく、一日中寝ていたいと思っているが、妹分のスバルとギンガには甘い所がある。

よく隼人とローに過保護と言われているが、二人も過保護なので、よく誰が一番過保護なのかについて考えることがある。

経歴のほとんどが不明なのは、いずれ話される設定。

頭が非常によく、大魔力にも関わらず、高速・並列処理も得意。

魔力コントロールも桁外れにうまく、よく自分の持っている魔法をいじっては、108部隊の誰かで実験する。

何でも完璧に見えるが、接近戦はローの方が強く、最大射程距離も、隼人には遠く及ばないので、中間的なCGセンターガードに収まったという感じ。

金は貯金がすごく、その辺の富豪よりは、軽く持っているようだ。正確な額は不明。

階級は一等空戦。

役職は戦技教官（ただし、教えたことのある人物はほんの一握り）。

ローブ・ランゼル

身長 172cm

体重 54kg

目の色 翠色

髪の色 金髪

髪型 髪の両側が跳ねていて、長さ普通。

猫目で、ライトと同じく中性的な顔立ち。結構モデルが、そういうにはあまり興味がないので、告白されてもすぐに断る。ライトと同じく男に告白されたことがあり、その後一週間寝込んだとか。ライトと同じく顔にコンプレックスがある。

デバイス名称 ベレンス

正式名称 ベーレンアウスレーゼ

峰が黒で刀身は黄色の刀。バルディッシュに似ている。

射撃型の魔法が一切使えない、完璧な接近戦型。ポジションはF.A。フロントアタッカー。姿をとらえることすら難しいほど速い速度で相手を攪乱し、一撃のもとに鎮める戦法を得意とする。剣術の腕もすごく、初めはライトが教えていたが、今ではまるで適わないらしい。

魔力の色は黄色。

魔導師ランクは、空戦S+。

デバイス開発や機械をいじくるのが趣味なほどの機械オタク。

仕事以外の時は、整備室にいるが、執務官という仕事の都合上、中々機械をいじられないのが、悩みの種という程。

次々に事件を解決し、どんな困難な状況でも諦めないことから、“スピードストライカー神速の解決者”と呼ばれている。

たまにスバルにシューティングアーツを教えていたが、自分は剣技が主体だからという理由で、あまり教えることはなかった。

仲間や友達には、人一倍優しいが、犯罪者などには残虐（殺すことはない）。

ライトと隼人のデバイスのメンテナンスは、ローが行っているが、その技術を教えたのは、ライトらしい。

役職は執務官。

階級は三等空佐。

九弦院隼人

身長 185cm

体重 63kg

目の色 紅色

髪の色 黒色

髪型 腰まで伸びた髪を、
後ろで一つにまとめたストレートヘア。

つり目で、整った顔立ちをしていて、三人の中で一番モデル。黙っているとき、結構怖いのが、気さくな性格なので、怖がられることはほとんどない。

デバイス名称 フライドと全の書とロキ

正式名称 フライングブリード。(全の書とロキはそのまま)

フライングブリードは杖。全の書は魔導書。はやてと同じく、超長距離射撃魔法と、広域殲滅魔法が得意。だが接近戦と中距離戦もでき、格闘技と射撃を合わせた銃術は、ローや隼人ほどではないが強い。ポジションはライトと同じくCG。センターガード魔導師ランクは総合SS

+

魔力の色は白銀。ロキとユニゾンしている時は水色になる。二つ名は“ロードストライカー天空の采配者”。

ミッドの空を守る法の使者としてこの名をつけられた。

捜査官としての働きは非常に優秀で、あちこちから捜査司令としての話が持ち上がっているが、本人は昇進に興味がなく、そのつもりはないらしい。

スリーストライカーズの常識人。ローが言うには、ライトと揃って不器用らしい。

ゲンヤのことを慕っており、スバルとギンガを本当の妹のように思っている（このことはローとライトにも言えることだが）。

階級は一等陸佐。

役職は捜査官。

ライトのバリアジャケットは、騎士をイメージした白いマントに青と黒の手袋、赤い制服みたいな服に黒いベルトに黒いズボン、茶色のブーツになっています。

クルセイドはレイジングハートの赤い部分が藍色になっている以外はほとんど一緒です。

ローブのバリアジャケットは、フェイトに少し似ている白いマントに、黒い制服みたいな服に黒いズボン、茶色のブーツです。

ベレンスは、基本形態は黄色い刀です。2ndモードは刀身が、槍のように鋭く細長い剣です。3rdモードは、リボルバーのついた、二つの剣になります。

基本形態の一番威力が高く、速い斬撃を放てるのは居合いです。ローブは剣術は居合いから二刀流と、殆ど何でもこなせます。

隼人のバリアジャケットは、赤いギザギザ文様の入った白いローブに、黄色いチャックの黒い上着、赤い文様の入った黒い腰から伸びるマントに、青い手袋、黒いズボンに黒い靴です。

全の書は、黒くて分厚い本に、銀の十字架の模様。

フライドは翠色の球に、黄色い槍みたいに尖った先端に、魔力量調整、またはそこから魔法を撃ち出すためのクリスタルが二つ周りに浮いている杖です。

ロキの髪は水色です。服は黒の袖無し服と、黒と赤の手袋、水色のズボンに赤の靴です。

以上、主人公設定を作ってみました。

本編と少し違うかもしれませんが、これから変わるかもしれません、ご了承ください。

それでは、今回はこの変で……

ライト「なあ、ちょっと聞いていいか？」

何だよ。せっかく面倒くさがり屋なお前のためにさっさと終わらせようとしたのに。

ライト「それはとてつもないくらいありがたい話なんだけどさ、主人公二人がポジション同じってどうよ？」

うっ、痛いところを……

ローブ「説明も微妙だったよね」

くっ、うるさいわぁっ！

隼人「しかもこれから設定変わるかもしれないって……」

ロキ「もう呆れるしかないよな」

……………ごめんなさい。

ライト「作者が土下座って……………俺より立場低くね？」

ローブ「本当だ。ライト以下の人間なんて初めて見たよ」

ライト「……………ローブ？聞こえなかったからもう一度言ってくれるかな？」

ロ隼「ライト以下の人間は森羅万象どこの世界行っても、輪廻転生を何度繰り返しても、見つけることなんてできない」

ライト「さつきより余計に何倍もひどい！？その上何故か隼人も加わってるしっ！！更によくそんな長文を一語一句違わずに八モることできたなっ！！すげえよっ！！」

ロ隼「いやあ」

ライト「照れたふりするんじゃないっ！すげえムカつくからっ！！」

……………あれ？何か存在忘れられてるような……………

ラロ隼「気のせい」

いや全員八モってるのが紛れもなく真実を語ってるということに気付くっ！！

隼人「口うるさい作者だな。まるでライトみたいだ」

ローブ「本当だよ。全くライトみたいなんだから」

ロキ「ライトが二人いるみたいで最悪だな」

ライト「……作者。今日は一緒に飲まない？」

……そうだな。お互いに未成年だけど、今日くらいいいよねっ!!

ライト「そうさっ! 今日くらい酒飲んだって……」

ギンガ「兄さん？」

ライト「へ? 何でギンガがここに……」

ギンガ「そんなことより、お酒は二十歳からって言ったよね？」

ライト「えっ? いやそのこれにはマリアナ海溝より深い事情が……

…作者、助けてくれっ!」

今日はファンタでもがば飲みするかな。

ライト「裏切り者おおおおおおおおおおおおおおおおおっ

!!--!」

はて? 何のことやら……

ライト「てめえいつか絶対殺……」

ギンガ「ナックルバンガーッ!」

ライト「ぎゃああああああああああああああああああああああああ
ああああああっ！！！！」

御愁傷様です。

ローブ「うわあ。あっさり見捨てたよ」

隼人「最悪だな」

ロキ「ライト以下なんじゃねえの？」

……… 僕の気分次第で、君たちの出番の数を自由に増やすことも減らすこともできるのだが？

ローブ「……… いやあ、作者ほどいい男も中々いないよねえ」

隼人「全くだ。そこで炭と化したライトにも見習ってもらいたいものだ」

ロキ「よっ、日本一っ！！」

……… 自分で言っという何なんだけど、すごい手のひらの返しっぷりだな。

隼人「こっちも色々必死なんだよ」

……… そうか。じゃあライトの出番が一番多い予定だし、そこを減らして………

ライト（炭）「……………」

ああそつか。炭になってるから突っ込みも入れれないのか。かとい
って他に突っ込みをいれれる奴は……

ヴァイス「ここにいますぜ」

……突っ込みをいれれる奴は……

ヴァイス「って無視しないでくださいよっ！」

いやだつてさあ。いきなりすぎるだろ。ギンガのときは軽くまえぶ
りみたいなのあったけど、お前一切ないじゃん。

ヴァイス「細かいことは気にしないでくださいませ。それより、俺と
してはライトの兄貴の出番が減るのは避けたいんですけどさあ」

ん？何で？

ヴァイス「兄貴とのからみを入れたら、俺の出番が原作と比べてか
なり増えるからに決まってるじゃないっすかっ！」

……結局みんな自分が一番なんだなあ。

ヴァイス「他にも、兄貴との関わりの深い連中は、みんな反対して
ますぜ。出番減るから」

そついやライトはあちこちの部隊に所属してたな。だから知り合い
の数も半端なく、関わってくる人数も半端ない、と。

ヴァイス「そういうことです」

隼人「ヴァイス……悪いがそれは無理だ。何故なら俺の出番を増やさねばならないからな」

ローブ「何言ってるのさ。僕の出番を増やすんだよ」

ロキ「いや、俺のだ」

ヴァイス「いや、兄貴のつすよ」

バチバチバチバチツ

おおつ、にらみ合いで火花が散ってるの初めて見た。

隼人「うりゃああああああああああつ！」

ドゴオオンツ！

ぎゃあああああああああつ！！！

ローブ「はあああああああああああつ！！！」

ボゴオオンツ！

ぐええええええええええええええええええええええつ！？

ロキ「てりゃあああああああああああつ！！！」

ゴゴオオンツ！

があああああああああああああああああああああああ
!!!?

ヴァイス「……こりゃ俺には無理だな。兄貴、すみません。俺、逃げます」

まっ、待って！ヴァイスの出番増やすから助け……

口隼口「はあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああっ!!！」

ドガゴボドゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ッ!!！」

どうやったたらそんな音でるんじやってぎゃああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ!!!？」

ライト「……………アホくさ」

ラ、ライト！目覚めたか！出番増やすから助け……

ライト「出番増えるのなんて面倒くせえ。話もとっくに終わったし、俺もう帰って寝るわ」

なっ!?!?

ライト「そんじゃお大事に〜〜」

ガシッ

ライト「……………なのはさん？何故ここに？」

なのは「細かいことは気にしちゃ駄目だよ、ライトくん」

ライト「いやそれは別にいいんだけど……………何で肩を物凄い力で掴んでるの？」

なのは「だってライトくん、帰ろうとしたでしょ？」

ライト「え？ああ。もう眠いから帰って寝ようかと……………」

なのは「駄目だよ。早く闘いに混じって、出番を増やしてきて」

ライト「……………何故？」

なのは「ライトくんの出番が増えるイコール私の出番も増えるってことなの。だから頑張ってる」

ライト「いやお前もう充分出番あ……………」

なのは「頑張ってる」

ライト「いやだから……………」

なのは「頑張ってる」

ライト「……………逃げるっ！」

なのは「逃がさない！レストリクトロックー！」

ローブ「……………」

ロキ「……………」

ライト（黒炭）「……………」

え〜。では皆さん。出番が増えるのは、高町なのはさんで、異議
はありませんね？

ロ隼口「異議なしっ！」

なのは「やったあっ！」

……………正に白い悪魔。

なのは「デイバインバスターツ!!!」

ドゴオオオオオンツ!

隼人「さ、作者ああああああああああっ！」

ローブ「ぼ、僕用事思い出したからこの辺で……………」

隼人「あっ、俺も……………」

ロキ「お、俺はメンテナンスの時間だ……………」

なのは「あっ、私もお仕事の時間だ……………」

ライト（黒炭）「……………」

た、助かった。死んだふりって結構便利だな。ライトもそう思わない？

ライト（黒炭）「……」

ありゃ？本当に死んじゃった？黒炭になる擬態法とかじゃないの？

ライト（黒炭）「……」

……南無南無。君のことは忘れんよ。

ライト「ってこらあっ！主人公がおまけの欄で死んだまま放置ってありえないだろっ！」

死んでないじゃん。

ライト「生き返ったんだよっ！これがおまけじゃなくて本編だったら確実に永眠してたよっ！！」

よかったね。ずっと寝れるなんて、お前からしたら最高じゃん。

ライト「………もういいや。それよりも一つ聞きたいんだけどいいか？」

何？

ライト「いやさ、今回って俺達三人の設定発表がメインだよな？」

そうだけど？

ぎゃああああああああああああああああああああつ!!!?

ライト「何で俺も巻き添えいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!？」

なのは「次回、第七話、ファースト・アラート。T A K E O F F」

ラ作「無理矢理まとめたっ!？」

主人公設定（後書き）

ライト「……………ツッコミ所がいくつかあったが、取り敢えず無視した方がいいか？」

作者「お願いします」

ローブ「滅茶苦茶説明下手だね。しかも後半がメインになってるし」

作者「言うなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

ライト「まあ、この作者に文才とか求めるのが間違ってるんだろうけど」

作者「……………このまま続けても、ボロクソに言われて終わりそうなので、今回はここまでにします」

ライト「単に文書くのが面倒くさくなっただんじゃ……………」

作者「ではまた次回っ！！」

ライト「凶星かよ……………」

ローブ「ライトのモデルって、もしかして作者？」

ライト「うわっ、自分で言うのもなんだけどあり得るな」

ローブ「でしょ？まあ、今回はここまでにして、また今度作者ぼこ

「ほかにしゅいか」

「ライト」そうするか。でわまた次回」

第七話 ファースト・アラート 1 (前書き)

久しぶりの投稿っ！やっと書き終わった。

ライト

「あれ？ここってあらすじもとい俺の愚痴聞いてもらうコーナーじゃないの？」

いや俺的にはあらすじのつもりだったんだけど……何かお前の愚痴のコーナーみたいになってるだろ？

だから、次回からはあらすじも次回予告もしないっ！

ライト

「じゃあどうすんの？」

前書き、後書きの欄を使って、ゲストを呼ぼうかと。

ライト

「ああ。他の作品でもやってるあれね」

そう。という訳で、只今より、ゲストとして来てくれるキャラを募集します。

ライト

「オリキャラ限定？」

まあ出来ればね。ただ、キャラ崩壊してる原作キャラとかもいるじゃない？だからそっち方面でもオツケーにしようかと。

ライト

「もし誰も来なかったら？」

適当なマンガからキャラクターをゲストとして呼ぶ。例：銀魂の坂田銀時とかのギャグキャラ。

ライト

「……………何か悲しいな」

でしょ？そしたら哀れみで誰か来てくれるかと…………

ライト

「最低だなお前っ！！」

うるさいっ！手段を選ばないのは、文才ある人の特権だあっ！文才ないんだから手段なんて選んでられるかっ！

ライト

「……………言ってて悲しくならない？」

はい、とても（．．）

……………まあ、半分冗談のやり取りはここまでにして、

ライト

「半分は本気だったんだな……………」

ごほんっ。詳しくは後書きでっ！！

ライト
「あ、誤魔化した」

第七話 ファースト・アラート 1

泣いていた。

自分が、ただひたすら泣いていた。

泣き叫び、助けを呼んだ。

何度も心が壊されて、気付けば感情なんて概念が無くなり、ただ人形のように毎日を生きていた。

毎日が辛く、生きていることに意味を見いだせず、何度も死にたいと思った。

誰か俺のことを殺してくれ。

毎日そう思った。

世界の全てがどうでもよく、気付いた時には、辛いという感情すら無くなった。

俺は、何の為に生きてるんだろう……

この間まで、普通に楽しい生活だったのに、何でこうなったんだろう……

幸せって何だっけ？

楽しいって何だっけ？

……分からない。

今の俺にはもう分からない。

どうすればいいの分からない。

分からない。

もう何も……分からない。

*

「……………最悪」

そう呟いて、ライトは起き上がった。

ライトの顔色は悪く、額からは滝のように汗が出ていた。

「くそっ……………何であの時の夢なんだよ……………」

悪態をつきながら、首にかけているペンダントの一つを取り出した。

そしてそれを開けた。中には、一人の少女の写真があった。

「…………あの時の夢より、お前と会った後の夢が良かったよ」

そう呟いてペンダントを閉じ、再び眠りについた。

*

「…………頑張るねえ」

フォワード陣の早朝訓練を、ビルの屋上から見ながらぼけっとした顔で呟くライト。

その手は今、モニターのキーをすごいスピードで叩いていた。

何をしているかは、本人しか知らない。

「…………こんなもんか」

そう呟いて、モニターを閉じる。ちょうどフォワード陣の訓練も終わったようだ。

ライトは屋上から飛び降り、地面に着地してフォワード陣となのは所まで歩いていく。

「お疲れさん」

ボロボロのフォワード陣を見て、ライトが労いの言葉をかける。

「……は、はい……」「」「」

息も絶え絶えに、何とか答える四人。

「なのはもお疲れ」

「うん、ありがとう」

「てか、マジで何もしなくていいの？流石に何かただ飯食ってるよ
うで罪悪感感じてきてるんだけど……」

「うん、それは……」

「きゅくる〜」

なのはがライトの問いに答えようとすると、フリードが何かを訴えるように鳴きだした。

「フリード、どうしたの？」

キャラが不思議そうな顔をして、どうしたのか尋ねる。

「何か、焦げ臭いような……」

エリオが、鼻をかきながら呟く。

「あつ、スバル。あんたのローラー……」

「えっ？」

ティアナの言葉に、全員がスバルのローラーを見る。

バチバチッ

スバルのローラーが、音を立ててショートしていた。

「あつ。うわっ、やばっ」

急いでローラーを脱ぐスバル。

「しまった。無茶させちゃった」

ローラーを抱えてそう呟く。

「あーあ。そりゃ修理しなきゃもう駄目だな」

ライトが少し呆れたように言う。

「オーバーヒートかな？後でメンテナンススタッフに見てもらおう」

「ローに渡したら一発だと思っけど？」

「ローブくんはフェイトちゃんのお仕事の手伝いがあるから」

「なるへそ。なら、俺が直してやるつか？暇だし」

「本当っ！？」

「ああ……………いや待てよ？それよりそろそろか？」

なのはの方を向いて、確認をとるライト。

「そうだね。そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな」

「新……………」

「デバイス？」

スバルとティアナが不思議そうに呟く。

「なら、俺がやる必要はないな」

そう呟いて、またライトは大あくびをした。

*

「はあ……仕事がないとここまで暇だったなんてなあ」

フォワード陣の訓練が終わり、訓練場から隊舎に歩きながら、ライトが呟く。

108部隊に所属していた時は、山のように仕事があったので、暇と感じても仕方がないだろう。

「もう少ししたら、ライトくんにも仕事があるよ」

隣を歩いているのはが、笑顔で答える。

「それはそれで嫌だなあ」

苦笑しながら、それに返す。

「じゃあ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるっか」

「」「」「はい」「」

「俺、眠いから自室に……」

「ライトくん？」

笑顔でライトに詰め寄るなのは。

「な、なのはさんについてロビーに行きますっ……」

「わかればよろしい」

そう言つて、ライトから離れる。フォワード陣は、もういつものことなので、笑いながらその光景を見ていた。

(はぁ……眠い)

そんな事を思いながら、空を見上げる。

(雲はいいよなあ……自由気ままで)

「雲になりたい」

「何言つてるの?」

「……いや、何でもない。気の迷いだ」

頭を振つて、今思ったことをかき消すライト。

ブオオオオン

「あの車つて……」

近づいて来た車を見て、呟くティアナ。

(……今のうちに)

一同の視線が、車に集中している間に、こっさりこの場から去らうとするライト。

(よし、このままエスケープ……)

ガシッ

なのはに肩をおもいつきり掴まれる。

恐る恐るなのはを見ると、笑顔のなのはがいた。

「ライトくん。後で話があるけど、いいかな？」

「出来れば遠慮キロツいえ喜んでっ！！」

「そう」

穏やかに微笑むなのは。

(本日の天気予報は雨です。真っ赤な血の雨です。俺の血の雨です)

ライトは顔を真っ青にしながら、この後の地獄に戦慄を覚えることしか出来なかった。

車がライト達の前で止まり、屋根と窓が消えてオープンカーのようになつて、その中から二人の搭乗者、フェイトとはやてが声をかけた。

「すごい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

「うん、そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「車かぁ……ペーパードライバーの俺には無縁の代物だな」

「いや、免許持ってるなら買いなよ」

「金の無駄だ。俺にはヴァイスからくすねたバイクがあるからな」

「うわあ。ヴァイスくん泣いてるんとちやうん？」

「過去に振られた女を隊長達にバラされたくなければ大人しくよこせ、って言ったら快く譲ってくれたよ」

「……私が言うんもなんやけど、あんた外道やなあ」

「ふっ、まあな」

「誉められてないよ、ライトくん」

「まあライトくんなんか放っておいて、皆練習のほうはどないや？」

「あー、まあ……」

「頑張ってます」

「俺は暇で仕方ないけどな」

「なら書類地獄を……」

「ごめんなさい。調子に乗りました」

コンマ一秒で謝るライト。その内土下座を平気でやりそうな勢いだ。

「エリオ、キャラ、ごめんね。私は二人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて」

フエイトが申し訳なさそうに二人に謝る。

「あつ、いえ。大丈夫です。兄さんがよくしてくれますから」

「お兄ちゃん、とっても頼りになりますよ」

瞬間。エリオとキャラ以外の全員が、ライトを見る。

(ぐはあっ！やっぱりお兄ちゃんはやめてくれっ！後、お前らこっち見るなっ！)

エリオとの一件以降、キャラもライトのことを兄と呼ぶようになったのだ。

初めてキャラがそう呼んだ時、ライトは朝食の味噌汁を盛大に吹き出し、喉につまり呼吸困難に陥り、拳げ句の果てに周りから白い目で見られ、誤解を解くのに一週間かかったとか。

まあそんな事もあり、もはやこの事は周知のはずなのに、何故ライトを見ているかと言うと……

ライトの悶える姿が面白いからだ。お兄ちゃんと呼ばれる度に、背中がむず痒くなり、悶えるライトの姿は滑稽である。

一度、お兄ちゃんは止めてくれ、とキャラに頼んだ際に、「駄目ですか……」とエリオの時みたいに落ち込まれ、仕方なくOKせざるを得なかったという。

そんな経緯から、一同は面白そうにライトを見ている。約一名を除いて。

「うっ……」

フェイトが羨ましそうにライトを見ていた。

(……そんなに羨ましいんだったら、自分のことをお姉ちゃんって呼ぶように頼めばいいのに)

呆れたように、フェイトを見る。

「それで、これからどこに行くんだ？」

視線に耐えられなくなったライトが、フェイトとはやてに尋ねる。

「カリムさんの所だよ」

ライトの問いには、後ろからバイクを引きずってきている隼人が答えた。

「げっ、マジかよ……」

げんなりしたように呟くライト。

「なんや、カリムとも知り合いなん？」

「いや、知り合いっつーかその……義姉^{ねえ}さん？」

『……………は？』

「まあ、向こうが弟みたいに可愛がってくれてるってことだ。俺達三人とも」

ライトの言葉に、全員が訳が分からないという顔をしたので、簡潔に隼人が説明する。

「ああ、成る程。私と同じ感じやねんな。ロツサとも知り合いなん？」

「アコース査察官は……………」

「もう嫌だ。あそこに行くのは嫌だ……………」

「……………どうしたのライトくん？」

「……………まあ気にしないでやってくれ。ただ単に、弟扱いされるのに馴れてないだけだから」

「ああ、ライトくんって、お兄ちゃんってイメージはあっても、弟ってイメージはないもんなあ」

「そ、それより……………いるのか？」

ライトが何かを恐れるように隼人に聞く。

「……………ああ。いる」

瞬間、ライトの顔が青ざめる。

「あつ、待ちやが……」

「グットラック」

気持ちのいい笑顔でサムズアップし、隼人は去って行った。

ライトはそれを見送った後、力なくその場に跪いた。

「さ、最悪だ……」

あまりにいきなりのもので、周りについていけないが、そんな事を気にする余裕もない様子のライト。

「ラ、ライ兄？」

スバルが恐る恐るライトに声をかける。

「うう……終わった。近いうちに俺は死ぬ」

「君の自業自得だろう」

何かぶつぶつ言ってるライトに、隊舎から出てきたローブが、呆れたように呟く。

「お前らは“報告”したんだよな？」

「当たり前だよ。後が怖いしね」

「お、俺だけなんて……」

顔をさらに青くしたライトが、震えながら呟く。

「ラ、ライトさんに何があったの？」

ティアナがスバルに、訳が分からないと言った顔をしながら聞く。

「わ、分からないよ。ロー兄、何か知ってる？」

「それは「言うなあっ!!」……ライトが物凄い顔でこっち見てるから、言わないでよくよ」

「な、なんやわからんけど、取り敢えず大丈夫なんやな？」

「まあ、当分は大丈夫かな？ライトのことは気にしなくていいから、早く行きなよ。あ、カリムさんによろしく言っといてね」

「分かった。ほな、皆もお疲れさんなあ。次の訓練までゆっくり休みやあ」

「……はいつ!!」「」

「ローブ、なのは。エリオとキャロのことお願い」

「ライトに頼めば……ああ成る程。あれには任せられないよね」

跪いて呪詛を呟く幼なじみを見て、ため息をつくローブ。

「オツケー。ついでにそのバカにはきついお灸をすえておくよ」

「うん、お願い」

(あれ？フェイトちゃん、止めないの？)

なのははフェイトの返事を聞き、突っ込むべきかどうか迷った。

「に、兄さん大丈夫かな？」

「ち、ちよつと心配かも……」

「ま、まあライ兄だから、多分大丈夫。多分」

「ローブさんの目、爛々としてるけど……本当に大丈夫なの？」

「……今日のお昼は」

「……さじ投げたっ!?!?!」

フォワードの4人は、ライトを心配しながらも、ローブの恐怖を前に何もできず、というよりする気すらなくなってしまったようで、別の話題に逃げることにしたようだ。

「ほ、ほな私らも行こか」

「うん、そうだね」

ローブの目を見て危険を感じとったはやては勿論、頼んだフェイトさえも早くこの場から逃げ出したい気分になっていた。

「じ、じゃあなのはちゃん。後よろしくな」

「えっ!？」

「お、お土産買って帰るからね」

「フエイトちゃん!? はやてちゃん!？」

「「お大事に」」

二人は良い笑顔でなのはにサムズアップした後、車のアクセルを踏み、その場から逃げ出した。

「じ、じゃあ私達もシャワー浴びて来ます」

「なのはさん、頑張ってくださいっ!」

「「兄さん（お兄ちゃん）のこと、よろしくお願いします」」

そう言っつて、フォワード4人も逃げるように寮に向かった。

「置いてかないでっっ!!」

若干涙目で、助けを請うなのはの横では、悲鳴をあげるライトを引きずって、隊舎の中に入っていくローブの姿があった。

「ふふふ……さうて、どの発明品の実験をしようかなあ」

最後に聞こえた言葉を、なのはは自分の中でなかったことにした。

*

「……兄さん、何で黒焦げなの？」

シャワーを浴び終わり、女性陣を待っていたエリオが、目の前にいる全員真っ黒焦げになっているライトに尋ねる。

「……………ドーナツ作りに失敗した」

「いや絶対ローブさんが何かしたでしょっ!!」

エリオの言う通り、ローブの新しい訓練用システムの安全性の実験に付き合わされた結果、こんな漫画の発明家が実験に失敗したような黒焦げアフロヘアになってるわけだが。

因みにライトがここにいるのは、実験場（訓練場）から逃げ出したら、たまたまここについただけである。

「と、取り敢えずシャワー浴びてきたら？」

全員黒ずみなので、エリオが気をつかってそうライトに言う。

「そうするわ。あゝ、ホントろくな目にあわねえな、最近」

頭を掻きながら、愚痴をぶつぶつ呟いて、シャワールームに向かう。念のために言っておくが、間違えて女用の方に行くなんて愚は、ライトは犯さない。

「眠い……？」

ただ、シャワーを浴びながら、口をあけて寝て、窒息しかけるような愚は犯した。

「つて、死ぬわっ！！」

一人、ポケットツコミをするライトであった。

*

「あ、大分スッキリしたな。眠気がなくなっちまった」

シャワーを浴び終え、エリオのいた所に戻ると、女性陣も既にいた。

「何だ、お前らもう上がったんだな」

まだ少し濡れている髪を拭きながら、意外そうに呟く。

「いや、兄さんが遅すぎるんだよ?」

「え?うそ……」

「シャワー浴びてる途中で寝てたとか?」

「……さっ、皆っ!隊長達の待ってるロビーに急ごうっ!」

「って、誤魔化すなっ!」

そう言っつて、ティアナがライトにどこかからだしたハリセンで突っ込む。

「ぐはっ」

手加減なしで突っ込んだようで、思いっきり叩き伏せられる。

「テ、ティアナ?何かキャラが崩壊してないか?」

「気のせいです。それより、早く行きましょう」

倒れているライトを起こさせた後、ロビーに向けて足を進める。エリオ達もそれに続く。

「……あのハリセン、どっから出したとか、誰も突っ込まないのか?」

そう呟いて、ライトも4人の後に続いた。

*

「んあ？あれは……」

ロビーに向けて足を運んでいるライトの目の先に、赤い髪を二つに三つ編みにした小さな少女がいた。

「おい、チ……」

「誰がチビだっ！」

「ぐへえっ……」

少女、ヴィータに声をかけた瞬間、グラーフアイゼンで頭をぶん殴られた。

「つてえ……てめえっ！ちっとは手加減しやがれっ……」

頭を抑えながら、ライトがヴィータに向かって叫ぶ。フォワード4人は、その光景を見て、「ああ、またか」という顔で、二人を見守っている。

「うるせえっ！てめえ会う度会う度チビチビ言いやがて……」

「事実だろ」

ゴツンッ

グラーフアイゼンでまた頭を殴られる。

「~~~~~っ！！」

頭を両手で抑え、踞る。

「てめえ、もう一回言ったら、後がないと思えよ」

「……………」

「返事は？」

「へんじがない。ただのしかばねのようだ」

「なら、今からその口聞けなくなるような体にしてやるよ」

「冗談です。すいませんでした。チヴィータさん」

ドゴオオッ

またまたグラーフアイゼンで殴られるライト。しかもさっきよりもかなり思いつきり。手加減してるかどうか疑わしくなるくらいに威力だ。

「……………（ピクピク）」

今度こそ、もの言わぬ屍の如く倒れているライト。

「ライト？ラストチャンスだ。今、何て言った？」

「ふ、副隊長サイコー」

ふるふる震えながら、右手を挙げてそう言う。

「次言ったら、ただじゃおかねーからな」

ため息をつきながら、ヴィータがライトに忠告する。既にただですんでないことには、目を瞑ってもらいたい。

「ういー。りょーかい」

全く信用のできない返事をしながら、ライトが起き上がる。

「……………この二人って、仲がいいの？」

「さ、さあ？」

二人のやり取りを見ていたティアナが、スバルに小声で聞いたが、スバルは苦笑しながら分からない旨を伝える。

「誰が仲がいいって？」

ティアナの声が聞こえたらしく、二人揃って疑問の声をあげる。

「ライトさんとヴィータ副隊長が」

「「んな訳あるかアッ!!」」

これまた全く同じタイミングで反論する二人。その後、二人は互いの顔を見て、「真似すんなっ!!」と叫んだ。

これで仲良くないと言われて、誰が信用するだろう?

「こんな暴れ坊チビと仲が……」

ドゴガガアアンツ

「何か言ったか?」

「イ、イエ……ナニ……モ……ガフツ」

そう言って、力尽きるライト。

この二人、今でこそこんな風に話すが、始めは口も聞かなかった程だ。

話は六課設立の次の日、ライトがエリオとキャロに兄と呼ばれる二日前に遡る。

*

「あゝ、散々な目にあつた……」

ライトは、先ほど味わつたシャマル印の吉備団子のな料理に対する冒涇だと言つても過言ではない料理の味を思い出し、顔を青くする。

「はあ……ん？」

ライトの目に、赤い髪を二つに三つ編みした、小さな少女が映つた。

「えつと確か……何だっけ？」

どうしても名前を思い出せず、その場に立ち止まり、思いだそうと必死に思考を巡らせる。

「……昨日なのはに聞いたんだけどなあ……駄目だ。思い出せねえ」

(まあ、本人から聞けばいいか)

思いだすのを諦め、本人に聞くのが一番だと判断したライトは、その少女に近づいた。

「よっ」

ライトは手をあげて、少女に気軽に声をかけたが、少女はライトを一瞥した後無視して歩きだした。

「って待っていつー!!」

少女の肩を思い切り掴む。

「……………何だよ？」

少女は睨むようにライトを見る。

「いや何だよはねえだろ？ 挨拶されたら返す。これ、世間の常識」

子供にもものを教えるように、少女にそう言う。

「それに、まだ話したことなかったろ？ 俺はライト。ライト・エリシオンだ」

「……………ヴィータ」

「そっか。よろしくなヴィータ」

笑ってヴィータに握手を求めるライト。だが、ヴィータはその手を払って叫んだ。

「お前らにはやては渡さねえっー!!」

「……………は？」

訳が分からないという顔をするライト。

(え、えっと……………こいつは何を言ってるんだ？ はやてって、まああのはやてだよな？ 渡さない？ 一体どゆこと?)

ヴィータの言っていることを簡潔に話すと、以前からはやては、ヴィータ達にスリーストライカーズ、特に隼人の話を嬉しそうに話していたのだ。これは憧れという意味で嬉しそうに話していたのだが、ヴィータはそれを聞いてはやてが隼人のことを好きだと勘違いしていたのだ。

そこにスリーストライカーズ三人がやってきて、ライト達、特に隼人にはやてをとられると勘違いして、ライト達のことを快く思っていないのだ。

そんな事を知らないライトは、戸惑うことしか出来なかった。

「はやてが欲しかったら、私を認めさせてみるっ!!」

「いやさっきから何を言っ……」

「問答無用っ!アイゼンツ!」

「ギガントハンマー」

ヴィータの手に、馬鹿でかいハンマーが現れた。

「へ?何この状況?まさかそのハ……」

「うおりいやあああああああああああああああああああああ
ああっ!?!?!」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
あっ!?!?!?」

ドガアアアンッー！

そんなファーストコンタクトから、ライトもヴィータも互いのことを罵りあう関係となった。

その二日後、ライトとエリオの話を聞き、少しライトのことを見なおしたヴィータは、ライトと口を聞くくらいの関係になったが、ファーストコンタクトがあまりにも酷かったので、罵りあう関係というのに変わりはなかった。

*

まあそんな事もあり、罵りあいながらも仲がいい、変な関係になっていた。

「……………はっ、ここはどこっ！？ワッチャネイム！？」

ヴィータによって気絶させられたライトが、目を覚ました途端、いきなりそう叫ぶ。

「きゅくる〜」

フリードが、ライトの頭の上で鳴き声をあげる。

「……何でフリードは俺の頭の上に？そしてここはどこだ？」

辺りを見回して、ライトがそう呟く。さっきまで廊下にいたはずなのに、今の景色は全く別物になっていた。

「デバイスルームだよ。ライ兄、まだ寝ぼけてる？」

スバルが、ライトが目を覚ましたことを確認した後、声をかけた。

「あ、ああ……そっぴいああのチビに気絶させられたんだ……」

先程あったことを思い出すライト。

「てか、何でここにいるの？」

「私達が運んだんだよ。ライ兄、気絶しながら歩いてたから、誘導するだけですんだけど」

「どっぴい体してるんですか、本当に」

スバルからは説明を受け、ティアナからは呆れたような呟きを受ける。

「ローブと何年も一緒にいたらこうなる。それより、何故にフリードが俺の頭に？」

「あつ、それはお兄ちゃんの頭が、居心地がいいって」

「きゅくる〜」

キャラロがライトに説明し、フリードが嬉しそうに鳴く。

「それはあれか？鳥の巢的な意味でか？」

自分のボサボサの髪を見て、そう呟くライト。

「まあ落ち着けよライト」

ライトの目の前に、リンサイズの水色髪をした、小さな少年が飛んでいた。

「ロキ、どっから沸いて出た？」

「人をゴキブリみてえにいうんじゃねえっ!!」

「人じゃねえだろっ！」

「デバイスですよね」

ライトとクルセイドが、同時に突っ込む。

「くっ、おいリン！お前から何か言ってやれっ！」

ロキが自分の隣を飛んでいる少女、リンにそう言う。

「確かにゴキブリ扱いは酷いですっ！」

プンスカという擬音が似合う怒りかたをするリンを、ライトは（

はあ、ロキにもこんな可愛い時期があったなあ、なんてくれた息子を見て昔を懐かしむ父親のような心境になっていた。

「きゅくる〜」

「……いつまで乗ってるんだ？」

「その居心地がいいから、しばらくいるって言ってます」

「……鳥の巣かよ、ホントに」

「でもライ兄って、髪の色がいいから、トリートメントしたらサラサラになるんだよね？」

その言葉を聞いた女性陣が敏感に反応したが、ライトは全く気づかなかった。

「兄さんの髪がサラサラ……」

エリオはライトの髪を見ながら呟く。

「あんまり想像できないかも」

素直な感想を言う。はっきり言って、普段ボサボサなのがサラサラになるのを想像するのは難しいっていうかイリュージョンみたいなもんなので、想像出来なくて普通だ。

「まあ、面倒くさいから別にボサボサでいい〜」「〜」よくないですよっ！〜」「〜」「〜」どうしたいきなり？」「〜」

いきなり叫んだ、シャーリー、キャロ、ティアナ、リインを見て、驚いた、というより訳が分からないという顔で四人を見つめる。

「せっかく髪質がいいのに勿体ないっ！」

「よくしようとしてもできない人もいるのにつ！」

「今すぐトリートメントして来てくださいっ！」

「女の敵ですっ！」

四人が、嫉妬という名の凶器を武器に、ライトに詰め寄る。

「ま、待てっ！落ち着けっ！俺何かしたかっ!？」

「「「「何もしてないのが悪いんですっ!」「「「「

「訳分かんねえっ!！」

ライトはそう叫びながら、自分に伸びてくる八つの魔の手から逃げる。

「エリオツ！スバルツ！助けてくれっ！」

逃げながら、正気であるエリオとスバルに助けを求める。

「「「……………」じめんなさい」「

「チキシヨオオツッ!！」

手を合わせて謝る二人を見て、思わずそう叫ぶ。

「てか、お前らは何でそんなに怒ってんの！？何か望みあるなら聞くから静まってっ！！！」

「！！！！なら今すぐトリートメントしてくださいっ！！！！！！」

「マジで訳分かんねえけど、分かったから静まれえっ！！！！」

すると、四人はようやく動きを止めてくれた。そのことにライトは安心して、そつと息をつく。

「と、取り敢えずトリートメントしてくればいいんだろ？今すぐやってくるから待ってる」

そう言って、デバイスルームから出ていった。

その後、その場に残った者は、スバルとロキを除いて、ライトのサラサラヘアーがどんなものを想像していた。因みに、この時ロブがいなかったのは、やらなければいけなかった仕事をほったらかして、新開発のシステムの実験をしたので、そつちをやっている。すぐに終わる量なのだが……

*

「……久しぶりに来たな」

聖王教会の廊下を歩きながら、隼人が呟く。

「隼人らは何時カリムと知り合っただん？」

隣を歩くはやてがそう聞く。

「えっと……確か七年くらい前かな」

「あつ、私のほうが早くあつてるな」

「まあ、俺が知り合っただのは知り合いのツテだしなあ」

「ツテ？」

「執務室に行けばわかるよ」

多少、いやかなりげんなりしたように隼人が呟く。

「？」

それにはやては、首を傾げることしか出来なかった。

*

「騎士カリム。騎士はやてと隼人がいらっしやいました」

カリム・グラシアの執務室のモニターに移るシャツハが、はやてと隼人が来た旨を、カリムに伝える。

「早かったのね。アヤカさんとエリナさんには伝えた？」

「はいその……ライトがいない事に激怒していましたが、隼人が来たことには喜んでいました」

「……隼人には悪いことをしたかもね」

「仕方ありません……あれは」

「そうね……取り敢えず、私の部屋に来てもらってちょうだい。それからお茶を五つ。ファーストリーのいいところを、ミルクと砂糖つきでね」

「かしこまりました」

シャツハがそう言うと、モニターが消えた。

「……隼人もだけど、ライト、大丈夫かしら」

心配そうに呟くカリムの声は、誰にも届くことはなかった。

*

「くしゅんっ！」

シャワールームに入ろうとしたライトが、くしゃみをした後、体を震わせる。

「何だこの寒気……」

(まさかあの二人か?)

「……あり得るなあ。はあ、いつか会う日が怖いよ」

そう言って、ライトはシャワールームに入っていった。何故自分がこんなことをしなきゃいけないんだ、と思いながら。

*

コンコン

「どうぞ」

カリムの執務室のドアがノックされ、それに答えるカリム。すると、中に二人の男女が入って来た。

「カリム、久しぶりやな」

「お久しぶりです、カリムさん」

はやては嬉しそうに、隼人は周りを警戒するようにカリムに挨拶する。

「はやて、隼人、いらっしやい」

笑顔で二人を迎え入れるカリム。だが、隼人はまだ周りを警戒していた。

「……カリムさん、あの二人は？」

「もう少ししたら来ると思うけど……」

「……どんな感じでしたか？」

「隼人が来るって言ったなら、ご機嫌になったわ」

「……………そうですか」

絶望したように体を震わせる隼人。

「さ、さっきから何の話や？てか、隼人大丈夫か？」

はやてが、二人の会話が分からないことを訴えた後、隼人に心配そうに声をかける。

「だ、大丈夫だ。今は……………今は」

「？ますます分からんねんけど……………」

ドカァ

「隼人ちやあ……………んっ！！」

はやての声を遮るようにいきなりドアが開き、赤い瞳で、赤い髪を腰まで伸ばした、背の高い女性が入って来た。

そしてそのまま、

ギュウウウウツ

隼人に抱きついた。

「隼人ちやあ……………ん、元気だったあ……………」

隼人に抱きつきながら、嬉しそうに聞いてくる女性。

対する隼人の顔は青ざめている。というか、さっきから隼人の体からミシミシと骨の軋むような音が聞こえる。

「し、死ぬ……」

霞むような声をあげる隼人。

「ちよつ、隼人っ！？大丈夫かつ！？」

「だ、大丈夫……じゃ……ない……ガクッ」

「隼人おおおおっつー！」

「エ、エリナさんっ！隼人が死んでしまってますっ！」

カリムが思い出したように女性、エリナに声をかける。

「あ〜。カリムちゃあ〜ん。隼人ちゃんを呼んでくれてありがとう〜」

「いやそれより隼人が……」

「……（ピクピク）」

「隼人おおおおおおおおっつー！！」

白目で痙攣している隼人を見て、はやてとカリムが叫ぶ。

ガチャツ

すると、また赤い瞳で、腰まで伸びる赤い髪を、後ろで一つに縛った、背の高い女性が部屋に入ってきた。エリナの方はたれ目で穏やかな感じだが、こちらはつり目で勝ち気そうなイメージだ。因みに二人とも巨乳。

「おい。隼人は来たか……って何してるんだ姉さんっ!!」

その女性は、隼人を圧迫死寸前まで追い込んでいたエリナを、隼人から引き剥がした。

「隼人を殺す気かっ!!」

女性がエリナを叩きながら叫ぶ。

「だって久しぶりに会えて嬉しかったんだもん。ライちゃんやロ―ちゃんにも会いたかったけど」

「ライトとローブは頑丈だからいいが、隼人は……よくよく考えたら隼人も頑丈だな」

「エ、エリナさんの怪力に耐えられる程じゃないです、アヤカさん」
隼人が息を切らしながら、女性、アヤカに反論する。

「え、えっと……そちらの方々は？」

はやてが、恐る恐るカリムに聞く。

「ああ。君が八神はやてか。はじめまして。ライト達の姉貴分で、陸士307部隊の、アヤカ・ガーデン一等陸佐だ。こっちが私の姉の……」

「陸佐307部隊隊長、エリナ・ガーデン少将です」。よろしくね、はやてちゃん」

笑顔ではやてに挨拶する二人。

「機動六課部隊長の、八神はやて二等陸佐です。よろしくお願います、エリナさん、アヤカさん」

三人が挨拶している隣では、カリムが隼人の背中をさすっていた。

「大丈夫？隼人」

心配そうに声をかけるカリム。

「な、なんとか……今回はこれくらいですんでラッキーでした。ホント……」

「でも、その分ライト達が……」

「あいつらなら多分、大丈夫……のような気がしなくてもないようなそつでもないような」

「……ま、まあ、取り敢えず“三人”を信じましょ」

「あいつ」が居たら……まあ、被害はそっちに行きますからね」
隼人は立ち上がって、用意されたテーブルの方に歩きだした。それに続くように、四人もテーブルの席につく。

（骨にひびが入らなかった……奇跡だ）

席についた後、自分の体が無事なことに驚く隼人。どうやらそれほどまでにエリナの怪力は恐ろしいらしい。

（俺もだんだんあいつらみたいにな化け物じみた体になってきたなあ）

《なあ隼人》

隼人がしみじみそんなことを思っていたら、はやてから念話が入った。

《どうした？》

《ライトくんが二人のこと苦手みたいな感じやったけど……あそこまでひどなるか？》

はやては先ほどのことを思い出す。震えながら絶望したように跪いているライトの姿は、少々、いや、かなり異常だった。

《ああ、あの二人は俺とローもだけど、特にライトのことを溺愛してて、抱きしめる力はさっきの十倍強だ》

《ホンマかっ!?!》

《ああ。しかもアヤカさんは、愛するが故にライトに厳しく接するんだが……それでライトは、いくつものトラウマを作ってた》

《どんな接し方やねん……なら、ローブくんの言ってた報告って何？》

《二人は俺達の事を未だに子供扱いしててな……別の部隊や艦隊に移動になった時は、逐一報告するように言われてるんだ》

《……因みにせんかったら？》

《アヤカさんからの鉄拳制裁&エリナさんからの加減なしの包容》

《それって死ねってことかっ！？》

《だからライトはあんな風になってたんだよ》

《ライトくん……御愁傷様》

《ま、雑談もこの辺にして、話に集中するぞ》

《そやね》

それを最後に、隼人とはやては、気持ちを切り替えて、カリムの話に集中することにした。

*

「はあ……これでいいんだよな？」

サラサラになった自分の髪を見て、そう呟くライト。

「前髪邪魔くせえな……後ろで括るか」

そう言って、髪止めで後ろで一つに纏める。

「うし。じゃあ行くか」

*

カリム達の座るテーブルの周りが、カーテンに囲われる。

そして、いくつかのモニターが出現した。

「これガジェット……」

「新型ですか？」

はやてがモニターを見て呟き、隼人がカリムに尋ねる。

「ええ。これまでの？型以外に新しいのが二種類、戦闘性能はまだ不明だけど、これ」

そう言つて、モニターの二つを指差す。

「？型は、割と大型ね」

「かなり固そうな装甲だな」

丸い？型を見て、アヤカが呟く。

「本局への正式報告は？」

さつきまでの間延びした声ではなく、真剣な顔でエリナがカリムに聞く。

「まだです。監査役のクロノ提督には、障りだけお伝えしたけど」

「クロノか。あいつなら、信用できるし、問題ないだろう」

アヤカが、納得したように呟く。

そして、またモニターが変わる。そこに移っていたのは、一つのケ

「スだった。」

「これは……」

「それが、今日の本題。一昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

「レリックですか……」

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも、昨日からだ
し」

「ガジェット達がレリックを見つけるまでの予想時間は？」

「調査では、早ければ今日明日」

「そやけど、おかしいな……」

「ああ……」

はやての呟きに、隼人が頷く。

「どづいつことだ？」

アヤカが不思議そうな顔をして聞く。

「ああ。お二人は捜査に加わってなかったんですね？」

「無論だ」

「え？なら何でここに？」

「「隼人ちゃんに会うため」」

ズデーーンッ

思わずずっとこけるはやて。

「お、おほん。ま、まあ気を取り直して、話の続きですけど……」

隼人がわざとらしく咳払いして、話を戻す。

「せ、せやな……」

はやても起き上がりながら同意する。

「で、何がおかしいんだ？」

アヤカが二人に尋ねる。

「レリックが出てくるんが、ちょお早いような気がするんです」

「予想では、もうちょっと遅いはずなんです」

はやてと隼人が、質問に答える。

「成る程ね。つまり、この子達を今日呼んだのは、そのことについて？」

エリナが納得したようにカリムに聞く。

「はい。これをどう判断して、どう動くべきか……レリック事件も、その後にかかる事件も、対処を失敗するわけにはいかないもの」

「……」

カリムの言葉で、皆沈黙する。

その沈黙を破るように、はやてがモニターを捜査し、カーテンを開けた。

「はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長達や隼人達はもちろん、新人フォワード達も、実戦可能。予想外の緊急事態にもちゃんと対応できる下地ができてる。そやから、大丈夫」

はやてが、自信を持ってカリムにそう言う。

「そうですね。あんまり難しく考えすぎない方がいいですって。ライトだったらきつと、「んな難しく考えんなって。気楽に行こうぜ、気楽に」って言いますよ」

苦笑しながら、隼人が言う。

「……そうね。ありがとう、はやて、隼人」

カリムは、さっきまでの難しい顔ではなく、笑顔で二人にお礼を言った。

エリナとアヤカの二人は、その光景を見て微笑んだ。

*

「……………誰？」

デバイスメンテナンスルームに戻ってきたライトへの第一声は、そんな言葉だった。

「てめえらはさっき会ったばかりの人間の顔を忘れるのか？」

顔を引きつらせてそう言い返す。

「いや……………だって」

「す、す、すい……………」

「綺麗……………」

「……………はあ」

ライトは思わずため息をつく。今のライトは、綺麗なキューティク

ルを放つ髪を、後ろで一つに縛った状態だ。元々女顔ということもあって、どう見ても美人な女性にしか見えなくなっていた。

「な、なんか完璧に負けた気がする……」

「し、シャーリー。しっかりするです」

シャーリーが女として負けていることに絶望し、ラインがそれを慰めていたが、ライトはそれを完全無視。

「兄さんって呼ぶの、少しためらうかも……」

「私も……」

「エリオ、キャロ。頼むから兄と呼んでくれ」

姉と呼ばれるくらいなら死を選ぶ！

心の中で、そう叫ぶ。思い出されるのは、以前自分が今と同じように気まぐれで髪を後ろで縛って現場に行くと、上司に告白されたこと。その他、男連中からの熱い視線、女連中からの嫉妬の視線。正直トラウマものである。

「ライ兄、女の子みたいだね」

ヒュゴアッ

スバルが何気ない一言を放った瞬間、スバルの頬を何かが掠めた。

スバルが恐る恐る頬に手をやると、少し血が出ていた。

「ラ、ライ兄？」

ライトの方を見ると、阿修羅の如く殺気を放つ姿が見えた。

「スバル？次に同じこと言ったら………わかるよな？」

笑顔でそう言うライト。部屋にいる全員が、ガクガクと震えていた。

「い、い、い、ごめんなさい。に、一度と言いません」

半分涙目になりながら、スバルはライトに謝った。それを聞いたライトは、「わかればいいよ」と言って、殺気を引っ込めた。

「い、恐かった……」

「ですう」

「スバルッ！気いつけるっ！」

シャーリーとリインが嵐が過ぎ去ったことに安堵し、ロキがスバルに注意するよう叫ぶ。

「だ、ただだ……」

殺気をもろに受けたスバルは、未だに震えている。

「まあ、さっきのはもうなかったことにしてやるから、リイン、ロキ、シャーリー。あれを」

ライトがそう言うと、三人は頷いて、四つのデバイスを、四人のデスクの前に置いた。

「それがお前らの、新しいデバイスだ」

ライトが、四人にそれが何かを言う。

「うわっ、これが……」

「あたし達の、新デバイス……ですか？」

ティアナとスバルが、感心したように呟く。

「そうですね。設計主任、私とロブさん。協力、なのはさん、フエイトさん、ライトさん、レイジングハートさんとリイン曹長とロキくん」

「ストラーダとケリユケイオンは変化なしかな？」

「うん、そうなのかな？」

「違いまゝすっ！変化なしは外見だけですよ」

「“新”デバイスなんだから、変化あるに決まってるだろ」

エリオとキャロの呟きに、リインとロキが答える。

「シャーリー。クルセイドだけど……」

ライトが、自分のデバイス、クルセイドを持ちながらシャーリーに

近づく。

「はい。ちゃんと機能アップさせときましたよ」

「具体的なこと何も聞いてないんだけど？」

「まあ簡単に言えば、レイジングハートさんの機能を追加させときました」

「えつと確か……シューティングモードにバスターモード、エクシードモードだっけか？」

ライトが思い出せる限りで思い出す。

「はい。ライトのデバイス、クルセイドハーツさんって、その辺の機能があまりないですから、役に立つと思って」

確かに、クルセイドはモードの変化はないに等しい。何故か？アウトフレームの強化や、その他いろいろなことのほうにデータを入れていたので、あまりその辺は考えられていなかった。ローブは、何度もライトにモードの機能をつけるように言ったのだが、ただでさえ忙しいローブに迷惑をかけたくなかったので、断り今に至る。

機動六課に入り、今までと比べ、多少の暇ができたローブは、ライトにクルセイドにモード機能をつけるよう提案。三日前にクルセイドを預け、今に至る。

改良の際、同じ杖であるレイジングハートの機能を借りた次第である。

「そっか。サンキューシャーリー」

ライトはクルセイドを見て、その後シャーリーの方を向き、お礼を言う。

「いえいえ。デバイスいじくるの楽しいですから」

「……お前もローと同じかよ」

うつとりとした顔で話すシャーリーを、呆れたような顔で見る。

「いやあ。シャーリーとは話がかなりあうよ」

「どっから湧いて出た」

「普通に入り口から入ってきた」

いきなり会話にまざってきたローブに、うわあ、というような顔をしながら、ライトが質問すると、普通の答えが返ってきた。

「仕事は終わったのか？」

「あれくらい朝飯前だよ。それより、クルセイドのシステムで、何か問題あった」

「モウマンタイ」

「何故中国語？」

「知ってるのかよ」

ポケに突っ込まれて、逆に突っ込み返すライト。地球の言葉って意外に有名？

「データ見せて貰ったけど、特に問題なかったな。後は、実際に使ってみないと何とも」

「そっか。なら、後で僕と模擬戦する？」

「ああ。そうしてくれ」

ライト達が話している横では、リンがフォワード陣に、このデバイス達が、どのように作られたか、どのように使って欲しいかを語っていた。

「ごめんごめん。お待たせ」

ちょうどそれぞれの話が終わったところで、なのはがメンテナンスルームに入ってきた。

「なのはさん」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから、昨日説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね？」

「はいっ」

リンがなのはの問いに、元気よく頷く。

なのはがシャーリーの横につくと、シャーリーは四つのモニターを現せた。モニターには、それぞれのデバイスが映っている。

シャーリーが、それぞれのデバイスについての説明をしている横で、ライトとローブ、ロキが話し合っていた。

「ベレンスも改良したのか？」

「少しね。取って置きモードを加えておいた」

「フライドにも、モードを付け加えたぜ」

「ふーん。それより、クルセイドのこのブラスターモードって何なの？リミッターかかってて使えないようになってるんだけど…」

「ああ。まあ、それは本当に最後の切り札だからね。そのうち説明するよ」

「あっそっ。ま、エクシードの時点で、俺にとっちゃ充分すぎるけどな」

「ブラスターはその上だ。ライトなら使いこなせるだろうが、体の負担が大きい」

「それでリミッター、ね。まあいいさ。そんな敵、中々いないだろうし」

「だね」

それを最後に、三人もシャーリーの話に耳を傾ける。

「出力リミッターって言うと、なのはさん達にもかかっていますよね」

「あー、私達は、デバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

「えっ」

「リミッターがですか？」

「能力限定って言ってね。うちの隊長と副隊長は、皆だよ。もちろん、ライトくん達も。私とフェイト隊長、ライトくん、ローブくん、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長」

「はやてちゃんと隼人さんもですね」

「うん」

「えーっと」

「うーん？」

「部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模は決まってるって、六課に勧誘された時に話したのを、お前は覚えてないのか？」

「スバルがわからないような唸り声をあげたので、ライトが呆れながら説明する。」

「てかお前。あの時絶対話についてこれなかっただろ？」

「あ、あはは〜」

笑ってごまかすスバル。

「まあまあ。いいじゃん別に。まだスバルには早い話だったってことで」

ローブがライトを宥める。この男、ライト以外には優しいのである。

「まあそうだな。で、さっきの続きだけど、一つの部隊に多くの優秀な魔導師を保有したい場合、そこにうまくおさまるように、魔力の出力リミッターをかけるんだよ」

「まあ裏技っちゃ裏技なんだけどね」

「うちの場合だと、はやて部隊長は4ランクダウンで、隊長達は、だいたい2ランクダウンかな」

「は?」

その言葉を聞いて、ライトが聞き捨てならないというような声を出す。

「ちょっと待て。2ランク?俺、3ランク落とされてるんだけど?」

「隼人に至っては4・5ランクダウンだけどね」

「それは調整のために仕方なかったんだよ」

「……まあ、別にいつか。AAあれば充分だし」

「なのはさんは？」

「私は元々S+だったから、2.5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人で皆の相手をするのは、辛くなってくるかなあ」

「まあ、そのために俺とヴィータがいるわけだが」

「うん。頼りにしてるよ」

「ヴィータだけ頼りにしてくれ」

「へえ……」

スバルが、呆けたように声を出す。

「隊長さん達は、はやてちゃんの。はやてちゃんは、直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないと、リミッター解除はできないですし、許可は滅多なことでは出せないそうです」

「そうだったんですね」

「まあ、隊長達の話は、心の片隅くらいでいいよ。今は皆のデバイスのこと」

「はいっ」

返事を聞くと、シャーリーはモニターのキーを操作し始めた。

「新型も、皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても、違和感はないと思うんだけどね」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整もできますから、手間はそんなにかからないと思いますよ」

「はあ。便利だよね、最近は」

「年寄りみたいだな」

「なっ、私まだ若いもんっ！」

なのはの言葉に、思わず咳いてしまったライトの言葉に、ムキになって反論する。

「ホントか？精神年齢はすでにじじいばの領域なんじゃねえの？」

ニヤニヤしながら、なのはをからかうライト。

「違うもんっ！」

ライトをポカポカ叩きながら、更に反論する。

「ムキになってる所が怪しいとみた」

「だから違っつてば〜」

こうして見ると、とてもではないが、管理局のエースオブエースと、

英雄と名高いクリアストライカーなどと呼ばれているとは思えない。普通の年頃の男女に見えてしまう。

「二人とも仲いいね」

からかうようにローブが二人をちやかす。

「ギターと比べたら、仲はいいぜ。それに年寄りとの接し方は心得ている」

「しつこいよっ!」

今度はグーでライトの頭を殴る。

「痛い……」

頭を抑えて呟く。

「自業自得だよ」

その後、ライトはなのはの機嫌を直すのに四苦八苦した。

「ケーキ3つで手をうつてくれ」

「4つね」

「……………くっ、仕方ない」

結構現金なのはだった。

ブーッ ブーッ

ようやくなのは機嫌が戻り、一安心したライトの耳に、アラートの音が聞こえてきた。

「……………マジかよ」

うんざりしたようにライトが呟く。

「このアラートって……………」

「一級警戒態勢」

「グリフィス君っ!」

なのはが名前を呼ぶと、モニターにグリフィスが映る。

「はいっ!教会本部から出動要請ですっ!」

「なのは隊長!フェイト隊長!ライト隊長!グリフィス君!こちらはやて!」

「……………あつ、俺か」

隊長という言葉に慣れてないライトは、一瞬反応が遅れる。

「状況は?」

車を運転しながら、フェイトがはやてに聞く。

「教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はえいりの山岳丘陵地区」

「対象は山岳リニアレールで移動中だ」

「はあ！？じゃあまさか……」

隼人の言葉を聞き、ライトは何となく嫌な予感がした。

「そのまさかだ。内部に侵入したガジェットの数で、車両の制御が奪われている」

「内部に侵入したガジェットの数は、最低でも30体。大型や飛行型の、未確認タイプもでてるかもしれん」

「……うわぁ。面倒くさそう」

ライトはげんなりしたように呟く。この男にとっては、その程度の出来事なのだ。

「いきなりハードな初出場やけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか？」

「あれ？俺は？」

ライトが声をあげたが、はやてはそれを無視した。

「私はいつでも」

「私も」

「おーい。俺はー？俺の意志はー？せめて聞くだけ聞かないかー？」
さらに声を張り上げたが、どうやら隼人が無視するように言っているらしく、一向に取り合ってくれない。

「……何だろな。この悲しさ」

当然その呟きも無視。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ローブくん。皆もオツケーか？」

「……はいっ」「」「」

「いつでもオツケーだよ」

「何で俺だけっ！？」

その叫びすら、無視されたライトはいじけたが、誰も気にしてくれなかった。いや、エリオとキャロだけは気にしてくれたが、ローブが無視するように言ったので、結局は誰も気にしなかったに等しい。

「シフトはA・03。グリフィス君は隊舎での指揮。リンとロキは現場観戦」

「……はいっ（おっっ）」「」「」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ライトくんは現場指揮」

「何でそういうのだけは言っただよっ！..!」

「ほんなら、機動六課フォワード分隊、出動っ!」

「.....はいつ（おっ）うん（..!」
「.....」

「最後まで無視かコンチキシヨオオツツ!..!」

「ほら、行くよ」

叫ぶライトを、ローブが引きずってヘリポートまで連れていく。

「そんなに俺をいじめて楽しいかアアツツ!..!??」

そんな叫び声が聞こえたが、はやてと隼人は、聞かなかったことにした。

「シャツハ。はやてと隼人を送ってあげて。機動六課の隊舎まで、最速で」

「かしこまりました。騎士カリム」

「聖堂の裏に出て。シャツハが待ってる」

「おおきにな。カリム」

「助かります。じゃあアヤカさん、エリナさん。失礼します」

「おう。ローブとライトによろしくな」

「気を付けてね」

*

ヴァイスの操作するヘリの中に、ライト達はいた。

「ああ、やっぱり納得いかねえ。てか、絶対にアヤカ姉さんとエリナ姉さんの指示に違いない。くっそ。そこまで根に持ってたのか。ま、ずいな早く対策をたてないと……」

「ライトくん。ちゃんと話聞いている」

俯いて、何かぶつぶつ言ってるライトに、なのはが注意する。

「ああ聞いているよ。やっぱり一度は羽毛布団で寝てみたいよな」

「何の話っ!?!?」

なのはは突っ込んだ後、盛大にため息をつき、ライトに話を聞くように念をおしてから話を続けた。

「皆、新デバイスで、ぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「頑張ります」

「エリナとキャロ。それにフリードも、頑張るですよ」

「はいっ」

「頑張りますっ」

「きゅくるっ」

「なあ。俺、つくまで寝てていい?」

ライトの言葉に、全員がずっこける。

「いやライトくん。もうちよっと真面目にできない?」

「そんなことをしたら、俺が俺でなくなる」

「いやいいセリフみたいに言ってるけど、言ってること駄目人間発言だからね?」

「俺は気にしない」

「お願いだから気にして」

「それより隊長。話の続き」

「はあ。もう言っても無駄かなあ」

「今さらだね」

「ローブくんも諦めてるんだ」

「とっくの昔に」

「……話戻すけど、危ない時は、私やフェイト隊長。リンやロキ、ローブくんと、一応ライト隊長がフォローするから。おっかなびっくりじゃなくて、おもいっきりやってみようっ！」

「……はいっ」「」「」

「……うんっ」

フォワード陣の返事を確認した後、頷くのは。

(……………ん?)

その時、ライトは違和感に気付いた。

キャロの様子がおかしいのだ。

(初出勤だから緊張してるのか?にしてはおかしいような……………)

疑問に思いながらも、もしもの時は、自分がフォローにまわればいいと考え、他のメンバーに視線を向ける。

エリオはキャラロを心配して、声をかけていた。

スバルとティアナは、それぞれのデバイスを見つめ、物思いにふけ
っているようだ。

（後の三人は大丈夫っぽいな。キャラロのことは……やっぱり何とかす
べきだよなあ）

そんなことを思いながら、どうしたもんかと悩むライトであった。

第七話 ファースト・アラート 1 (後書き)

え、という訳で、前書きでもあったように、ゲストキャラを募集しています。

リリカルなのはの二次創作のオリキャラ、またはキャラ崩壊した原作キャラ、後、混ぜた作品のキャラクターでもいいです。とにかく募集中です。

出してみたいと思った方は、メッセージにてお伝えください。

予想ではあまり来ないと思うので、すぐにつかわれると思いますよ
(笑)

……………悲しくなってきた(T-T)

ま、まあ。とにかく募集中なので、気軽にメッセージに書いてください。
さーい。

第八話 ファースト・アラート 2 (前書き)

え〜っと、いきなりですいませんが、書き方をかなり変えてみました。

ライト

「本当にいきなりだな」

ついでに展開をかなり早くしてみた結果、こっちの方が書きやすいという結論に至った。

ライト

「なら始めからそうしろよ」

うるせえっ！俺だって予想してなかったんだよっ！！

何となくで書いてみた『大空を舞う黒き侍』で試しにやってみたら、そっちの方がやりやすいってようやくわかったくらいなんだからなっ！！

ライト

「威張るなっ！そして誰もそんな裏話求めてねえよっ！！」

第八話 ファースト・アラート 2

TAKE OFF

ライト

「スルーすんじゃねえっ！！」

第八話 ファースト・アラート 2

side: キャロ

チリン

鈴の音が聞こえた。

そっちに顔を向けると、白い空間に、一つのテントみたいなものがあった。

「アルザスの龍召喚部族、ルシエの末裔、キャロよ」

テントの中から、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

中には、過去の自分がいた。

「わずか六歳にして、白銀の飛龍を従え、黒き火龍の加護をつけた」

自分の腕の中では、フリードが眠っている。

「お前は誠、素晴らしい召喚師よ」

「じゃが、強すぎる力は、災いと争いしか生まれぬ」

フリードを見ていた“私”が、顔をあげた。

「すまぬな。お前をこれ以上、この里におくわけにはいかんのじゃ」

申し訳なさそうに、そう告げられる。

龍召喚は危険な力。

私は、自分の両手を見る。

人を傷つける、恐い力。

私の手に、赤い血が……

I s i d e : 了

s i d e : ライト

俺は自分の手を見つめて、震えているキャロを見ながら、さっきからずっとどうしようか考えていた。

てか、こういうのはやっぱりなのはに任せるべきか？

なのはも気付いているようで、さっきからちらちらとキャロの様子を伺っている。

ロープも気にしているようだが、俺となのはに任せた方がいいと判断したのか、何かしようという気配はない。

だああああっっ!!

面倒くせえっ!

何で俺、こんなに必死に考えてんだろ？
キャラが大切な仲間だから？

自分を兄と慕ってくれるから？

それとも……

いや、やめよう。

もし、そんな考えからキャラを心配してるんだったら、俺は……

最低な奴だ。

l s i d e : 了

s i d e : ロングアーチ

「問題の貨物車両、速度七十を維持。以前、進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

「時間の問題か……」

ロングアーチのスタッフ達が、リニアレールを走る貨物車両を映したモニターを前に、キーを操作しながら、報告しあっている。

ブーッ　ブーッ

いきなり、アラートが鳴った。

「アルト、ルキノ。広域スキャン。サーチャー空へ」

シャーリーが、自分の両隣のルキノとアルトに指示を出す。

空に映像を移し替えると、大量のガジェットが、空を飛びながら、貨物車両に向かっていった。

「ガジェット反応、空からっ！？」

「航空型、現地観測隊を補則っ！」

それぞれ、わかったことを報告しあう。

その連携は、部隊ができて初めての出勤とは思えないくらい、統率された動きだった。

「side:了」

side:ライト

フェイトがパーキングに着き、グリフィスから飛行許可をもらい、すぐに現場に向かうという報告が入った。

「ヴァイス君、私もでるよ。フェイト隊長と二人で、空を抑える」

「うっす、なのはさん。お願いします」

なのはにヴァイスが返事をした後、ストームレイダーを操作して、後方ハッチを開ける。

「じゃあ、ちょっと出てくるけど、皆も頑張つて、ズバツとやっつけちゃおう」

「「「はいっ！」「」」

「は、はいっ！」

キャラの返事が遅れた。やっぱりどうにかしたほづがいか？よう

し、ここは気楽なムードを作って安心させるか。

「頑張れ〜。俺はここで昼寝するから」

椅子に寝転びながら、なのはにエールを送る。

「ライトくん。そろそろ怒っていい？」

「冗談だつて。新人達は任せとー」

「エンカウント！反対側の空域からも、ガジェット反応っ！」

「うそーん」

なのはに、新人達は任せろという旨を伝えようとした途端、シャーリーから最悪の報告が入った。

普通に考えて、そっちは俺とローの担当になる。

つまり新人達のフォローは、そっちを片付けてからでないといけない。

「……………」

やべえ。キャラの顔色さらに悪くなった。

こつなりややけだ。

俺はローに目線を送り、ローはそれに頷き返した。

「あゝ、やっぱり面倒くさいからお前一人でやってきてくんない?」

「駄目に決まってるじゃん。それに、そんなことを言っていると、デバイス取り上げて、そこから地上に落とすよ?」

「死ぬわっ!」

「いやいや、ライトならきつと生き残って、死ぬかと思った、ってぼやきながら、仕事サボれたことを喜ぶに違いない」

「どんな人間だよそれっ!後、仕事サボれてよかったとは確実に思う」

「あつたてるじゃんっ!」

「いやだつてさあ」

「ようし。今からジャーマンスープレックスを君に……」

「やめいっ!」

ドロップキックをローにかますが、マトリックスでそれをよけられ、そのまま腰に腕をまわされ、ジャーマンスープレックスを決められた。

「殺す気かっ!」

「先に仕掛けてきたのは君じゃんっ!」

「はいはい。そこまですてね。今、任務中ってこと忘れてない?」

俺とローが、取っ組み合いを始めたところで、なのはが止める。

「いやだつてさあ〜」

俺はなのはに言葉を発しながら、スバルとティアナを見る。

二人は不思議そうな顔をしていたが、俺が視線を一瞬、キャロの方を向かせたら、理解したように頷く。

「ライ兄。いくらなんでも駄目だよ。任務中にふざけるなんて」

「いやそれだつたらローだつて……」

「先に仕掛けたのはライトさんですよね？」

「いやだけど……」

「「ライ兄ライ？」」

「……ごめんなさい（・）（・）」

へこみながら謝る俺を、皆笑いながら見ていた。もちろんキャロも。

やっぱりこういう時に、一番リラックスできるのは、“いつも通り”の光景を見ること、だよな。

てか、今さらだけど、俺って一応フォワード陣より立場上だよな？

……悲しくなってきた。

「くっそお。この憂さ晴らしはガジェットでやってやる」

「滅茶苦茶不謹慎な動機だけど、やる気はでたみたいだね」

「ああ。こうなりや自分の分さっさと片付けて、フォワード陣の分も憂さ晴らしに使ってやる」

「その頃には終わらせてるよ」

スバルが自信満々にそう言う。他のフォワード陣も、やる気に満ち溢れている。

よし。何か悲しい思いをしたが、一応作戦成功。

俺はフォワード陣には見えないように、ローとなのはに親指を立てる。

ローとなのはは、それを見て笑いながら返してくれた。

「んじゃ、皆やる気も出てきたところで、早速行ってくらめ」

俺がそう言うと、キャラがまた少し不安そうな顔をする。やっぱりあんなもんは一時的でしかないか。

「キャラ」

俺がもう一回漫才でもやるつかと思った時、なのはがキャラの名前を呼んだ。

ここはなのはに任せるか。

なのはがキャラコのほうに歩きながら話しかける。

「大丈夫だよ、そんなに緊張しなくても」

キャラコの前まで来ると、自分の両手を、キャラコの両頬に添える。

「離れてても、通信で繋がってる。一人じゃないから。ピンチの時は助け合えるし、キャラコの魔法は、皆を守ってあげられる、優しく強い力なんだから、ね？」

なのはの話を聞くかぎり、キャラコはどうかやら自分の力が恐いらしい。

……その気持ち痛い程わかる俺は、一瞬だけ顔を険しくした。

思い出すのは過去の記憶。力をうまく使えなくて、大切な人を傷つけた記憶。

忘れてはならない。その傷を糧に、俺は強くなりたいと思ったんだから……

キャラコにも、そんな過去があっただろうか？

……やめだ。今はんな事考えてる時じゃねえな。

キャラコは今度こそ大丈夫みたいだし、今は自分の役割に集中しよう。

……あつ、そうだ。

俺は、制服のポケットを漁り、あるものを取り出した。

「キャラ、アメいるか？」

何故か入っているアメを、キャラに見せながら聞く。

「あつ、はい。いただきます」

「ほれ」

アメをキャラに向かって投げ、それを両手で受け取るキャラ。

「エリオもいるか？」

「あつ、うん」

頷いたので、エリオにも投げる。

「リインも欲しいのです」

「お前の大きさだと、戦ってる時に持つのは無理だから駄目」

「え〜〜〜っ」

だだをこねる子供のような声をあげるリイン。

「任務が終わったら、ご褒美にあげるよ。しかも二つ」

「ホントですかっ!?!?」

目を輝かせるリイン。ホント可愛いな、こいつ。

その隣では、ロキが物欲しそうな顔をしていた。何だかんだで、こいつもガキだよな。

「ロキにもやるから、んな顔すんな」

そう言うと、ロキは目を輝かせた後、滅茶苦茶やる気をだしながら、「さっさと終わらせるぞこんな任務っ！！」と叫んだ。皆現金だな、ホント。

「じゃあ、行ってくるよ」

そう言うのはは、まだバリアジャケットを着ていない。

まさか……

俺がそう思った時、なのはは飛び降りた。

慌てて下を見ると、落ちながらレイジングハートをセットアップさせて、飛んでいくなのはの姿があった。

何で飛び降りながら？後、何でスバルとティアナは目を輝かせてるの？絶対真似する気だよねあれ。

「兄貴、ロープさん。降下ポイントにたどり着きましたっ！」

ヴァイスめ、余計なことをっ！後ろからめっちゃ期待の眼差しが飛んでくるじゃねえかよファックッ！！

「ほらライト。早く行くよ」

「あ、ああ。けどその前にここでセットアップ……」

「飛び降りながらすればいいじゃん」

「実は高所恐怖症で……」

「空戦魔導師のセリフじゃないよね、それ」

「まあ冗談はおいといて、俺は飛び降りながらセットアップなんて絶対に……」

「あゝもうじつじつ……!」

俺が尚も反論しようとしたら、あることがローは俺を蹴りおとしやがったっ!!

「って何しやがるっ!!!」
「っ!!!……?」

俺は落ちながら、そう叫んだ。

よし。この任務終わったら、ローをばいばいとしよう。

Inside...了

ああ、絶対さっきのアメの影響だろうなあ。

リン達の動機に、思わず苦笑する。

「ストライカー02、ローブ・ランゼル。行きますっ！」

最後にもう一度だけフォワード陣の方を見た後、僕もヘリから降りた。

I s i d e : : 了

s i d e : : ライト

風圧があっ！風圧があっ！

落ちながら、ずっとそんなことを叫んでいる。

正確には、風圧のせいで叫べないのだが。

あんな高度から落とされたら、まあこうなるわな。

てか、早くセッティングしないとマジで死ぬっ！！

「クルセイドハーツ、セットアップッ!」

「Stand by ready」

そう叫ぶと、一瞬だけ俺の周りが、蒼い光に包まれ、その光が消えると、俺はバリアジャケットを身につけていた。

「……………何これ？」

思わずそう呟く。

何故？

それは俺のバリアジャケットが原因だ。

俺のバリアジャケットは、騎士をイメージした、全身が黒いジャケットだったのだ。

だが、今のバリアジャケットは、なのはの白を主張したバリアジャケットを、そのまま男バージョンにしたようなものになっていたので。

何故？ホワッツ？

《やあ。新しいバリアジャケットに身を包んだ気分はどうだい？》

ローからの念話。上を見ると、いつもと違うバリアジャケットを着ているローブがいた。

《……………これはどういうことか、説明しやがれコノヤロー》

《取り敢えず、移動しながら説明するよ》

そう言つて、ロープはヘリの十倍以上の速度で、ガジェットの群れが
いるほうに飛んでいく。

俺もその後に行く。

《で？どういふことだこれは？》

《いやあ。せつかく改良するんだし、どうせだったらバリアジャケ
ットもいじつてみようと思つてね。ライトのはなのはのを、僕は
フェイトのを参考に作つたんだよ》

《いやいじるどころか丸々変わつてるからっ！！面影一切無くなつ
てるからっ！！後、参考つつか丸々パクつてるだろこのデザイン
ッ！！》

《気にしな〜い、気にしな〜い》

《気にしろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ッッ！！！！》

俺のシャウトを、ロープは華麗に無視し、ガジェットの群れに突っ
込んだ。

だあもつっ！突っ込むのすげえ疲れるっ！

何これ？新手的のいじめ？

……もう何かどうでもいいや。今はあのガジェット達を使って、憂さ晴らし出来ればね。

「ストライカー01、ライト・エリシオン。行ってくるわっ！」

俺はコールサインを叫んだ後、フッフッフ、と笑いながらガジェットの群れに突っ込んだ。

l s i d e : 了

s i d e : スバル

うわあ。やっぱり飛び降りながらセットアップするのってカッコいいなあ。

私はなのはさんとライ兄、ロー兄が飛び降りながらセットアップし、飛んでいくのを見ながらそう思った。てか、皆速すぎ……

私は三人が飛んでいったのを見送った後、他の皆と一緒に、リイン曹長の話に集中する。

「任務は2つ。ガジェットを、逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること。ですから、スターズ分隊と

ライトニング分隊、二人ずつのコンビで、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです。レリックはここ、七両目の重要貨物室。先に到達したほうが、レリックを確保するですよ」

「……はいっ」「」「」

リン曹長の説明を受けて、頷く私達。正直、私の脳のキャパはすでに限界だ。説明長いです、リン曹長。

私はそんなことを思いながら、リン曹長の隣でやる気を出しているロキを見た。

ロキが戦うところって見たことないけど、戦えるのかな？

もうかなりの付き合いになるけど、一緒に遊ぶか雑談する以外のロキの姿が思い出せない。

私って結構酷い子？

目の前では、リン曹長とロキが、それぞれ制服からバリアジャケットに着替えたところだった。二人のバリアジャケットって似てるなあ。お揃い？

「私も現場に降りて、管制を担当するです」

リン曹長の説明も終わって、後は現場に行って、今言われたことをやるだけ。

頑張らなきゃ。なのはさんやライ兄の、誇れるような生徒になるためにもっ！

「side:了」

side:ライト

「ロー。まずは俺が砲撃放つから、その後突っこめっ！」

「了解っ！」

俺の指示に従い、一旦速度を落とすロー。普段からそんな風に行くこと聞いてくれたらなあ。

俺はそんなことを思いながら、クルセイドの先端に、魔力を集中させる。

ガジェット達との距離はまだ少しある。もう少し近づかないとな。

俺は速度をあげた。

ガジェットのレーザーの射程に入ったのか、ガジェットがレーザーを放ってくる。俺はそれを上下に体を動かしながら軽くよけ、ガジェットの群れにクルセイドを向ける。

「ストライクバスターッ!!」

ドガガアアアンツ！！

蒼い閃光が、ガジェット達を飲み込む。

今ので十体はやれたな。

俺の横を、ローが視認できるかどうかというくらいの速さで突っ込む。

相変わらずでたらめな奴だな。

ガジェット達がローにレーザーを放つが、遅すぎだ。

あいつは一直線に進んでるだけなのに、それだけで全てのレーザーを避け、群れの中心まで行き、バツバツとガジェット達を切り裂く。

俺もドライブシューターでガジェットを撃ち落としながら、ロングアーチの情報に耳を傾けた。

いよいよスバル達が戦うのか。

俺がそんなことを思っていると、後ろからガジェットにレーザーで狙われた。

俺はそれを横に一步移動して避けた後、そのガジェットをドライブシューターで撃ち抜いた。

いかな。今は、自分の戦いに集中しないと。

正直、この程度の相手なら、よそ見しながらでも殲滅できるが、世の中何が起こるか分からないからな。用心するに越したことはない。まあ、取り敢えずこれ全部片付けるか。

俺は、向かってくるガジェットを片っ端から破壊しながらそう思った。

l s i d e : : 了

s i d e : : l l l

「さあて新人ども。隊長さん達が空を抑えてくれるおかげで、全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいかあっ！」

ヴァイスが、フォワード達4人にそう聞く。

「はいっ！」

それにスバルとティアナが答える。

「スターズ03、スバル・ナカジマッ」

「スターズ04、ティアナ・ランスター」

「「行きますっ!!!」」

そう言つて、二人同時に飛び降りる。

「行くよ、マツハキャリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップっ!!!」」

「「Stand by ready.」」

それぞれ、自分のデバイスの名を呼んだ後、セットアップした。

「次っ、ライティングッ！チビども、気いつけてなっ！」

「「はいっ!!!」」

エリオは、隣で不安そうに下を見ているキャラ口に気付いた。

「一緒に降りようか？」

「えっ？」

微笑みながらエリオが言つと、キャラ口は驚いたようにエリオのほうを向いた。

エリオが手を差し出す。キャラ口はその手を少しの間見た後、笑顔で

頷いて、その手を取った。

「ライトニング03、エリオ・モンディアルッ！」

「ライトニング04、キャロル・ルシエとフリードリヒッ！」

「きゅくる〜」

「「行きますっ！」」

手を繋いで、同時に降りる二人。

「ストラータッ！」

「ケリユケイオンッ！」

「「セットアップッ！」」

「「Stand by ready。」」

光に包まれ、バリアジャケットに身を包む。

フォワード四名は、そのまま無事に車両の上に着地成功。

「あれ？ねえ、このジャケットって……」

スバルが、自分のジャケットが変わっていることに気付き、驚いたように声をあげる。驚いているのは他の皆も同じで、自分のバリアジャケットを見ていた。

「デザインと性能は、各隊長さんのを参考にしてるですよ。ちょっとくせはありますが、高性能です」

「うわぁ」

リンの説明を聞き、感激の声をもらすスバル。

「……はっ。スバルッ！感激は後っ！！」

ドガアッ

ティアナが任務中であることを思い出し、スバルに叱責した直後、スバル達の足元が、でこぼこになった。中のガジェットがスバル達に気付き、攻撃を仕掛けてきたのだ。

レーザーが屋根をつきやぶって、スバル達に襲いかかるが、スバル達はそれをよけ、反撃する。

「Drive Ignition」

彼女達の、機動六課フォワードとしての、初めての戦いが始まった。

Inside:了

side:ライト

「あーもうつげえ……」

壊しても壊しても次から次へと……

なのは達のほうちらっと見たけど、もっと少なかったぞ？こっちの三分の一くらいだったぞ？

はずれくじ引いたなこりゃ〜。

ガジェットの残りの数は、ざっとみ百くらい。結構減ったけど、まだまだなあ。

「うん。あれ使って一気に終わらせるか。クルセイド」

「All Right・Strik Buster」

俺は青い閃光をガジェットに放ち、ローと一旦合流する。

「どつしたの？」

ガジェットを三体くらい一気に斬りながら、ローが聞いてくる。

「面倒くさくなったから、一気に決めたい」

俺がそう言うと、ローは呆れたような顔になった。

「面倒って……今に始まったことじゃないけど、君、その力は秘密にするつもりだったんじゃないの？」

「もういいやあ。信用できるかどうか判定するまで使う気なかったけど、あいつらなら信用できるだろ？」

「……ま、そうだね。わかった。じゃあ早速使つてよ」

「うー、了解。クルセイド、演算の用意だけしとけ」

「了解」

その言葉に頷いた後、俺は魔法陣を展開した。

「M a g n e t V i n d」

俺の周りに、百にも及ぶ青いわっかのバインドがあらわれる。

さて、と。こっからだな。

俺は右手で両目を覆い、唱えた。

「………開け、全てを見通す力よ」

そして、目を開ける。

「……座標指定開始……演算開始……数確認……吸着力指定……引力最大……」

俺はクルセイドと一緒に、この魔法を発動するのに必要なことをや

る。

マグネットバインド。いくつものわっか状のバインドを放ち、捕まえものだけを指定した座標に引き寄せる魔法。

しかし今回は数が多い。なので使うことにした。俺の稀少技能レアスキルを……

これ使ったら、はやてとかに口うるさく質問されんだろなあ……

面倒くせえ。

そう思った後、バインドを全て放った。

I s i d e : 了

s i d e : はやて

私と隼人は、ようやく戻って来た隊舎で、フォワードや隊長陣の戦いをモニターで見っていた。

「……ライトくんらの方、数多いなあ」

なのはちゃんらの方と比べて、三倍近くの数のガジェットを相手に

しているライトさんとローブくんの方を見て、そう呟く。

「応援に行った方がいいかな？」

私は隣で同じく状況を見ている隼人に聞いてみた。隼人なら、私らよりも二人については詳しいやろうし、ここは隼人の判断に任せよう。

「問題ねえだろ。多分すぐに終わるだろうしな」

私を始め、その言葉にロングアーチスタッフは驚きを隠せなかった。問題ないだけならまだわかる。リミッターをつけてるとはいえ、二人ともなのはちゃんお墨付きの強さやからな。

でも、すぐに終わらせるってのはおかしなかい？

いくら何でもあの数は……

「え？何あれ……」

私がそんなことを考えていると、シャーリーの呟きが聞こえた。

「どないしたんや？」

気になったので聞いてみた。するとシャーリーは、黙ってモニターに向けて指をさした。

私はその方を見て驚いた。

ライトくんの周りに、百近くのわっかみたいなものが浮かんでいた。

あれは……バインド？

ガジェット戦で何で？

そう思っていると、ライトくんがそのバインドみたいなものを一気に放った。

その瞬間、今度こそ私達全員（隼人除く）は開いた口が閉じられなかった。

何故なら、ライトくんが放った百近くのバインドが、一つ残らずガジェット達を捕えることに成功したからや。

ありえへんっ！動き回る百近くの高速機体を一瞬で捕まえるなんてっ！！

演算処理も、一人の人間が行う限界値を軽く超えとる……

もしかして、あれがライトくんの稀少技能か？

そう思いながらモニターを見てみると、更に驚愕の光景を見た。

バインドに捕まったガジェット達が、一ヶ所に集まったのだ。

まるで、何かに吸い寄せられるかのよう……

嘘やろ？

何やあの規格外の力……

集まったガジェットは、ローブの一閃で、粉々に砕け散った。

「……もうホンマにありえへん」

私は頭を抱えた。

こりゃ戻ってきたら少し取り調べが必要やな。

I s i d e : : 了

s i d e : : ライト

「……………こ、これがフリードなのか？」

俺は目の前で、エリオとキャロを乗せたでかい竜を見てそう呟く。

そついや竜召喚って、こんなことも出来たっけなあ。

ただ、普段のフリードを知ってる分、驚きが大きいって感じか。

「ねえライトくん。さっきの力って何なの？」

なのはが隣まで来て、そう聞いてくる。

マグネットバインドのことか？それとも、やっぱり“眼”を見られたか？

「後で話すよ。どうせはやてに聞かれるのは、間違いないしな……」

俺は自分でそう言った後、うんざりな気持ちになった。

はあ……めんどくせえ。

「だったらやらなきゃよかったじゃん」

「るせー。てか、久々に使ったから疲れた。もー俺帰って寝るわ」

「駄目だよ。事後処理が残ってるんだからさ」

「ローよ。俺の分も任せた」

「切り刻んでいい？」

「超すいませんでした」

くそっ！マジでめんどくせえ。

「ライトさん〜。終わりましたのでアメくださいなのです〜」

リン……お前はもうちよい現場管製の自覚持て。

そう思いながら、一応アメを二つあげる。

「俺にもよこせっ!」

「はいはい」

ロキも来たのであげようとポケットに手を突っ込む。

……………あれ?

「悪い。アメ、リンにあげたので最後だったわ」

「っ!?!」

うわっ!すごい落ち込みっぷり……………

こりゃ相当楽しみにしてたんだろっなあ……………

こいつ、「俺の作ったアメ」大好きだしな。

あ、一応言っておくが、あのアメは俺の作ったもので、ロキのために任務の時とかには、ご褒美のためによく持ち歩いている。

てかマズった。今回はエリオやキャロにもあげたからなあ。

さてどうするか?

「あ、だったらリンの二つあげるです〜」

ナイスリンッ!!

「ホントかつ!？」

「はいです〜」

そう言って、リインはロキにアメをあげる。ロキはそれを貰って喜んでる。

和むなあ。

この後はやてからの取り調べがあるってのがわかってなかったらもつと和むんだけどなあ。

俺はそう思った後、ロングアーチに通信を入れた。

「ロングアーチ。こちらストライカー01。はやてはいるか？」

『ライトくんか。ちょうど私も聞きたいことがあってんだけど』

「分かってるよ。帰ったら話す。ただ、その前に一つ言っておきたいことがあってな」

『何?』

「俺の稀少技能レアスキルは、絶対に、どんなことがあっても、誰にも話さないと誓えるか？」

『……わかった』

「言っておくけど、これはお前達のためだからな」

『どっぴりっぴり』

「それは今は話せない。時期が来たら何れ話す。それじゃ
それを最後に通信を切る。」

さて、めんどくせえことになったけど、しょうがねえよな。

そついう運命なんだから、俺は。

はあ。

ホント、めんどくせえな。

そう思った後、俺は現場処理を手伝うことにした。

I s i d e : : 了

s i d e : : i i i

「くくくっ！素晴らしい。全く以て素晴らしいよ」

白衣を身に纏った、紫の髪の男が、モニターを見ながら不気味な笑

い声をあげていた。

「私の研究材料として、興味深い素材が揃っている上に……」
モニターの映像に、三人の男女が映る。

「この子達を……生きて動いているプロジェクトFの残資を、手に入れるチャンスであるのだから……くくくくつ」

「相変わらず不気味だねえ、君は」

男が不気味な笑い声をあげると、後ろから声をかけられた。声をかけた男の見た目は、三十半ばで綺麗な黒い髪を腰まで伸ばし、鋭い赤い瞳は、野望に満ちていた。

「ふむ、プロジェクトFか……確かに興味深いことではあるが、それよりも私としては、あちらの方の映像が見たいんだが？ ジェイルよ」

「くくくつ。わかってるさ、グレン」

そう言って、映し出されたモニターには、ライトが映されていた。

「君の追い求めていた存在なんだろう？ 彼は」

「はははっ。違うさ。彼はただの入れ物だ。まあ、素晴らしい存在ではあるがね」

「くくくつ。そうかね。まあ、私としてはどうでもいいことだが」

「ああ。私も君のことなどどうでもいい。我々はあくまで一時的な協定を結んだまでの関係。決して仲間ではない。そのことを忘れるなよ」

「それは君もだよ」

「わかっている。では、私はレイン達の様子を見に行く」

「ああ。わかったよ」

グレンが去った後、ジェイルは再びモニターに映るライトの姿を見る。

「時空を越えた眼を受け継ぎしもの……確かに興味深いが、私には必要ないな」

そう呟いた後、またモニターを変える。そこには、先ほどの三人が映っていた。

「プロジェクトF……くくくつ。やはり素晴らしい」

そこに映っているのは、フェイト・テストロッサ・ハラウン、エリオ・モンディアル、そして……

ローブ・ランゼルの姿が映っていた。

第九話 隊長陣との闘い（前書き）

2話連続投稿）。

ライト

「いや前の話で発表しろよそれっ！！」

うるさいうるさい。

あ、後書きの欄には一応ゲスト呼んどいたから。

ライト

「は？まだ誰も来てないだろ？」

忘れたかつ！もしもの時のことをっ！！

ライト

「……ああ。そっぴやそっぴやだっとな」

それでは第九話

ライト

「隊長陣との闘い」

作&ラ

「TAKE OFFっ！！」

第九話 隊長陣との闘い

side:ライト

六課の初めての出勤が終わり、戻って来た途端に俺ははやてに首根っこを掴まれて、そのまま連行されてしまった。

あゝ、めんどくせえ。

今いる部屋にいるのは、はやて、なのは、フェイト、ヴォルケンリッターの四人、フォワード四人、シャーリー、グリフィス、ヴァイス、アルト、ルキノ、隼人にローブと、六課を代表する面々が揃っていた。

あゝ。そこまで異常なことだったか？さっきの？

「取り敢えず、まずは君の稀少技能レアスキルを話してもらおうかあ」

はやてが超ドストレートに聞いてくる。

まあ別にいいけどな。

俺は、一応ローブと隼人を見ると、二人は黙って頷いた。

「ん〜。まあ、まずは見てもらおうかな。話はそれからだ」

そう言って、俺は両目を右手で覆う。

「何を……」

「全員、俺の瞳をよく見ておけ」

はやての言葉を遮り、俺は全員にそう言う。そして、唱えた。

「開け、全てを見通す力よ」

そして、右手をどけ、両目を開いた。

『っ！?』

瞬間、全員（ローと隼人除く）が息をのんだ。

「ラ、ライトくん……その眼」

あー、なのは。言いたいことはわかるよ。だって皆同じような反応するもん。

今、俺の瞳には朱の五芒星が浮かんでいて、俺から見た世界が、数字に埋め尽くされている。

「これが俺の稀少技能レアスキル……複製眼だアルファ・ステイグマ」

「アルファ……」

「……ステイグマ?」

フェイトとなのはがそう呟く。

「……どんな能力なん？」

一番始めに冷静さを取り戻したはやてが聞いてくる。さすがは部隊長ってところか。

「……取り敢えずは、相手の能力の複写^{コピー}ってことにしてある」

「……どういうこと？」

「俺は見ただけで、その魔法が使えるようになるんだよ」

『っ！…！』

また全員が驚く。一々驚かれたらめんどういんだけどなあ。まあいいか。

「“取り敢えず”や“してある”ってのは？」

おお。すげえぜはやて。一瞬で冷静さを取り戻しやがった。

「俺の能力ってさ、最高評議会の連中から秘密にされるように言われてるんだよ」

『っ！…！…！』

今度は流石のはやても絶句していた。

取り敢えず誰かが声を発するまで待つてみる。

「……ライトくんは、最高評議会の方とどういう関係なん？」

やっぱりはやてが一番早くに冷静さを取り戻したか。

「……それ話したら、多分お前ら消されちゃうよ？」

それを聞いた途端、フォワード四人は顔を青くした。

「……機密事項、か」

「そゆこと。しかも最深部クラスのな。はっきり言って、お前らが知っていいことじゃないよ。あ、因みにローと隼人にも話してないから」

今度は全員がローと隼人を見る。二人は無言で頷いた。

「じゃあ、ライトくんの本当の力はなんなん？」

本当にはやては凄いな。全く以て感心するぜ。

「この瞳はな、魔法の構築式を見ることが出来るんだよ」

「構築式を？」

「そう。構築式を見ることが出来るから、魔法を見ただけで使えるようになる」

「……規格外の力やな、ホンマ」

もう呆れることしか出来ない様子のはやて。他の皆も同じ感じだ。

「まあ、俺の能力については一応ここまで。他に何かあるか？」

「あのガジェットを大量に捕まえた魔法は？」

「マグネットバインド。捕まえた対象を指定した座標に磁石のように引力で引き寄せることが出来る魔法だ」

「あの数のガジェットを捕まえたんは、その眼のおかげ？」

「ああ。この眼はそういう面でも役立つからな」

「……………ライトくん。一つお願いしていいか？」

「やだ」

「即答っ!?!」

「だってめんどくせえことだろ? だったらやだよ」

そう言って部屋から出ようとする。

これ以上の面倒はごめんだ。只でさえ、俺の能力をばらすなんて危険犯してるのに……………評議会の連中に許されてる範囲ギリギリだぞ全く。

『待てライト』

背筋が凍り付いた。

背後から、今最も聞きたくない人物の声が聞こえたからだ。

無視して部屋を出よう。

『待て、と言ったはずだが?』

訂正。コンマ一秒で振り返る。

そこには、モニターに写ったそれはそれは大層美人な、普通の男が見たら一目惚れするのは間違いないといっても過言ではない女性が、こちらの方を片方は笑顔で、もう片方は睨むようにこちらを見ていた。

最悪だ。

『久しぶりなのに、挨拶もできんのかお前は』

「……いや、いきなりすぎるだろ、アヤカ姉さん」

『いや何。はやて二佐から、お前を説得するように頼まれていてな。話は全て聞いていたぞ』

「いつの間に知り合った?」

『今日だ』

ああ、聖王教会でか。

「てかやだよ。俺もう疲れたから……」もし聞いてやったら、報告しなかった件は許してやるっ『……マジで?』

『大マジだ』

「はやて。話は？」

「すごい手のひら返しやな」

うるせえっ！こっちは命がかかってるんだっ！手段なんか選んでられるかっ！

取り敢えず、はやてから説明を受ける前に、状況がわかってない面々に、俺達と姉さん達の関係話を話しておく。滅茶苦茶同情されたが気にしない。面倒だからな。

「で、頼みごとってのは何だ？」

「明日、隊長陣と模擬戦してくれへん？君のその力を詳しく知りた
いねんけど」

うわ。めんどくせえ。まあ姉さん達の制裁に比べれば一億倍マシ
だけど。

「いぜ別に。で、誰とやるんだ？」

「四人全員」

……オーケー。聞き間違えに違いない。

もう一度聞こう。

「誰とやるんだ？」

「四人全員」

「……………ふっ」

「ふ？」

「ふざけんなああああああっ！！勝てるわけねえだろっ
っ！！！」

「だってアヤカさんがそうしろって」

「アヤカ姉さんわかってるだろっ！？この力は万能なわけじゃない
っっっ！！！」

そうだ。複写眼は万能なんかじゃない。使えば頭に物凄い量の情報が
一気に頭の中に入ってくるので、使いすぎれば廃人になってしま
う。まあ、その訓練はもうやり終えたから、今は数時間は使うこと
が出来るけど。他にも欠点なんていくらかでもある。

『しかし、一対一ではお前が必ず勝つだろっ？』

アヤカ姉さんのその一言に、四人が過剰に反応する。特にシグナム
が。

「そりゃまあ……………負ける気は全くしねえけど……………」

正直に答えたら、何か殺気を感じた。こりゃ明日は大変なことにな
りそうだ。

『いざとなれば、奥の手を使えばいい』

「あれは味方に使う魔法じゃないだろうが……」

「ライト……明日は覚悟しておけ」

「ぎったんぎたんにしてやるよ」

「絶対に後悔させてあげるよ」

「手加減しないからね」

四対一はもう決定事項なんだ。

はあ……もうホントに最悪だよ。

何かフォワード陣やロングアーチスタッフが慰めてくれるけど、今は頭に入ってこない。

取り敢えず、ニヤニヤしていた隼人とローの二人には、ドロップキックをかましておいた。

明日はが憂鬱だ。

「どんまいや、ライトくん」

「お前のせいだよっ！ー！ー」

*

翌日、訓練場には、昨日の面々が揃っていた。

目の前には、既にバリアジャケットを着ている四人。

こりゃ始めから全力でいかないとまずいな。

「それでは、模擬戦、始めっ！！」

俺は取り敢えず距離を取ることにする。

なのはの砲撃は厄介だが、向こうは近接タイプが三人。接近戦はあり得ないからな。

すると、シグナムが一気に距離を詰めてきた。

「Protection」

シグナムの剣を、プロテクションで受けとめる。

「どうした？複写眼は使わないのか？」

シグナムが挑発するように言う。

「そつちこそ、せつかくの団体戦なのに、一人で突っ込んでいいのか？」

まあ、実際は後ろからヴィータ、上からフェイト、左右からはなのは誘導操作弾がきてるんだけど。

じゃあない。使うか。

「開け、全てを見通す力よ」

「はあああああああああああああつっ!!!!」

ドガアアアアアアアアアアアアアンツッ!!!

ヴィータ、フェイト、なのはの三人の攻撃を受けた俺。

だけど、俺のバリアジャケットには傷どころか埃一つついていない。

「」

四人はその事実には驚愕していた。

「いくら四人だからって、手加減してるとそっちがやられるぞ」

一応そう四人に忠告する。今の攻撃は、あまりにも酷かった。コンプレッションが酷いのではなく、攻撃力が全くなかったのだ。要するに手を抜きすぎ。まあそれでも、普通はあれで決まるだろうけどな。

俺の言葉を聞いた四人は、気を引き締めたのか、さっきとは比べものにならないスピードで俺の周りを飛ぶ。

余計なこと言った俺。

取り敢えず誘導操作弾を生成し、なのはの誘導操作弾を撃ち落としておく。それと同時に場所をこまめに変えながら、シグナム達三人からの同時の襲撃をさせないようにする。

なのははその場に止まって誘導操作弾を操り、フェイト達にとって有利な位置に誘いだそうとするが、俺はそれを動きながら全て防いでいるので意味はない。

まあだからといって他の三人が黙ってるわけでもない。

シグナムは連結刃で俺を取り囲むように刃を操作し、その隙にフェイトとヴィータがこっちに突っ込んできて、慌ててその場から離れる。

そしてその先には、砲撃を撃とうとしているなのは。

「デイベイーン……」

「チツ……」

俺は右手をなのはの方に向けた。そして、複写眼でなのはの放とうとしての魔法の構築を解析した。

「バスタアアアアアアアアアアアアツッ!!」

桃色の閃光が俺に迫り、四人は勝利を確信した顔になった。

「悪いな………アンチ反魔」

俺は、右手から魔法陣を発生させる。

そして、その魔法陣とディバインバスターがぶつかった途端、ディバインバスターが消えた。

「……っ!?」「」「」

信じられないあまり、四人は絶句した。

そりゃそうだ。防いだや弾いたのならまだわかるだろうけど、今は消したんだからな。

取り敢えず、今のうちに一人片付けるか。

俺は高速魔法でヴィータの背後に周りこむ。

「しまっ……」

「おせえよ」

俺はヴィータの首筋に、手刀をうちこみ昏倒させた。

「戦いの最中に、隙なんてみせてんじゃねえよ」

俺は気絶したヴィータと、他の三人に注意する。

「……今のも、ライトくん的能力？」

「そ。魔力には、波長つてのがあってな。この瞳はそれすら解析出来るんだ。その波長と、全く正反対の魔力の波長をぶつけると、そ

の魔法は中和され、消える」

「そんなことも出来るんだ……」

「今度はこっちから行くぜ」

俺はクルセイドの先端に、魔力を集中させる。

三人が身構えた瞬間、俺は三人の後ろから砲撃を放った。

「……なっ!?!」

シグナムはそれをレヴァンティンで弾き、フェイトはソニックムーヴで避け、なのははプロテクションで防ぐ。

だけど今ので三人に隙が出来た。俺はその隙をつき、シグナムとの距離を、一気に詰める。

「しまっ……」

「ストライクバスター」

零距离からシグナムにストライクバスターを放つ。

これで二人。

ラッキーすぎるな。てか、両方不意討ちみたいなもんだしな。力出される前に叩かないと、こっちがやられる。

さて、残る二人だが……

微塵も隙を与えてくれねえ。

「ライトくん。今のは何？」

警戒しながら、なのはが聞いてくる。もう不意討ちは通用しないな。

「『遠隔魔力収束』。魔力の収束を、自分から離れた場所で行い、そこから砲撃を放つ技だ。まあ、普通の収束と比べたらかなり威力はおちるけどな」

「……そう」

流石にもう驚かないか。まあこんなのは、俺の能力の片鱗に過ぎないけどな。

さて、これからどうするかだな。ヴィータとシグナムを倒せたのは出来すぎだったな、ホント。

だけどこの二人相手は……

「……勝ち目ねえな」

油断なんて微塵もないからなあ。さっきは幾分かあった。だがそれは四対一という構図からくるものだ。いくら歴戦の猛者でも、頭ではわかってても、心に僅かな隙が生まれ、そこをつけば結構楽だった。しかし今は違う。四人のうちの二人があっさりやられたのだ。隙なんてもう心の中の片隅にも見られねえよ。

「……参ったって言えば終わりになる？」

「絶対駄目」

「逃がさないから」

二人とも目がマジだ。こりやもう実戦のつもりでやった方がいいな。

「じゃあ、覚悟はいいかな、ライトくん」

「ぜんっぜんよくねえよ。てか、もうやめね？俺の能力ならわかったろ？」

「駄目。行くよ、フェイトちゃん」

「うん、なのは」

くそっ！こうなりややるしかねえっ！！

俺は急いで詠唱を始めた。

「燃え盛る紅蓮の炎よ、全てを飲み込み、その大きさを証明せよっ
！！」

俺は右手を前に突き出した。すると、フェイトの方も詠唱が終わったらしく、バルディッシュをこちらに向けている。

「サンダー……」

「フレイム……」

「レイジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイツッ！！！」

「ウエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエブツッ！！！」

俺の目の前から炎の波が、フェイトからは雷の本流が撃ちだされる。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツッ！！！！

炎と雷がぶつかり、辺りを轟音と光が支配する。

「デイバイイン……」

「っ！？」

今めっさ不吉な声が……

「クルセイドッ！！！」

「Protection」

急いで目の前にプロテクションを展開。視界が見えないので、殆ど
運任せだ。

「バスタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアツッ！！！」

ドゴオオオオツッ！！

「っ!!」

咄嗟に張った程度のプロテクションを軽く貫通してくるなのは、
イバインバスター。

俺は近くのビルに落下した。

いってえ〜〜。

もうこのまま撃墜されたふりしとけば……

「フォトンランサー……ファイアッ!!」

んなわけにはいかないかつ!!

「Active」

俺はフェイトが放ったフォトンランサーを、アクティブでギリギリ
かわす。

「フォトンランサーッ!!」

「っ!?!」

俺は一定距離をとった直後、二人に向けてフォトンランサーを放っ
た。

因みに、さっき複写コピーしておいた。

黄色い光球が二人に向かうが、あっさりかわされた。

「ならこれだ……」

俺はクルセイドをなのはに向け、桃色の魔力を集中させる。

「デイベイン……」

「デイベイン……」

なのはも俺が何をするつもりか気付いたらしく、俺と同じことをする。

フェイトは俺達の魔法の被害にあわないように距離をとった。

……いや、違うな。多分、なのはの意思を汲んだんだな。

なのはの顔を見る。

その顔は、自分のこの魔法に、誇りを持っている顔だった。

「……クルセイド」

「All Right」

俺はデイベインバスターを撃つのをやめた。

「……どういっつもりかな？」

「勘違いすんな。俺は俺の魔法を使うまでだ」

そう言った後、俺は蒼い魔力を集中させる。

「お前のデイバインバスターと、俺のストライクバスター……………」
どっちが強いか……………」

「勝負つてわけだね。望む所だよ」

そう言って、更に魔力を集中させるのは。

……………はあ。何でこんなガラにもねえことやってんだろ？

キャラやエリオの時だって、あんな俺のキャラじゃねえのに……………」

そんなに俺はこの場所が気に入っちゃったのか？

まだ二週間しかいねえってのに……………」

我ながら呆れるぜ。

……………でもまあ、

「悪くねえな……………」

俺はそう呟いた後、全ての魔力を集中し終えた。

「行くよ、ライトくんっ！」

「こっちも行くぞっ！」

して向こうにはまだ万全に近い状態のフェイト。

いくら俺でも魔力なしでは勝ち目がないので棄権して終わり。

つまり俺の負け。

『何だ、負けたのか』

「勝てるわけねえだろっつ！！！」

がっかりしたよという感じで肩を落としているアヤカ姉さんにそう叫ぶ。今は部隊長室に、前衛が全員揃ってる。

「でもライ兄すごいよっ！副隊長を二人も倒したんだからっ！！」

スバルが目を輝かせながら近づいてきた。因みにさっきまで抱きついてきたのを離すのに必死だった。こいつはもうちよい一目を気にして欲しい。

まあ、こいつの前で少しとはいえ本気で戦うのは初めてだからな。

「すごくねえよ。あんなの不意打ちみたいなものだし、次やったら確実に一人も倒せず終わるよ」

シグナムとヴィータが悔しそうにこちらを睨んでいた。まあ、あんな風におとされりゃなあ。

「なあライトくん。いくつか質問ええか？」

「ああ。別にいいぜ」

「何や。えらいあっさり承諾したな」

「そりやなあ。今の俺は気分がいいからな」

そう。例え試合に負けたとはいえ、姉さんズの手痛いお仕置きは無くなったのだ。嬉しくないはずがない。

「ふうん。じゃあ質問させてもらうで。まず、このディバインバスターを消したのやけど……」

「説明はいらねえよな？」

「うん。それより、この反魔^{アンチ}って魔法、あんまり乱用できひんの？」

「……どうしてそう思った？」

「フェイトちゃんのフォトンランサーを、君は“消す”んじゃないで、
“避けた”からや」

「……まあ、半分正解」

「半分？」

「この反魔^{アンチ}ってのは、構築式読むのと比べて、莫大すぎる情報量が頭の中に流れてくるから乱用はできない上、相手の魔力と全く正反対の波長を打ち込まないといけないから、半端じゃない集中力と魔力コントロールが必要になってくる」

「つまり、咄嗟に使うことができひん？」

「そう。しかもそれだけじゃない。波長を合わせるのは信じられない程の精密作業だから、二種類以上の波長に同時に防ぐことは不可能だ」

「……つまり、二種類以上の魔法には対応できひんのか?」

「まだ欠点はある。打ち消す為には、相手の魔力と同じ量打ち込まないと駄目だから、はっきり言ってこっちのデメリットのほうが遥かに高いんだ。だから、ここぞって時以外は使わないようにしてる」

「初めて会った時、私の拡散弾を防げたんは?」

「複写眼で一瞬で解析した後、当たる直前に同じ魔法で相殺した」

「ローブ君との模擬戦の、最後のあれは?」

「とっさに反魔アンチを使ったけど、相殺しきれなかった」

「やったら、反魔アンチなんか使わんと、同じ魔法で相殺したらいいんじゃない?」

「あのなはやて……いくらそっちの方が早いつたって、こっちは絶対に後だしで放つんだぞ?最悪、自分の手前で衝突するかもしれない。そしたら、その衝撃はどうやって防ぐ?」

「……成る程な」

「反魔アンチについてはこんなもんだな。他には?」

「じゃあ、この『遠隔魔力収束』やけど……誰にでも出来るん？」

「無理。複写眼で大気中の魔力を正確に把握してるから、俺は出来るんだ。この瞳がないとできっこないよ」

「……聞けば聞くほど反則的な能力やな、それ」

「まだまだ。この瞳の真価はあんなものじゃないさ」

俺が何気なく放った言葉に、全員絶句。

「ま、まだあんのか？」

「あー、まあな。例えば、フェイトの電撃を相殺した炎あるだろ？あれって俺に炎熱変換があるからじゃなくてさ、複写したから使えるようになったんだよ」

「つまり変換資質まで複写できるん？」

「そ。因みに魔力色もな。稀少技能の複写は流石に無理だけど。他にもあるけど、そっちは話す訳にはいかないんだ。時期が来たら話すかもしれないな」

「……信じていいねんな？」

「ああ。俺が話さないのは、お前らに危害を加えたくないだけだからな。それに俺、最高評議会の連中ってだいつっきらいなんだよね。あんな吐き気のする連中は中々いねえよ」

「ちよっ、ライト……仮にも次元の平和を守ろうとしてる方々なん

だから……」

「いやでもなフェイト。普通そのためにわざわざあんな姿になるか？」

また全員が絶句。

何で？

「ライトくん……最高評議会の方と会ったことあるん？」

「へ？あー、うん。あるけど」

『っ！……！』

もう何か慣れてきたぞこのパターン。

「……う、嘘やる？一等空尉の権限じゃそんなん……」

「ああ。因みに俺、元帥にまで発言許可が与えられてるから」

「……もう驚かん。もう驚かんで」

「いや別に、事実だし……」

「てか、何で君は一等空尉なんっ！？そんな権限あるんやったら、もっと上のはずやろっ！……」

「いやあ……俺達三人、命令違反の数が合わせたらもうすぐ三桁になるんだよね」

「……………何回降格されたん？」

「忘れた。因みに、俺が一番高かった時は、十四歳の時で階級は少将」

「君ホンマに何者っ！？後、今さらやけど敬語使った方がいい？」

「やめろつての。別にいいよ。そういうの苦手だし。それに、俺は少将なんて地位より、一等空尉で気ままに行動するほうが好きなんだよ」

俺がそう言つと、皆呆れたような顔になったが、口元は綻んでいた。

「まあ、話はこんなもんかな。後、念押しで言つとくけど、誰にもどんな状況でも、絶対に今の話を話すなよ。この話だけでも、結構危険だからな。特にスバルッ！！脳のキャパが小さいお前は特に注意しろよっ！！」

「うう……………ライ兄ひどい」

「今回は冗談抜きでヤバイ話なんだつての。後、身内とかにも話すなよ。ただ単に巻き込む形になるだけだから」

「え？じゃあ私らつて……………」

「ある程度の覚悟はしてたよな？まあ、基本は誰にも話さなかったら、危害は及ばないから安心しろ。この件のことは、これからは雑談なんか混ぜて話すことも禁止だからあしからず。わかつたなスバル」

「だから何で私だけっ!？」

「キャパが小さいから」

「また同じ理由っ!？」

スバルが何か落ち込んで、エリオとキャロに慰められているが気にしない。

「現時点でこの事を知ってるのは、聖王教会のカリムとシャツハ。陸士108部隊のゲンヤとギンガ、陸士307部隊のアヤカ姉さんとエリナ姉さん、伝説の三提督に、無限書庫の司書長のユーノ、査察官のヴェロツサ、フェイトの家族のクロノとリンディさん。本局のレジアスとオーリス」

俺が名前をあげる度に、全員が、特になのは達隊長陣が驚く。

「んでは……あいつらか」

「あいつら?」

『……ライトよ。その名前はだすな』

アヤカ姉さんが鬼の形相でこちらを睨んてきた。思わず悲鳴をあげそうになった。

「り、了解しました」

取り敢えず全力で頷いておいた。

「まあ、後は……特にないか。多分」

「いや多分て……」

「うるさいうるさい。もう話すことは話したし、俺は寝るぞ」

「まだお昼だよ？」

「お前ら四人のせいで、こっちはもう疲れてるんだよ。午後からの
フォワード陣の訓練は任せたぞー」

そう言った後、俺は部隊長室から出ていった。

I s i d e : : 了

s i d e : : 隼人

ライトが出ていった後、部隊長室は沈黙に包まれていた。

余程ライトの話に衝撃をうけたらしい。

……………まあ、当たり前か。

「……隼人にローブ君。聞きたいことがあるんだけど」

はやてが沈黙を破り、俺達にそう聞いてきた。取り敢えず頷いておく。

「二人は……ライトくんのこと、どこまで知ってるん？」

……そんなのはこっちが聞きたいよ。

「さあな。あいつがどんなことしてるかなんて、俺達にはわからねえよ」

俺の言葉に、全員が驚く。

「そ、それってどういっ……」

「ライトを見てれば、そのうちわかる」

そう言った後、俺も部隊長室を出た。

このままここにいたら、自分の情けなさに耐えられなくなりそうだから……

I s i d e . . . 了

side:ロープ

あーあ。行っちゃった。残された僕の身にもなってよねえ。

まあ、仕方ないか。

隼人の性格上、こうなるのはわかってたしね。

僕は無言で立ち上がり、部屋を出ようとする。

途中、フェイトが何か言い掛けてたような気がしたけど、気にしない。

僕も隼人程じゃないけど、今の自分が嫌になっちゃうからね。

ホント、情けないよね。僕達三人って……

そう思いながら、部隊長室を出た。

さて、今日はこれからどうしようかな……

取り敢えず、隼人と合流するかな。

ライトのほうは、今はそつととした方がいいしね……

I s i d e : 了

s i d e : ライト

部隊長室から出た後、俺はずっと屋上で寝転がりながら考えていた。話してしまつてよかつたのかと。

一応軽い感じで話したとはいえ、事の重大さが変わるわけでもなし。評議会の連中は、俺のこの力を平和の為の、管理局の最終兵器にしたいらしいが……

「矛盾してるよなあ……平和の為の兵器って」
こんな眼もつ俺を、野放しにしないのは正解だと思うが、それを自分達の力として使いたいというのはどうだろうか？

連中はこの眼の本当の意味を理解してるのか？
だとしたらよっぽどの馬鹿だぞ？

この眼はそんな代物じゃないんだから……

「…………お前らなら、どんな風に思うんだ？」

ペンダントを開き、中にある写真を見ながら呟く。

お前らなら……どんな答えを俺に教えてくれるんだ？

あの時みたいに、俺のことを導いてくれるか？

……ダメだ。疲れてるな。いない奴のこと考えても仕方ない。

俺は起き上がって、背中を軽くはらう。

「で、何の用だ？はやて」

俺は自分の後ろにいる人物にそう問いかけた。

「……少し聞きたいねんけど」

「なのは達や他の奴らには、内緒の話？」

「……うん」

「……説教なら聞かねえぞ」

「……自分でわかってるねんな」

「……ローと隼人には、何れ話すつもりだ」

そくだ……何れはゲンヤやギンガ、アヤカ姉さん達にも話さないといけない。

だけど……それはまだだ。まだ話す訳にはいかないんだ。

「……その事、二人には？」

「ちゃんと言ったよ。二人とも、納得はしてなかったけど、頷いてくれたよ」

「そうかぁ……」

はやてが黙ったので、俺も黙り込む。

……そういや、何で六課には俺の過去の因縁がこんなにいるんだ？

ホントに偶然かよ……

調べてみても、偶然としか言い様のない結果に終わったし……

俺はフォワード陣の訓練の時間の暇な時間を利用して、二週間で隊員全員の過去を調べた。

しかし、この部隊に集まったのは、本当に偶然としか言い様がなかった。

夜天の書……滅茶苦茶因縁あるよなあ。

まあ、正確には俺の因縁な訳じゃないんだけど。

プロジェクトFにはろくな思い出がねえや。

戦闘機人も人造魔導師も、何であんなもん作ったのかが理解出来な

い。

ただ普通に生きたかった人間が、実験される。

偽りの愛情を注がれ、何も信じられなくなったり、優しく泣き虫な奴が、自分の力恐がったりする必要が、どこにあったんだろう？

世界の為なら、一個人がどうなろうと関係ない。

管理局の闇の一つ……

虫酸が走る。

下らない……

そんな考えのせいで、あいつらは苦しんだのかと思うと、今でも許せねえ……

……俺は、何の為に力をつけたんだ？

あの時の夢は、まだ俺の中に残ってる。

でも、それは只の絵空事。

誰もが望むことなのに、誰もできない絵空事。

不可能な夢。

ガキの頃、高飛車ぶってあいつらと話した自分の夢。

いつか絶対叶えようと誓った大切な夢。

四人それぞれが、自分の夢を叶えたいと言った。

でも、何よりも俺が望んだ未来の光景は、もう取り戻すことは出来ない。

あの時の時間がもし戻るなら、俺はあいつらに何て言うだろう……

今の俺を見たら、二人は何て言うだろう……

「ライトくん？」

はやてが俺を呼んでいる。

……考えすぎだな。

「何だ？」

俺は平静を装いはやてに聞く。

「……実は君らの過去をちょっと調べさせてもらってんけどな」

「ふーん」

別にどうでもいい。話さなかったのは、自分の口から言うのが嫌だったからだし。

「三人とも……その」

「辛いことなんて言うなよ。人間なんて、誰でもそんなことが一つや二つはあるんだから」

「でもっ、あれは……」

「……ゲンヤには、取り敢えずその事話しててくれ。ギンガには言うなよ」

そう言って、立ち去ろうとする。

「待ってっ!」

しかしはやてに呼び止められる。

「何で君の過去は、四年前からの記録が一切ないん?」

……ああ。そのことが。

「それに、君の呼び名はクリアストライカーじゃなくて……」

「はやて」

俺は少し強い口調ではやての言葉を遮った。

「昔の名前だ。今の俺は、クリアストライカーとか言う呼び名でいいんだよ」

そう言うと、はやてが申し訳なさそうな顔になる。

……はあ。しゃあねえなあ。

俺ははやてに近づき、耳元に口を近付け、呟いた。

「お前、隼人の事好きだろ？」

ボンツ

瞬間、はやての顔が真っ赤になり、ショートした。

「なっ、ななななな何のこことか、わわわ分からんねんけどっ!？」

分かりやすっ!!

おいおいはやて。お前って実はうぶなのか？

「別に隠す必要はねえだろ。そりゃ七年前にあんなことがあったんじゃないなあ」

「なっ、何でそのことをっ!？」

「にっしっしっ。さあて何でだろうねえ。あっ、それとお前に言っ
とくことがある。まあ、これは恋の先輩としてのアドバイスなんだ
が……」

「？」

「恥ずかしがって想いを伝えられないくらいなら、いつそのこと当
たって碎ける覚悟で想いを伝えた方が、何倍もいいぞ」

そう言った後、俺は歩きだした。

「伝えられなくなってからじゃ、遅いからなー」

顔をゆでダコのようにしたはやてを放っておいて、俺はその場を去った。

そう言った後、今度こそ立ち去った。

……昔の呼び名、か。

信頼を込めて呼ばれていた名前……

管理局の希望の星と呼ばれていた頃の名前……

今でもたまに俺の事をそう呼ぶ人間がいる。

でも、今の俺はそんな大層立派な人間でも何でもない。

クリアストライカー……

クリアか。

臆病者の俺にはぴったりだな。

そう思い、俺は自室のベッドで横になった。

今日の夢見は悪そうだ。

……まあ、はやての恋が実ることでも考えながら、ゆっくり寝るか。

I
s
i
d
e
:
J

第九話 隊長陣との闘い（後書き）

え、それではゲスト、自分の作品の上空を舞う黒き侍より、坂田銀時。

ライト

「あれっ！？何か話違つくねえっ！？」

気のせい気のせい。誰かが来てくれるまでは取り敢えずこいつとお前のマンツーマンでやってもらっから。

ライト

「……もう突っ込まねえぞ」

銀時

「お前も大変だな」

ライト

「ああ、わかってくれる？あいつ信じらんねえくらい適当な奴でさ
あ」

お前もだろ。

ライト

「マンツーマンじゃねえのかよっ！……」

銀時

「てか、こいつってやる気あんのか？」

ねえ。

ラ&銀

「認めやがったっ!!」

銀時

「こつちでも自由な奴だなオイ」

丸投げが得意と言ってくれ。

銀時

「自慢じゃねえっ!!」

銀時

「てか、あんたはいいよなあ。そんな力があってさあ」

ライト

「んなこと言ったら、お前なんて神様から力もらってんじゃん」

銀時

「……その神様のせいで、俺死んだんだぜ？」

ライト

「……ドンマイ」

銀時

「ああ……」

ライト

「まあ、俺もローと隼人のせいでろくな目になってないからなあ。」

後、はやてのせいで女子寮に住むはめになるし……」

銀時

「あゝ、わかるわかる。あのチビ狸のせいで毎回ろくな目にあわねえんだよなあ」

ライト

「だよなあっ！今回なんか俺、あの四人と同時に模擬戦やれなんて言われたんだぞ？あり得ねえだろ」

銀時

「あの鬼教官四人となんて……あんた、よく生きてたな」

ライト

「ああ……二人とはいえ撃墜できたのは奇跡だよ」

銀時

「あゝあ。俺も早く強くなりたいなあゝ」

ライト

「俺は別にこれ以上はいらないかな」

銀時

「チートのくせに何言ってるっ！！」

ライト

「いやいや。若干チートだから俺。それにお前だってチートになる予定なんじゃないの？始めは非チートってたし」

銀時

銀時

「……だな。取り敢えず、宣伝しとくか」

ライト

「あゝ、じゃあめんどいけど俺から話すわ。この小説では、魔法少女リリカルなのはの二次創作の小説のオリキャラを募集してるから、もし要望があつたら、感想の欄のリクエストの所に書いてくれ。後、オリキャラじゃなくても、キャラ崩壊した原作キャラや、混ぜた作品の登場キャラクターでもオツケーだから、もし、もしっ、もしっ！要望があつたら遠慮なくバシバシ書いてくれ。銀時、タッチ」

銀時

「了了解。次は同じ作者の作品だけど、一応宣伝しておくぞ。俺が主人公の魔法少女リリカルなのはは、大空を舞う黒き侍。目が覚めたらそこは白い空間で、目の前には体が光ってる女がいた。その女の子によると、その女は神様みたいで、俺はどうやらその神様のせいで死んでしまったらしい。ぶざけんという気持ちをぶつけた結果、第二の人生を送れることに。果たして俺は、その人生をどう過ごすのだろうか？」

はいご苦労様。

あ、後銀時に言っておくけど、誰からも要望がなかったら、またお前に来てもらうから。

銀時

「はあっ！？それってずっとかつ！？」

YES。下手したら作品終了まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5976n/>

魔法少女リリカルなのはStrikers ~三人のストライカー~

2010年10月17日21時06分発行